
アーチャー ” が ” 憑依

ザッフィー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アーチャー”が”憑依

【Nコード】

N1136J

【作者名】

ザッフィー

【あらすじ】

以前友人のブログに掲載していたものを転載しました。よろしければ読んでください。また、基本的に一話ごとが短いことを事前に理解したうえで読みください。

その1（前書き）

無謀だつてことは承知している。だが書いてみたかった。だから書いた。それだけさ……調子に乗ってすいません。よろしければ読んでやって下さい。

その1

無限とも言えるほどの数の剣が突き立つ荒野。空は荒野を赤く染め、いくつもの巨大な歯車が回りあたりには火の粉が舞っている。

それが、錬鉄の英霊『エミヤシロウ』の座であった。

アーチャー　ネギ　憑依もの？　第一話

座の主、エミヤシロウは腕を組み目を閉じて静かにたたずんでいた。今、彼は己の分身が持ち帰った記録を見ていた。その内容とは、『聖杯戦争』。彼はアーチャーのサーヴァントとして限界した。望みはただ一つ……自分殺し。未来の自分が過去の自分を殺すという矛盾を行うことで自己の消滅を図ったのだ。

しかし、結果は失敗だった。しかも、最後にはマスターであった懐かしい少女とかつて愛した少女。そして、殺すはずだった過去の自分を逃がすために最強のサーヴァントと戦い、その命を六度奪い消滅するというものだった。

たとえ理想と現実の間で擦り切れ、磨耗してもエミヤシロウは彼女達を見捨てることはできなかったというわけか……笑うに笑えない。自己の消滅こそが、今エミヤシロウが望む全てであったはずなのに

……

自らを卑下する笑みを浮かべていると、また、自分から分身が生まれ離れていく感覚がエミヤシロウを襲った。感じからして、これは

守護者としての召喚ではない。

「次は何が起こるのか……せいぜい頑張ることだ」

本体であるエミヤシロウは、自身から生まれた分身に適当なエールを送った。

この時、彼はこれから自らの分身に何が起こるから予測できただろうか？

いや、できるはずがない。なにせ、今しがた生まれた分身は、異なる世界で新たな一つの生命として生きることになるのだから。

その新たな生命……赤ん坊の名を、ネギ・スプリングフィールドと言った。

その1(後書き)

まだネギま関係は出てきてない
今度からでてくるよ！

その2（前書き）

そのぐらいまでは書いてあるのでもう一話いってみよう。短いしね。

その2

広い講堂。中央には五人の子供達の姿があり、周りでは大人達が見守るようにして子供達を見つめている。

そう、今日はメルディアナ魔法学校の卒業式。

講堂中央に立つ子供の中には、緑のローブと帽子をかぶった少年ネギ・スプリングフィールドの姿もあった。

「うーん！ 私達もようやく卒業ね」

茶色い髪の少女、アーニヤがグツと体を伸ばしながらそうもらす。

「しかし、これからが大変なのだぞ？」

その容姿に似つかわしくない口調で喋るのは赤毛の少年ネギ。

「何よ！ 少しぐらい感慨にふけてもいいじゃない！」

「二人とも、今日はおめでたい日なんだから喧嘩するのはやめなさい」

ネギへとつつかかるアーニヤ。その様子に微笑みながらも嗜めるのは薄い金色の髪を持つネカネ・スプリングフィールド。ネギの従姉妹で姉のような存在だ。

「むう……仕方ないわね。そう言えばネギ、あんた修行の地は浮かび上がったの？」

アーニヤも日頃ネカネには世話になっているため、そう言われては引くしかない。

話題の転換だとばかりに先程もらった卒業証書に浮かび上がる“立派な魔法使い”になるための修行の地はどこかと尋ねる。

「私はロンドンで占い師をすることだったわよ」

「先ほど見た時はまだ浮かび上がっていなかった。しかし、そろそろ浮かび上がってもいいころだろう」

ネギは丸めて脇に抱えていた卒業証書を開いた。すると、まるで見計らったかのようなタイミングで光り輝く文字が浮かび上がり始めた。

浮かび上がった文字、それは……

“ A T E A C H E R I N J A P A N ”

日本で教師をすること、だった。

「校長！日本で教師ってどういうことなんですか!?!」

「ネギはまだ十歳なのよ!？」

ネギの修行の地を見てから、ネカネとアーニヤは校長につめかけに行った。当の本人であるネギはそんな二人にため息をつきながらも後を追ったわけだが……

「ほほう、日本で教師か……これまた大変な課題をもらったのう」

長く伸ばした髭を手で弄びながら校長は呟く。ネギはそんな校長をジツと見ていたわけだが、不意に二人の視線が重なった。

「修行先の学園長はワシ友人じゃ。頑張ってくださいなさい」

その言葉でネギは確信した。もちろん、全てと言っわけではないだろうが校長は自分の意を汲んでくれたであろうことに。

「了解した。爺さんの友人と言っのがいささか不安ではあるが、主席に恥じない程度には頑張ろう。それに丁度いい。直接顔を合わせたことはないが、向こうには手紙のやり取りをしているものがあるのでは。会うことにしよう」

こうして、見習い魔法使いネギ・スプリングフィールドは立派な魔法使いになるために……本当にそうなのだろうか？ とにかく、少年はまだみぬ地日本“麻帆良”へと旅立って行った。

その2（後書き）

一巻のカラー部ですかね。次回から麻帆良へ入ります。

その3(前書き)

更新です。

その3

「次は、麻帆良中央駅です」

電車内にアナウンスの音が響く。それを聞いたネギは、閉じていた目を開き呟いた。

「ようやく着いたか」

これより、世界で最も稀有であろう少年と元気な31名の少女達の物語が始まる。

「ふむ、これを登校風景と呼んでもいいのかいささか疑問だな」

周りにはバイクの二人乗りをしながら肉まんを売るもの。インラインスケートなどを履き、路面電車につかまっているもの。およそ、普通とは言い難いものがある。

これからの生活に若干の不安を覚えそうになったが、魔法使いの修行とはいえ子供を教師に迎え入れるような学園だ。ネギはいまさら

と割り切ることにした。

そのまましばらく走り続けていると、ネギの耳に隣を走る二組の少女に会話が入ってきてしまった。盗み聞きとは褒められた行為ではないがこれだけ密集していれば、聞こえてしまつのも無理はなかった。

「好きな人の名前を10回言つてワンと鳴くと効果ありやて」

「ほんと!? 高畑先生高畑先生高畑先生……」

会話の内容は恋愛占いのようだが、生徒が教師にと言うのはどうだろうか……いや、逆よりはいいのか? とどうでもいいことをネギは考えていたが、その占いを迷わず実行した少女に少しばかり忠告することにした。

「占いなんてものは参考程度にしておいたほうがいい。そうでないと痛い目にあつぞ」

既に女子高エリアに入っているにも関わらず聞こえた男……というか少年の声に二人の少女は揃って首を声のした方へと向けた。そこにいたのは勿論ネギ。

「ななな、何ですつて〜!! ガキが偉そうなこと言つてんじやないわよ!」

どうやら、二人の少女はそれぞれ思考が違つほうにいつたらしい。ツインテールにオッドアイが特徴的な少女はネギが偉そうなことを言つたという方向へ。

黒髪の長髪の少女はどうしてネギが此処に? といった具合だ。

「経験者からの忠告……アドバイスのつもりだったのだがね。気にさわったのなら謝ろう」

その言葉を聞いた瞬間、ツインテール……明日菜の中のネギの評価が生意気なガキから大人ぶった生意気なガキにグレードアップした。

「占いでなんかあったん？」

「まあ、過去に少しな」

怒りのゲージが上昇の一途をたどる明日菜をよそに黒髪の少女……このかとネギは話を続ける。

「そうなんか。そういえば、ここは女子校エリアなんやけど……迷子？」

「そ、そうよ！ 此処はアンタみたいなガキがいていい場所じゃないわー!!」

迷子というのはともかく、その言い方はどうなんだと明日菜に若干批判めいた視線を送るが効果はないようだった。

「別に迷子というわけではない。此処に来たのはちゃんと理由がある」

「理由って何よ!?!」

唾が飛んできそうなほどの大声に若干顔をしかめながらネギは答え

た。

「どういわけか学園長は常に女子校エリアにしていると聞いたのでな。会うためには此処に来るしかなかった。文句は学園長に言ってくれ」

「あゝ、確かにじいちゃんいつもこつちにおるな」

「ああ、一時変態かと疑ってしまったほどだ」

二人が学園長に関する談義を交わすなか、放っておかれた明日菜は何かが限界に達したようだ。

「アンタみたいなガキが学園長に何の「そこらへんにしてあげてくれないか、明日菜君」

再び明日菜の怒号が響こうとするなか、それを止める声があった。

その3(後書き)

短いですね。でもその9までは書いてあるのでそこまでは改善され
ませんのであしからず。

その4（前書き）

今年最後の投稿その1

その4

「学園長!?! 一体どういうことなんですか!?!」

場所は変わって学園長室。そこに、一人の少女の叫び声が響いていた。

「明日菜、ちよつと落ち着きー」

「落ち着いてるわよ!?!」

10人が10人反論しそうなものだが、あいにくとそれを突っ込むような人物はここにはいない。学園長はフォツフォと笑い、タカミチは苦笑。このかは何とか明日菜をなだめようとしており、ネギは腕を組んで黙ったままだ。

「学園長、そろそろ話をすすめていただきたい」

大人二人が動かないため事体に進展が見込めないと判断したネギはその重い口を開いた。

「おお、すまなんだ。して、君の住む場所であつたな」

既にネギが2 - Aの担任を務めることは聞かされている。だからこそ明日菜は一人叫んでいるのだが……そこに、学園長はさらなる爆弾を投下した。

「このかに明日菜ちゃん、ネギ君を二人の部屋においてくれんか？
まだ住むとこ決まってるの」

「絶対にお断りです!!」

「明日菜」

即答だった。その後も、学園長と明日菜の不毛な言い争いが続いていたのだが、除々に明日菜が押され始める。しかし、援護の声は以外な所からやってきた。

「学園長、この際私を女性の部屋に住まわそうとしているのは置いておくが嫌がつている相手に無理強いするものではない」

皆の視線が一斉にネギへと向けられる。だが、ネギはそれを気にした風もなく言葉を続けた。

「誰か泊めてくれないかは自分で探す。だからそれ以上彼女に頼む

のはやめてくれ」

「むむむ、しかしのう」

「じーちゃんもしつこいでー」

このかは別にネギを泊めることに反対ではなかったのだが、明日菜があまりにも反対するのと学園長のしつこい態度にこの時ばかりはネギの意見に賛同したようだ。

「……分かったわい。後日でいいから誰の部屋に泊まるか報告するように頼むわい」

「了解だ」

この後、ネギは指導教員の源しずなを紹介され2 - Aへと向かった。

おまけ

「じれは……」

「全く、あの子たちったら」

2 - Aの教室、その入り口に施された罫（黒板けし）。

「退屈はしなさそつだ……」

ネギは隣にいるしずなでさえ気づかないほどの小さなため息を一つ漏らす。されど、その口元は、わずかに緩んでいた。

その4（後書き）

こっちをもう一話か二話投稿予定です。

その5（前書き）

気付いたら年を越していた。

その5

「私はネギ・スプリングフィールド。今日から君たちの担任、そして英語を担当することになった」

教卓の前に立って自己紹介をする少年に。いつもは騒がしいはずのクラスが静寂に包まれていた。

「何か質問があるなら受け付けるが？」

先ほどうしずなが撤去させたイタズラをしかけたとは思えないほど静かな生徒たちにネギは若干の拍子抜けを感じるが、時間も限られているため話を進める。

「え〜と、はい」

手をあげたのはどことなく狐をイメージさせる様な目つきの少女。その首からは立派なカメラをぶら下げている。

「朝倉和美君だな。何だね？」

一応学園長室からの道のりの間、出席簿で名前と顔を確認したが念のためもう一度出席簿で確認しながら指名する。

「君が先生っていうのは……」

「本当だ」

ネギの返答に生徒たちが一斉にしずなの方へと顔を向ける。教室の

端で様子を見ていたしずなは苦笑しながらうなずいた。

「「「う、うそおお〜!?」「」」

生徒たちは急に大声を上げてネギへと詰め寄っていく。人ごみの向こうでは「私がこんな特ダネを逃すなんて〜!」と聞こえてくる。ネギは必要以上に近寄ってくる生徒の質問に律儀に答えていった。ちなみにネギの就任最初の授業はまあ成功と言う形に終わった(約二名にいざござは起きたが大喧嘩にはならなかった)。

もうそろそろ日も暮れてくるといふ頃、ネギは眉間にしわを寄せながら歩いていた。

「住居のことをすっかり忘れては……ガラにもなく緊張していたのか?」

既に時間は放課後……女子寮の場所は知ってはいるものの、いきなり訪ねて泊めてくれと言うわけにもいかず、ネギは途方にくれていたのだ。

「やれやれ、今日はタカミチにでも……む?」

ふと前を向くと、何かを抱えて歩く女生徒がいた。生徒が非力なのか、それとも荷物が重いのか生徒は右へ左へフラフラしている。

「危険だな……」

平地ならば転んだですむやもしれないが、生徒が進む先には手すりのない階段があるのだ。生徒はもう階段の目前まで到達してしまっている。大声をだせば驚いてバランスを崩してしまうかもしれない。ネギは荷物をその場に下ろし、生徒の元へと駆けつけた。

「うんしょ、うんしょ」

宮崎のどか、彼女は委員会の仕事として複数の本を抱えて運んでいた。いつもなら親友である綾瀬夕映や早乙女ハルナと一緒にいるのだが、今日は別行動だ。

「うんしょ、うん……わ、わわわわああ!!」

運動が苦手である彼女には抱えている本の重量は重たすぎた。本のバランスが崩れると、それにつられる様に彼女もバランスを崩す。前のめりに階段の脇へと落ちそうになり、恐怖にのどかは目をつぶった。

「きゃっ!!」

しかし、やってきたのは硬い地面にぶつかる感触ではなく何かに服の背中を引っ張られる感覚。のどかが一体何がと後ろを振り向く前に……

「無事か？」

言葉少ないながらも自分を気づかっていることが分かる言葉にのど

かは顔を赤く染める。

引き上げるぞ、と言つたネギの言葉も心に在らずと言つた様子で聞いていた。

その5 (後書き)

次はいつ更新できるだろう？

とりあえずはチートが先かな。

その6(前書き)

更新だよ

その6

あの後、本を集めるのを手伝っていると神楽坂がやってきた。どうやら先程のを見ていたらしい。ガキに何であんなに力があるのかと問い詰められたので、無かったほうが良かったのか？ それだったら彼女は助けられなかったが、と皮肉気に言っただけで黙ってしまった。その後彼女は宮崎の手伝いをすると言って去っていった。去り際に睨みともう少ししたら教室へ向かえと言っ言葉とともに。

「さて、来てみたはいいが」

中には複数……というか30を超える気配がある。教室という場所から予測するに自分の受け持つ生徒達+ がいるのだろう。問題は何のためにいるのか、だ。何時までもここで立っているわけにもいかず、扉を開けた。

「……ようこそ！ ネギ先生！！」

パン、と音をたてて放たれるクラッカー。中から飛び出たキラキラした紙ふぶき等が扉を開けたネギに降りかか……らなかつた。

「「「ふえ？」「」」

自分達の予想に反した結果にクラッカーを手に持っていた者達は素
つ頓狂な声を上げてしまう。

「これは一体何の騒ぎだ？」

ネギは扉の影から姿を現し、そう問うた。

「なるほど、私の歓迎会か」

「そうそう、これからお世話になるしね！」

「先生が早く馴染める様に皆で準備したんだよ！」

部屋の中心へと連れられ、この騒ぎの真意を聞いたネギは生徒達か
ら次々に声をかけられていた。最初はその容姿に似合わない雰囲気
と言葉遣いに戸惑っていたのだが、ネギが決して悪い人物ではない
と分かるやいなや直ぐに順応していった。

時間もそこそこに、ネギはようやく生徒達から開放されかけていた。
それを好機と見たネギは、気配を消し、誰にも気づかれない様にそ
つと席を立った。

「刹那、あの先生をどう思う」

「普通ではないことは確かだな」

部屋の隅、壁にもたれながら二人の生徒が会話をしていた。その内容となるのは、今日クラスの担任となった若すぎる少年のことだった。

「そうだな。だが、私には彼の実力が全く探れないんだ」

「龍宮もか」

魔法を知る“生徒”の中では屈指の実力を持つこの二人をもってしても探ることのできない少年は一体どれほどの力を持っているのか。二人は頭を悩ませるばかりだ。

「何か悩み事かね？」

「「！？」」

突如かけられた声に二人の体が硬直する。頭の中に浮かぶのは等しい時間の間に、だ。

「ふむ、何を驚いているのかしらんが少しいいかな？」

「あ、ああ。何だい、ネギ先生」

先に我を取り戻した龍宮が対応するが、その声は非常に硬い。

「実は二人に頼みごとがあつてな」

「なん、でしょう」

続いて言葉を発した刹那もやはり声は硬いままだった。

「こんなことを突然言うのは非常に気がすすまないのだが……私を、君たちの部屋に住ませてくれないか？」

「……は？」

二人の体から緊張というものが一瞬にして消え去った。

おまけ

「ぷ、くくく……ぷはははは！ 茶々丸、ちゃんと記録しただろうな」

「刹那さん、龍宮さん兩名の呆けた顔。確かに記録しました」

「よくやった。今度これだからかってやるっ」

おわっつけ

その6 (後書き)

年末年始の忙しさを舐めてました。チート書く暇がない。とりあえず今日はこれで勘弁。

その7（前書き）

更新遅れてすみません

その7

「どうぞ、寝るのはここを使ってください」

「すまないな」

ネギは背に持った荷物をドスンと床に降ろした。そして……

「さて、何から聞きたい？」

桜咲刹那、龍宮真名、両名へと向き直った。

机を間に挟み、向かい合う。どうやら、二人はこちらのことを計りかねているようだった。

「では聞くが、何故私たちの部屋に？」

「簡潔に言えば、都合がよかったからだ。一部屋に二人、そしてなにより君たちは“こちら”側だろう？」

「気づいて、いたのですか？」

「そんなものをぶら下げていれば、な」

刹那の横に置かれた通常のものより明らかに大きい竹刀袋に目をむ

ける。ネギはその中身を正確に把握していた。

「私に関しては？」

「気配が違う。それは桜咲にも言えることだが、君はそれが非常に顕著だ」

「なるほど」

自覚があったのだろう。納得がいった、と龍宮は静かに首肯した。

「他には何かあるか？」

「ネギ先生、貴方はここへ何をしに来たのですか？」

「分かりきったことを……修行だよ」

「それは本当かい？」

そう言ってくる龍宮の目には、ネギを見定めようとする意思が見て取れた。明かすことに別段問題はない。ならば、とネギは己の内を正直に明かした。

「私は所詮見習いだ。これから先、何をするしないに関わらず“見習い”という称号は邪魔でしかないだろう」

そう、見習いができることなどが知られている。先のことなどまだ決めていない。だが、“見習い”という称号が邪魔なことは分かっているのだから。

「……分かった。君を歓迎しよう、ネギ先生。私のことは真名でいい。これから一緒に住むのにいつまでも他人行儀というのもなんだしな」

「私のことも刹那でかまいません」

「ああ、これからよろしく頼む」

今、ネギの新しい帰る場所が、ここに決まった。

「マスター」

「何だ？」

「扉の前にこれが」

差し出された従者の手に握られているのは一通の手紙だった。

「……………」

無言のまま手紙に目を通す。本人に自覚はないかもしれないが、その顔は序所のにやけ始めていた。

「茶々丸、明日の夜でかけるぞ。長年の文通相手からのお誘いだ」

一際大きく、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは口をゆが

めた。

その7（後書き）

チートもそろそろ更新したい

その8(前書き)

更新

その8

「初めまして、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

「初めまして、ネギ・スプリングフィールド」

人々が眠りへと落ちる頃、闇の福音と英雄の息子は会合した。

「さて、何から話そうか……いざとなると思い浮かばないものだな」

「ほう、レディを呼び出しておいて話すことがないとは……とんだ紳士がいたものだな」

「面目ないな。そちらに質問があれば受け付けるが？」

「では、ここ一年私に手紙を送ってきたのは何が目的だ？　そもそも、何故私がここにいると知っている」

エヴァが懐から取り出したのは十通程の手紙の束。その全ての差出人はネギ・スプリングフィールド。宛先はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルとなっている。

「君がここにいると知ったのはとあるものに調べてもらったからだ。目的は……言ってしまうえばコネが欲しくてな」

「コネだと？」

「六年前に少々事件があつてな。それからというものの、魔法使いの村から出してもらえなくてな。知り合いなど同じ村の住人しかいなかったのだ」

「なるほど……だが、何故私なのだ？ 貴様はタカミチと知り合いなのだろう？」

「確かに、タカミチならば顔も広いだろう。何せ有名人だからな。だが、タカミチでは紹介できる人物はどうしても“立派な魔法使い”に限られてくるだろう？」

ネギの言葉にエヴァは眉をしかめる。“千の呪文の男”にして“立派な魔法使い”、現代の魔法使いの象徴たる英雄“ナギ・スプリングフィールド”の息子であるのならば、当然ネギも“立派な魔法使い”を目指しているものだと思っていた。だが、実際は違うようだ。

「なるほど……どうやら貴様はそこらの魔法使いとは違うようだ。それで、理由はそれだけか？」

「最強の魔法使い、闇の福音……魔法の師事を受けるのならば、これ以上の人物はいないと思わないか？」

一瞬の静寂。そして、エヴァは何か壊れたかの様にして笑い出した。

「はは、ハハハハハハハハ！ 千の呪文の男の息子が私に師事を仰ぐだと！ ククク、貴様私に何かを要求するということがどういうことなのか分かっているのか？」

「それ相応の代価が必要だろうな」

「ならば、私が何を要求するかは分かっているな？」

「登校地獄……私の父がかけた呪いをとくためにその身を捧げると言うのだらう？」

「正確には血、だがな」

ようやく笑いが収まったのか、今は腕を組みその様子からは考えられないほどの威圧感をかもし出している。

「さあ、どうする？ 私に血を捧げるか、それとも抵抗してみるか？ 最も、その時は容赦なく叩き潰させてもらうな」

懐から魔法薬の入った小型のフラスコを取り出して弄ぶ。その様子からは、どちらを選択しても構わないという意思が見てとれた。

「血を捧げれば私に修行をつけてくれると？」

「さあな、私は悪の魔法使いだ。気分一つで決めるかもしれない。それに、本来ならばこの呪いは十二年前に解かれていますのものです。それを代価に、というのは都合がよすぎるのではないか？」

確かにそうだろう。さらにいえば、ネギに魔法を指導するということは麻帆良に留まるということだ。十五年もこの地に縛り付けられたエヴァをさらに留めようというのだから生半可な代価では納得すまい。故に、ネギは決心をした。誰にも明かしたくない自分という存在を、エヴァに教えることを……

「私が払う代価は二つ。一つは呪いの解除、そしてもう一つは……私という存在、その全てを君に明かそう」

「存在の全て……？」

何世紀にも渡ってこの世を生き続けてきたエヴァにとって、たかだか十年程度しか生きていないネギなど千の呪文の男の息子だという点が必要ならば注目するに値しない存在だ。だが、今この瞬間にそれを出してくるということは確実に何かがある。それも、自分の退屈を紛らわせる程の何か……

「別に気にいらなかったら突っぱねてくれてかまわん。呪いの解除も優先しよう。君に損な申し出ではないと思うが？」

時間にして僅か一秒。その短い時間の思考で……

「いいだろう、貴様の存在とやらを聞かせてもらおうか」

そう、結論を下した。

結果として、ネギはエヴァを師と仰ぐこととなる。

その8 (後書き)

ぬーん。次で書いてある分のストック切れです。

その10からは分量UPを意識していこうと思う。

その9（前書き）

更新遅れてすいません。ようやくテストが終わりました。
今回の話は独自解釈満載でおおくりします。

その9

「それでは、始めるぞ」

「構わん。ただ、余り愉快なものではない、とだけ言っておこう」

エヴァンジェリンは魔法を発動し、ネギの記憶の海へと潜っていった。

「……………」

「……………」

沈黙。現実の時間にして凡そ一時間。エヴァンジェリンがネギの全てを見るのに要した時間だ。

「これは、本当のことなのか…………？ 貴様は異世界…………いや、平行世界の英雄、守護者という存在であったと？」

「君が見たものが全てだ。証拠ならば既にその一端を見せたはずだが？」

エヴァンジェリンは思い出す。今まで誰もなし得なかった呪いの解呪を容易くしてみせたナイフを。また、それを理解不能な方法で取り出した目の前の男を。

「ああ、確かにそうだ。認めよう、お前は这个世界で一番特異な存在であるとな」

「それは光栄なことだ。それで、そろそろ結論を聞かせてもらえないか？」

「結論……？ ああ、そういえばそうだったな」

ネギの記憶の特異さに、思わず本題を忘れていたエヴァンジェリンは思考する。

この男の存在は極めて特異。その前世とも言えるエミヤと言う名であったころの能力や生き様、その全てがこの世界では想像できないようなものだ。面白い……暇を潰すどころか、自分の時間を目一杯注いでも問題ないほどに。だが、一つだけ気になった……

「おい」

「何だ？」

「お前は正義とは何だと思う？」

この世界の魔法使いにとってはさして珍しくない言葉。そして、自分が狙われる際に、相手がよく使っていた言葉だ。しばらくの沈黙のあと、ネギは口を開けた。

「正義とは何なのか……そんなことは、私が聞きたいくらいだ。私が目指し続けた唯一……だが、それがなんなのかは結局分からずじまいだ。だが、唯一言えるのは、全てに共通する正義は存在しない。

それだけだ」

「そう、か」

その結論は、奇しくもエヴァンジェリンが見出したものと同じだった。かつての敵対者達、彼等にとっての正義とは私（化け物）を排除することであり、私にとっての正義とは、化け物こけものになってしまった自分を助けてくれる“何か”だったのだ。

彼等と私の正義は異なっており、自分の正義だと思っただ彼等に“自分とは異なる正義”を持って殺されかけた。結局、正義とは人によって異なりその当人にとって都合のいいものでしかないのだ。それが、エヴァンジェリンの出した結論だ。

「ネギ・スプリングフィールド、お前を我が弟子……いや、対等の存在として認めよう。私はお前を認め、お前は私を認める。文句はあるか？」

「ない。よろしく頼む、エヴァンジェリン」

「エヴァでかまわん」

「ならば、君も好きに呼ぶといい」

「なら、私はエミヤと呼ぼう。一人ぐらい、かつての貴様の名を呼ぶものがいてもよからう？」

「ああ、かまわないさ」

こうして、6000年を生きた真祖の吸血鬼とかつて英雄にまでなった男は互いを対等の存在として認め合った。この絆はある意味他の

何よりも強いものとなっていく。

その9（後書き）

これでストックは全部なくなりました。これからはチートと一週間おきに更新していく予定となっております。私用で予定通りに更新できないこともあるかと思いますが、そこらへんはご了承ください。

その10(前書き)

戦闘って難しいよね。だじやら、できるだけ簡素かつ少なくしてしまつのは仕方無いと思うんだ。

その10

「はあああああああー!!」

「おおおおおおおー!!」

南の島を思わせる砂浜で、ネギとエヴァ……二人の拳が衝突した。

「さて、早速だが貴様がどの程度できるか見せてもらおう」

二人の会合から三日の時間が既に過ぎていた。準備が整ったとの知らせをうけたネギはエヴァ宅を訪れてすぐに、この”別荘”へと連れてこられたのだ。曰く、この中なら学園の結界によって封じられている魔力は回復するらしい。さらに、破損しても修復が容易とのことであることが修行場所選ばれたのだ。

「ああ、そういえば見せたのはエミヤの頃の記憶だけだったな」

つまり、エヴァはエミヤとしての実力は知ったものの肝心のネギとしての実力は全く知らないのだ。仮にも師となるのならば、弟子の力を把握することは必至だろう。

「そういつわけだ。どうせ傷ついても直ぐに治る。思い切りやって構わんぞ」

「了解だ」

背負った長杖を手に、ネギは詠唱を開始した。

魔法の射手・光の37矢！

魔法の射手・闇の37矢！

白と黒の光の矢がぶつかり、弾け飛ぶ。魔法使いにとって基礎となる攻撃魔法、”魔法の射手”。二人の戦いはその打ち合いとなっていた。基礎とあなどるなかれ、応用がしやすく、また数も大量に容易できるこの魔法は戦いにおいて非常に役立つ。それに、基礎であるが故に腕の差が如実に表れるのだ。

魔法の射手・雷の83矢！

魔法の射手・氷の83矢！

互角……エミヤと言う過去の経験を持つとはいえ、この世界に生を受けて10年たらずで最強の魔法使いたるエヴァと並ぶのは賞賛に値する。しかし、この程度で実力を測りきれはるはずもない。二人の戦いは次の展開へとつつっていった。

戦いの歌！

魔法の射手から一転して自身への魔力供給による身体強化を施すネ

ギ。接近戦を行うつもりなのだ。実力を測らんとするエヴァにそれを避ける理由はなく、エヴァもまた身体強化を施した。

先ほどまでとは違って変わって戦いは地味なものとなった。なんせ両者ともにまだ一撃も攻撃をくらっていないのだ。いなし、かわし、防ぐ。次々と繰り出す拳や蹴りの嵐を、互いに完全に見切っているのだ。

「ふっ」

小さな声とともに放たれたネギの高速の拳。それを当たり前のようにかわしたエヴァは突き出された拳をからめとり……

「はっ！」

そのまま投げ飛ばした。投げ飛ばされたネギも追撃を受けまいとすぐさま体制を立て直し、高等技法”虚空瞬動”を用いて再びエヴァへと向かっていった。

戦いを初めておよそ二時間。それだけの時間戦闘を行っても二人は互いに無傷。精々服がボロボロになっている程度だった。

「やれやれ、埒があかな」

「そうだな。だが、もういいだろう」

「ああ」

「「終わらせよう」「」

二人から発せられる膨大な魔力に、足元の砂が弾け、空をまう。まるで競い合うかの様に魔力を放出する二人……先に動いたのは、ネギだった。”瞬動”、地上においての高速移動技法である。先ほどまであまり使われていなかった技法をつかってくるネギにエヴァは顔を樂しそうにゆがめる。一体、何をしてくるのかと。エヴァの頭の中にあるのはそれだけだった。

魔法の射手・光の57矢！

無詠唱で放たれた57の光の矢。その軌道を見たエヴァは、直ぐにその狙いを看破した。

(目くらましか！)

着弾。エヴァの足元へ向けて放たれた魔法の射手は、砂塵を巻き上げネギの姿を隠した。

「ちっ、どこだ！」

本来ならば、エヴァにこの程度の目くらましは意味はない。なぜなら長き戦いの時を生きたエヴァは非常に高い魔力察知能力を身につけているからだ。しかし、先ほどまで感じ取られていたネギの魔力を今は微塵にも感じない。完全な隠蔽……つまり、身体強化すら行

っていないということだ。今のエヴァに殴られれば軽傷程度ではすまない……運が悪ければ死ぬかもしれない状況に、迷いなくその身を置くネギに、エヴァはそういう男だと知っていても戦慄した。

解放、魔法の射手・戒めの風矢！

そんな事を考えていたからだろうか……解放された呪文が放たれるその瞬間まで、エヴァはネギの接近に気付くことができなかった。

「遅延呪文！？」

魔力の感知から発動が恐ろしく速い。そのことからエヴァはネギが”遅延呪文”を使ったと判断した。しかし、それが分かった所で回避が間に合うわけもなく、エヴァは風の矢によって体を締め付けられ捕縛される。

「なめ、るなああああああ！」

その身に宿す膨大な魔力を放出し、力づくで拘束を破ろうとする。エヴァをもってすればその時間は一秒もあれば十分だろう。しかし、ネギの行動の方が遥かに速かった。なぜなら、ネギは既に準備を終えているのだから。

解放、雷の暴風！

風を伴う雷が、エヴァの体を飲み込んだ。

その10(後書き)

言い訳乙。そう思った人は正解です。しかし難しいものは難しい。これから上達していくしかないでしょう。何か疑問等がありましたら感想にてお知らせください。

その11(前書き)

段々とアーチャーの口調がブれていく。そしてグダッた感じがいなめない。もう話を進めてしまおうか。

その11

「それで、私の腕はどうだった？」

「どうだったもなにも、学園ではタカミチと爺ぐらいしか相手にならんだろう」

「ほう、それは嬉しい評価だな」

二人は机に並べられた料理を見事なテーブルマナーで食していった。

「まさか遅延呪文を使ってくるとは……いささか驚いたぞ」

「ああいう技術は身につけておいて損はないからな」

食後の一杯にエヴァ秘蔵のワインを開け、杯を交わす。最も、ネギは子供の体であるため本当に一杯だけだが。

「んむ、それでいつ使った？」

「遅延呪文か？」

「少なくとも、私はいつ遅延呪文を準備したか察知できなかった」

少なくとも魔法に関しては自分が上だと思っているエヴァにとって、

遅延呪文を察知できなかったのはいささか屈辱だったのだろう。その言葉には自分を卑下にする感情が若干含まれている。

「そうだな……ここに入ってからおよそ三時間。となると、丁度四時間ほど前だな」

「んな!？」

驚愕。確かにネギは四時間前だと言った。遅延呪文は使い手が少ない技法だし、エヴァ自身もそんなに使用したことはない。だが、少なくとも四時間程の時間を簡単に遅延させられるとは思えなかった。

「ちよつとまで、それは本当なのか？」

「ああ、私は常に二種類の魔法を遅延させている。最も遅延させられる時間は四時間が限界なのでその度に術式を構成しなおしているがな」

開いた口が塞がらないとはこの事か、エヴァはネギの前で間抜け面を曝していた。

「そろそろ、私の口から今までどのような修行をしてきたか伝えておくか」

「あ、ああ。そうだな」

ネギの声でようやく気を取り戻したエヴァは頬を赤く染めながら首肯した。そして、ネギの口から麻帆良に訪れるまでの修行の内容が明かされていった。

「私が特殊だと言うことは君も分かっていると思うが、実はそれが魔法にも影響を与えていてな。世界を救った英雄”ナギ・スプリングフィールド”の息子、”ネギ・スプリングフィールド”には親譲りの膨大な魔力。そして、それを使いこなせるだけの才能はあった。しかし、実際にその体を動かしているエミヤシロウの魂にはとことん才能がなかった……才能のある体と才能の無い魂、この二つに齟齬が生じるのだ」

「齟齬？」

「ああ。例えば火を灯す魔法だが、習得と言う点においてならば私は初めて呪文を唱えた時に成功した。だが、次は魔力を多く込めて火力を強めようとしたが、これがなかなか上手くいかなかった。魔法の射手も似たようなものだ」

「なるほど、ようするに……」

習得は速いが、練度が中々上がらないというわけだ。それもかなり深刻である、と言うことだろう。事実、ネギは戦闘で使えそうな呪文は先の実力試しで使ったものを含めて十程度しかない。

「それが分かっただけからは、ある程度習得する呪文を絞り練度を高める修行をしながらそれらをより生かせそうな技術の習得に時間を費やした。と、まあその結果が先ほどの戦いと言うわけだ」

「そういうことか。では、今貴様が使ええる呪文で一番高位なのは」

「雷の暴風だな。実用に足る呪文ではあれが一番強い。まあ、放つだけならもつと上があるが」

エヴァは頭の中で今後の方針を模索する。この厄介そうな弟子をどうそだてたものかと、考えを巡らせているのだ。

（奴が充分だと判断したものに關しては教える必要はないな。となれば魔力の効率運用や総合戦闘等が主か。そういえばエミヤはやけに器用だったな。魔法薬や、魔法具の作り方を教えれば面白いものを創るかもしれん。ああ、ついでにアレも教えてみるか？ 人の身には負担が大きいが、エミヤなら使いすぎて暴走……何て無様な真似はしないだろう。ククク、面白くなってきた）

「もういいのか」

いつのまにやら紅茶を飲み始めているネギは漸く気を戻したであろうエヴァに声をかける。途中から顔に笑みを浮かべていたことから察するに、当人にとって楽しい・面白いと思える思考だったのだろう。

「エミヤ、修行は明日からさっそく始める。平日は最低二時間、休日は最低五時間を行う。この別荘をフル活用するからな。覚悟しておけ」

「了解だ。たとえ来るのが夜中でも、ここを使えば睡眠不足に陥る心配もなさそうだ」

最後にもう一度ワインを酌み交わし、二人はそれぞれ床についた。

とある女子寮の一室。

「ネギ先生、それは……」

「刹那か。これはイギリスの知り合いに協力してもらい鍛ったものだ」

ネギの手に握られているのは一本の小刀。丁度ネギは手入れをしていたのだ。

「見せてもらってもよろしいですか？」

「構わんよ」

一応鞘に戻して刹那に手渡す。刹那は鞘から引き抜き、あらゆる角度からその小刀を検分した。その表情はとても真剣で、戦闘中のもとなさして変わらないほどだった。

「素晴らしいです。ネギ先生はこれほどのものを鍛つことができるのですか」

「さすがに一人では無理だがな。まあ、趣味の様なものだ」

これほどのものを鍛っておいて趣味と言っては世の鍛冶師が泣くのではないかと刹那は思ったが、言わぬが花と口を開かなかった。

「気に入ったのなら譲るが……他にも何本があるから出してやるう」

「い、いえ！ そのようなことをしていただくわけには！」

「気にするな、ほとんどただで鍛ったものだからな」

最初は材料は持ち込みで少しばかりの金を払って器材の貸し出しと手伝いを頼んでいたのだが、譲った影打ちが大層な値段で売れたらしく、これからも影打ちを数本鍛ちそれを譲ることを条件に材料も向こうが用意、さらには器材の貸出料もいらなと言われたのだ。なので、ある一時からネギは一銭もかけずに刀剣を鍛つことができていたのだ。

「そら、好きなものを選ぶといい」

「本当によろしいので？」

「私が持っていてでも殆ど使ってやれんからな。ただ放っておくより万倍よかるう」

「そこまでおっしゃるのなら……」

遠慮気味に、刹那は十本近く有る中から一つの小太刀を選んだ。どうやらその一刀が一番自分の気がなじむようだ。

「ありがとうございます」

「何、構わんよ」

「ところでネギ先生」

「何だ？」

さっぱり空気とかしていた真名が声をかける。

「私には何かないのかい？」

「あいにくと銃器は専門外だ」

この日から数日の間、真名が不機嫌だったとか何とか。それを見たネギは、とりあえず使えそうな魔法具をいくつか見つけてくるって真名に贈った。

その11(後書き)

真打ちと言っているのがあってそれが数本鍛った内の一番いいもの。影打ちはそれ以外のもの。要するに本番と練習。そんな感じであるように剣心が出てきてたと思う。そんな気がする。

その12(前書き)

昨日更新の予定でしたが一日遅れました。すみません。

その12

「さて、これで終わりだな」

たったいま見終わった数十枚のプリントを整える。たまに出す英語の宿題だが、こうして多くの人が解いたものを採点していくというのは中々に面白い。基礎はできているのに応用が全くダメな者、基礎も応用も文法的にはあっているのにスペルミスを侵している者、基礎から全くできていないものなど個性が様々なのだ。

「ごくろうさまです、ネギ先生」

「源先生、ありがとうございます」

差し出されたお茶を一口飲み、息をつく。源先生は何かと私のことを気にかけてくれ、非常にありがたく思っている。何せ教師をするなど以前を含めても初めてだ。至らないことは非常に多い。

「どうですか？ 授業の方は」

「今はまだ問題なくこなすので精一杯です。最も、余裕が出来た所で2 - Aを最下位から脱出させられるかどうかは疑問が残りますが」

タカミチも無理だったようですし、と言う私の言葉に源先生は苦笑いをしていた。2 - Aはテストでぶつちぎりの最下位みたいだからな。と、その後も続けて世間話などをしてしていると、廊下から慌ただしい足音が聞こえてきた。

「せんせい！」

「たすけてー！」

乱暴にドアを開けて入ってくるなりそんな言葉を発してきたのは2 - Aの佐々木まき絵と和泉亜子の二名だった。何かとめんどごとを起こす2 - Aだが、大人しい部類に入る和泉の様子を見るにいつもとは毛色が違うようだ。

「そんなに慌てて、何かあったのか？」

「校内で暴力が！」

「見て！ この傷！」

突き出された手にあるのは擦り傷、それも赤くはなっているが僅かに血が出ている程度のものだ。一応二人の全身をしてみるが、大きい怪我があるようには見えない。まあ、年頃の女の子には擦り傷一つでも問題なのかもしれないが、放っておくわけにもいきまい。

「案内してくれ」

「こつちだよ！」

「ウチらについてきてー！」

駆けていく二人に続きながら思った。大事にならなければいいがな、と。それは、いい意味でも悪い意味でも規格外の麻帆良だからこそ思ったことだった。

「女子高生アタック！」

「キャッ！」

現場についてみれば、そこには高等部の女生徒が放った強烈なアタックを受ける大河内アキラの姿があった。何とか受けようとしたものの、ボールの威力を受け切れずに尻もちをついてしまっていた。

「ホラッ、あんたにも！」

転がるボールが高くトスを上げられ、先ほどと同じ女生徒がアタックの態勢に入る。狙いは大河内に駆け寄っていた明石裕奈だろう。だが、そうはさせない。大河内の時は間に合わなかったが、今度は違う。

「それっ！」

放たれたアタック。その軌道を見切り、目標である明石との間に体を滑り込ませ、ボールを受け止めた。

「なっ!?!」

「君達は何をしていたのか私の知る所ではないが、少なくとも今の行為が褒められたものではないことぐらいは分かる。それで、だ。君達は私のクラスの生徒に何をしていた？」

私の現在の見た目は十歳の子供。侮られない様に若干の威圧をこめて言葉を発する。説教時の新田先生にも及ばないそれだが、彼女達には充分だったようだ。どこか余裕がなくなつたかのような顔をしている。

「ネギ先生！」

「助けてくれたの？」

「佐々木と和泉に呼ばれたからな。最も、大河内の時は間に合わなかったが」

視線を高等部の女子生徒達から外さずに答える。一向に答えない彼女たちだが、それでは後ろめたい事をしていたと言っているようなものだど理解しているのだろうか。視線を反らさない私と答えない彼女達。互いに動かぬまましばしの時間が過ぎた。

「くっ！ 皆、帰るわよ！」

動かぬ状況に耐えかねたのか、リーダーと思われる人物の言葉を合図に逃げる様に立ち去って行った。此方としては、簡単に事が終わってくれてラッキーだった。

「ちょっと！ 大丈夫！？」

「ネギ先生！ ご無事ですか！？」

「む？」

振り返って見ればそこには佐々木が神楽坂とクラス委員長である雪

広あやかを引き連れていた。明石を助けにいったころから一つ気配が離れていくのは感じていたが、どうやら彼女がこの二人に助けを求めに行っていたようだ。

「少なくとも、私は全く大事ない。大河内と明石、君達はどうか？」

「私は大丈夫だよ」

「うん、私も」

どうやら二人も大した怪我はないようだ。過剰に心配してくる雪広を適当にあしらいながら安堵の息をつく。

「四人には話を聞いておきたいのでこの後職員室についてきてくれ。神楽坂と雪広、とりあえず問題は解決した。わざわざ来てくれた事に感謝する」

全てはネギ先生のため！ 別にアンタのためい来たんじゃないわよ！ 等の声を背に、私は四人を引き連れて職員室へと戻った。

「ネギ先生」

「新田先生、どうしました？」

教育実習生としての仕事で報告書の様な者を記入していたのだが、そこに声がかけられる。鬼の新田、生徒達からそう恐れられている

教員だ。最も、同じ教師である私から見れば生徒思いの素晴らしい人なのだが……

「2-Aの体育の授業なのですが、担当の教員が息子さんが突然高熱を出したそうで帰ってしまったので、代わりに監督をして欲しいんですが……よろしいですか？」

「分かりました。場所はどこですか？」

「屋上でバレーだそうです。それでは、よろしくお願いします」

自分の業務に戻る新田先生に一礼し、書きかけの書類を手早く片付け屋上に向かった。

おまけ〜見ていたタカミチ〜

「ん〜、僕の出番はないかな？」

高等部とのいさかいを止めに来たネギ君を遠目で見ていたけど、どうやら上手く事は済んだようだ。いざとなれば出て行くつもりだったが、その必要もないらしい。

「何をしている」

「エヴァかい？」

後ろから声をかけられる。……気付かなかった。さすがエヴァ、と言いつべきか自分の未熟さを恥じるべきか。

「何を考えているのか知らんが、アレを見ていたのか？ ご苦労なことだ、アレならよほど下手な真似はせんだろくに」

「まあ、分かつてはいるんだけどね……」

昔からネギ君は大人びて……いや、大人だった。そこらの大人、それこそ僕よりもよっぽどだ。最初は戸惑ったものの、今ではそれが彼だと認識してしまっている。……ナギとは大違いだ。

「所でタカミチ、もうすぐ学年末テストだな」

「ああ、それがどうかしたのかい？」

「もし”教育実習生”のネギ先生が最下位から脱出させるような事があれば、正規教員の面目丸潰れだな」

「な!?!」

それは……まずい。ただでさえ新田先生にも出張が多いとはいえ担任としても少しどころにか出来ないか？ と言われているのだ。ベテラン教師であるあの人にはかなわない。もしかしたら、お叱りを受けることもありうる。

「くくく、貴様のアホみたいな顔が見れて満足だ。それではな」

「あ……」

遊ばれた、のか。僕もまだまだな……

くおしまい〜

その12 (後書き)

ちよつと余裕がなくここまでです。次回でバレー編も終わらせますが、次々回からは期末(日常)編が続くかな? エヴァ編は今小説では既に消滅したので修行風景ぐらいは書けたらなと思っています。

その13 (前書き)

お待たせしたというのに分量が半分以下です。
話の都合上、これ以上内容が浮かばなかった(泣)

その13

「あんだ達の校舎隣じゃない！ わざわざ中等部の屋上に来るなんて！」

ドアノブに手をかけたところで聞こえてきた怒声。先ほど一騒ぎあったというのに、もう次が来たのだろうか……このまま反転したいと思いつつも、教師としての義務からゆっくりとドアを開け放した。

「龍宮、これは一体何の騒ぎだ？」

「先生か、真名でいいと言ってるだろう？」

「公私の区別はつけるべきだろう？」

これまでに数回あった真名の言を軽く流し、話の続きを促す。いつもの如く説得は無理だと判断したのか、真名はすぐに状況を事細かに説明してくれた。

「なるほど、そういうことが」

先に佐々木達にちよっかいをかけていた高等部の者達が半ば……いや、ほぼ間違いない嫌がらせのつもりで屋上のコート陣取っていたらしい。全く、ご苦労なことだ。

「先生、そろそろ行かなくていいのか？」

「む？ ああ、アレは不味いな。止めてくるとしよう」

真名と話している内に両者達の間には一触即発の空気が漂っている。これ以上放置しては取っ組み合いの喧嘩に発展しかねない。

「そこまでだ」

「な！？ アンタは！？」

「アンタ、何でここにいるのよ！」

正直、耳が痛い。

「コートについて争っているようだが、残念ながら両者ともに退場してもらおう」

「」「どっぴいじことよ！？」」「」

……本当は中がいいんじゃないのか？

「聞くが、二二二はどっだ？」

「どっぴいじ……」

「屋上？」

「そうだ。それで、周りを見て何か気付かないか？」

「「？」」

両者達のリーダーだけでなく他の面々も周囲を見渡すが皆クビを傾げるばかり。どうやら、言いたいことは伝わらないようだ。

「君達がやるうとしているのは球技だ。当然、ボールを思ったように扱えず想定外の方向へ飛んでいくこともある」

「……あ」

ここまで言えば、大体の生徒は気付いたようだ。……神楽坂は分かっているさそうだが。

「分かったか？ ここは周りの壁が特別高いわけじゃない。ボールが飛んで落ちていく可能性が非常に高いんだ。体育館の使用許可は取っておいた、2-Aはただちに移動を開始してくれ」

高等部を睨みつける者も数名いるが、皆移動を開始する。高等部の者は啞然としていてそれにすら気づいていないようだ。屋上の件に對して、そんなに衝撃を受けたのだろうか？ 少し考えれば考えつきそうなものだが。いや、麻帆良にそれはあてはまらないか。

「君達もここでの球技は控えてくれ」

未だ呆ける高等部の者達を背に、私も体育館へと向かった。

その13 (後書き)

短くて申し訳ない。

実際、あそこでバレーするのは非常に危ないと思うんだ。

大学……正直しんどい。ゆっくりできるかな？ と思ったら週六で六時起き。土曜も午前は学校です。授業時間も90分と長い事この上ない。

誰かこんな私を助けて。

幕間（前書き）

日常は日常で書くのが難しいです。
短いですがご勘弁を。

幕間

その1 異常気象

「ネギ先生、お茶です」

「すまん、絡繰」

「先生、今は私的な時間ですので茶々丸で構いません」

「そうだったな、すまない」

「謝る必要はありません」

僅かに頬を緩ませる茶々丸。茶々丸は人間では無い……簡単に言っ
てしまえばロボットだ。故に笑うと言うのはありえないのかもしれない。だが、それでも私は茶々丸が笑っていると、そう感じた。

「って、お前らは何をいい雰囲気醸し出してるんだ！」

「む？ いたのかエヴァ」

「いたに決まってるだろう！ それよりエミヤ、貴様今日は釣りに
行くと言っていないかったか？ デカイのを釣ってふるまうともな」

確かにそう言った。つい先日自分で言ったことだ、忘れるはずがな
い。だが、考えてもみてくれ、今日は……

「嵐だぞ？」

「分かってるさ！　だが、何でこんな季節に嵐が起きるんだ！　おかしいだろう！」

「一般人には魔法より異常気象の方がまだ受け入れられるさ。案外、これも魔法使い同士の戦いの余波かもしれんぞ？」

「そんなわけあるかー！？」

その頃、日本から南東の太平洋。

「俺は、貴様を倒してアイツの所へ帰る！」

「ハハハ！　私は貴様を踏みつぶし、私は世界を手に入れる！」

荒れる海の上、漆黒のマントを身に纏う男と光り輝く鎧を身に付けた男が退治していた。両者の体からは吹き出す様に魔力があふれている。

「いく、ぞおおおおー！」

「かかって、こいやああああー！」

魔力で覆われた二振りの剣が、衝突した。

「あーあ、いい年してヒーローごっこなんかしちゃって」

「勇者ごっこ、らしいよ？」

「どっちも同じよ」

「そうだね」

激しくぶつかり合う両者を遠くから眺める女性。二人は長い杖にまたがり愚痴に聞こえなくもない言葉を発している。

「あ、接近する魔力反応あり。結構速いわね、そろそろトンスラしなきゃマズイわ。あいつ等止めて」

「お〜け〜。雷の暴風〜」

「「ぬわー……！？」」

「よし、回収して逃げるわよ」

女性はそれぞれ一人ずつ抱きとめ、すぐさまその場を離脱した。ほどなくして、異常気象はおさまったという。

その2 憧れ

「……………」

カリカリ、と言うペンの動く音だけが辺りに響く。現在、2-Aは英語のミニテスト中だ。担当教員であるネギは何をしているかとい

うと……

「ふむ」

読書をしていた。ほんのタイトルは、”世界の名剣大全集”。本と言つよりは図鑑に近い代物である。

「あの、ネギ先生」

「ん？ 綾瀬、何か質問か？」

「いえ、そうではないのですが……何を読んでいるのか少し気になったもので」

そう言われたネギは本のタイトルを生徒たちへ向ける。

「今は丁度カリバーンの所だな」

「カリバーン……確かアーサー王が岩から引き抜いたと言う剣でしたわね。ネギ先生は英国出身、やはりアーサー王はお詳しいのですか？」

「よく知っているな雪広。まあ、それもあるが、アーサー王は憧れだよ。私の、な……」

どこか憂いを帯びた顔に、生徒達は見とれてしまった。この時のネギの顔はとて10歳の少年には見えなかったという。

「それより、残り時間は3分だが、皆終わったのか？」

「「あー!?!」」

優秀な者達はともかく、あまり成績がよろしくない者達は急ぎ残りの問題に取り掛かる。その様子を見るのもそこそこに、ネギは窓の外を仰ぎ見る。

「アーサー王、か……」

その眩きは、鳥たちの囀りの中に消えた。

幕間（後書き）

バイト探さなきゃなーと思う今日この頃。
眠くて眠くてたまりません。体調だけは崩さない様にしないとね。

その14 (前書き)

三週間ぶりの更新になってしまいました。
勘を取り戻すために軽い感じで書いてます。

その14

「……………」

2・Aの本日最後の授業である英語を早めに終わらせたネギは、椅子に座ってクラスの様子を確認していた。

「今日の晩御飯なにー？」

「うーん、からあげとかどう？」

「さんせーい！」

「それでさ、駅前の喫茶店のケーキがすごくおいしくてさー」

「えー、私も行きたーい！」

「今度皆で行こー！」

活気に溢れるいいクラスだ。多少の例外はあるが、クラスは笑顔に溢れている。だが、ここ一週間程観察してもついぞ現れなかったあの話題を、ネギは皆に振ることにした。

「皆、少しいいか？」

基本ネギは必要以上の事を自分から話すことは無い。聞かれれば可能な限りは答える、というスタンスを取っているため、今回のネギからの呼びかけに興味津津と言った感じでクラスは静まってくれた。

「私はこの一週間、君達を他クラスと比較しながら観察してきた。結論として、君達と他クラスでは決定的な違いがあることが分かった。何か分かるか？」

クラスの者達は近場の席のもので相談するが答えは中々出てこない。自覚がないとは、少しネギも驚いた。

「質問を変えよう。既に終わろうとしている今週だが、今週は普段の一週間とは違うはずだ。それは何だ？」

「んーと、部活がなかった？」

「佐々木、それも関係あるから間違いではない。質問を付け足そう。何故、部活がなかったと思う？」

「それは……」

既に気付いていたものが半数強。そして今気付いた者が約十人。そして、未だ気付かないものが数名。

「そう、今週がテスト週間だからだ」

顔から血の気が引いていくものが何人か。主に赤いのと青いのと黄色いの。

「中にはキチンと勉強している者もいるだろう。だが、教室で全くその話題が出なかったことには正直驚いた」

「まあ、うちはエスカレーター式だからねー」

そういう意識がダメなのだが、全く意識できていないようである。タカミチは一体何を教えてきたんだ。

「確かに、エスカレーターのため身が入りにくいと言うのもあるだろう。だが、見習いとはいえ私は教師だ。黙って最下位等と言う不名誉な称号を受けさせるわけにはいかない」

正教員であるタカミチが出来なかったことが出来るわけがない、と言いつても出来る。だが、自分は普通ではないし、教師となったからにはその責務を全うすべきだろう。

「幸いなことに、私は女子寮に住んでいる。一つのクラスに傾倒しすぎるのはよくないが、そこは見習いということに納得してもらおう。私は今日からテストまでの間、出来るだけ寮のロビーにいることにする。質問があるものは聞きに来てくれ。英語以外でも構わんそれと……」

授業始めに持ってきていたプリントを皆に配布する。

「今回の英語のテスト範囲の要点を纏めたものだ。これを見てしっかり勉強するように」

「「はい」」

さて、これでしっかり取り組んでくれるといいんだが……何か嫌な予感を感じながら、その日の業務を終えた。

「ネギ先生、ここなんだけど……」

「ああ、これはだな……」

その日の夜、早速何人かの者達がロビーにいる私の元を訪れていた。大河内に和泉、那波に雪広、少々強引に連れてきた真名に刹那等、比較的真面目な者たちだ。

「それにしても、ネギ先生がわざわざおっしゃって下さったのに、これだけしか来ないなんて……」

「ゆーな達は後から来るって言ってたけど」

まあ、来てくれたただけ良い方だろう。突然真剣に取り組めと言われ
ても、早々出来るものではない。

「ネギ先生、ここえーか？」

「ああ」

出来れば、この行動が結果に繋がってくれればいいんだが……しかし、現実には厳しいものでネギの知らぬ所で大きな問題の種は着々とその芽を伸ばしていた。

その14 (後書き)

とりあえずレポートに埋もれそうで埋もれない作者です。

更新の乱れは申し訳ありません。休日が一日だと殆ど何もせずに終えてしまいます。

バイト……したかった近場のファミマは現在募集してない模様。

ちくせう……

その15 (前書き)

二丁友よ、お前はいつもタイミングが悪いぜよ・・・

その15

「ネギ先生！ 皆が図書館島で行方不明に！」

「「ええー！？」」

今朝方渡された最終課題に続いてこのトラブル。ただえさえ低かった運が拍車をかけて悪くなっている気がする。ネギはため息を抑えることが出来なかった。

「それで、詳しく話してくれ」

何とか慌てる宮崎のどかと早乙女ハルナを宥め、詳しい事情を尋ねる。しかし、その内容がまたネギに頭痛をもたらした。曰く、クラス解体、小学校からやり直し。頭の良くなる本が図書館島に！ と、言う二種類の噂。それがこの騒動の原因であった。

「いくら私立といえど、小学校からやりなおしなんて暴挙がまかり通る筈がなかるうに……」

「え？ あー、確かに」

常識的に考えて無茶な内容であるそれも、麻帆良と言う理由で無茶ではないと言う意識が生まれる。

学園に施された大規模な認識障害の結界の影響だ。多くの魔法使いが活動する場においては必要なものなのかもしれないが、こつやつて常識を欠如してしまうほどの強さはいささか問題であろう。

「……私はこの事を学園長に報告し、指示を仰いでくる。皆は自習をしていてくれ」

「で、でも！ 学校に知らせたら明日菜達が！」

当然、罰を受けるだろう。だが、それもいたしかたない事だろう。

「それに、先生も最終課題があるんでしょ！ もしコレの所為で不合格なんてことになったら！」

「最終課題？ 一体何のことですか！？」

不味い事になった……今朝方渡された最終課題。2 - Aを最下位から脱出させると言う内容までは見られていないものの、それを渡された事自体は何人かの生徒に目撃されてしまっている。この時ばかりは付近に生徒がいたと言うのに無造作に最終課題を渡してきたし、ずな先生を恨んだ。

「先生になるための最終課題！？ ああ、こんなときに明日菜さん達はなんてことを！」

案の定、最終課題の存在を知ったことで生徒達が騒ぎ出した。普通に声をかけた所で、この騒ぎはおさまらないだろう。仕方なく威圧をかけながら声を出そうとするが、ここで救いがやってきた。

「2 - A！ 一体何を騒いどるんだ！」

新田先生。その威厳ある叱責に、喧騒に包まれていた教室が一斉に静まりかえる。

「ネギ先生、これは一体どうしたのですかな？」

ここ最近是比较的静かであったのに、と言う声とともに此方にやってくる新田先生。丁度良い、学園長だけでなく、ベテランであるこの人の力も借りるとしよう。

「どうやら、生徒数名が昨夜の内に図書館島で行方が分からなくなつたようです。今から学園長の指示を仰ぎに行こうと思つていたのですが、ついて来て頂けますか？」

「行方不明！？ それもよりにもよつて図書館島で！ 分かりました、直ぐに学園長に報告しましょう」

先に教室を出る新田先生に続く。不安そうに見つめる生徒達に

「ちゃんと自習しているんだぞ」

と残して。

「学園長、直ぐに搜索を開始すべきです！」

「私も一度だけ訪れた事がありますが、あそこには正直度が過ぎる畏がありました。何時間違いが起こつても不思議ではありません」

直ぐに行方の分からない生徒たちを搜索すべきだと新田先生と主張するが、どうにも様子がおかしい。行方不明の生徒の中には学園長の孫も含まれている。だと言うのに、学園長からは全く焦りの色を

感じない。ここに来て、この事件が一気に胡散臭いものに感じ始めた。

「そのこと、なんじゃがのう。実はもう生徒たちの安全は確保できてる」

「それは本当ですか！」

安全確保の言葉を聞いたとたん学園長へと詰め寄る新田先生。本当に、教師の鏡だ。それに対して、目の前にいる”魔法使い”は……

「うむ、昨夜の内に司書が安全を確保。今頃は特別反省室でこつてり絞られてる筈じゃ」

畏だらけかつ複雑な作りをしている図書館島でこつても迅速な対応、そして、安全を確保したと言う結果。ここまで上手くいっていると逆に怪しさが増すというものだ。それに、新田先生の相手をしながらも、学園長の意味深な目線が此方を見つめている。

「……………」

つまり、はそういうことだ。ああ、気に入くない。

その15 (後書き)

何とも微妙な終わり方。このイベントもさらっと流そうかと思いましたが、それも何か寂しいので実行決定。次回はネギが地下に潜り
ます。

その16 (前書き)

更新しようと思ったら寝ていた。反省はしているだがこうk)ry

「……こつちか」

地図を片手に地下深くへと潜っていく。早乙女達に借りたものだが中々どうして、詳しく書かれている。罫の数々だが、最近に発動したと思われる痕跡が残されている。最も、再設置しなおされていたが。発動されても面倒なので辺りに解析を行いながら慎重に進んでいく。

頭の良くなる魔法の本とやらが置かれているとされる場所までもう少しだ。

「あれは……」

開けた祭壇の様な作りの広間に鎮座する巨大な石像。あれには魔法的な力を感じる。それも、覚えのある魔力だ。やはり、間違いない。

「一体どういっつもりなのか、説明してくださいませね」

「ふおふおふお、ワシが見ているとよく気付いたのう」

響き渡る年老いた声。それは麻帆良学園学園長”近衛近衛門”のものだ。今回の件はすべてこの男が仕込んだことだったのだ。

「そんなことはいい。何故、このような真似を？」

「最終試験じゃよ、魔法使いとしてのな」

そこからは学園長の思惑が明かされていった。神楽坂と近衛の部屋に住まわせようとしたがそのあてが外れ少々強引に今回の件を起こすしかなかったことなどなどをだ。

だが、ネギが聞きたいことはまだ明かされていなかった。

「何故、一般人を巻き込む様な手段をとったのです」

長瀬等は正直一般人の範疇に収めるのはどうかと思っではいるが、少なくとも巻き込まれたメンバーの半数以上は特別な力を行使できるわけでもない一般人だ。今回の件、魔法使い達の”魔法を秘匿する”と言っほば共通と言っていい思想に大きく反するものだろう。

「さつきも言っただが少々強引に行っしなくては。何、安全の確保には十二分注意してあるから大丈夫じゃよ」

的外れな回答にネギはこれ以上質問するのをやめた。大体、使うなら多くいる魔法生徒を使えばいいのだ。今回のメンバーに学園長の孫がいることに、くだらない思惑でもあるのだろう。他のメンバーは不可抗力とでもいうのか。本当に、くだらない。

「それでは、私は行きます。皆は発見し次第地上に連れ戻します」

疑問ではなく断定。学園長の了承を聞くこともなく、ネギは床に開いた大きな穴へその身を投じた。

「ここは天国です」

「そっやなあ」

横になって本を楽しそうに読む少女。

「楓！ 見るある！」

「おお、これは凄まじい水きりでござるな」

楽しそうに湖で遊ぶ少女。

「あすな……砂糖と塩間違えてない？」

「そんなわけないでしょ！ ちゃんと作ったわよ！」

「じゃあ何でこんなに不味いの！」

「知らないわよ！」

何やら料理にいそむ少女。

彼女達と連絡が取れなくなってからおよそ半日。学園長が安全を確保したとはいえ、無事で良かった。そう、思わなくもなかった。この光景を見るまでは……

「およ？ ネギ坊主ではござらんか。一体こんなところで何を……」

長瀬が気配に気づき声をかけてくる。それに反応して他の面々もこちらを向く。皆一様に何故ここに、そんなことを言いたげな視線を向けてくる。つまり、コイツ等は自分達がどういう状況に置かれているのかを全く理解していない。

「全員、こちらへ来て並べ」

「へ？」

「速くしろ！」

今の私は教師だ。説教をするなどあまり柄ではないが、責務は果たす。

「並んだな。では……」

ぱあん、と乾いた音が六度響き渡る。

「え？」

「は、反応できなかったアル」

一瞬おいて、自分達が頬をぶたれたのだと理解する。最も、何故ぶたれたのかは全く理解していなさそうだが。

「ちよつとアンタ！ 何すんのよ！」

「何を、だと？ それは此方のセリフだ。お前たちは一体何をしている」

掴みかかろうと伸ばされた神楽坂の腕をつかみ、締め上げる。

「っ！？」

「お前達が起こしたこの行動がどれだけ皆に迷惑をかけていると思

っている。いや、迷惑をかけたなど思っていないのだろうな。でなければ呑気に遊んでなどいられるはずがない」

「あ……」

そこで綾瀬と近衛が状況を察したようだ。自分達は図書館島の深部に潜ろうとした。図書館島は罾などが多くあり、危険である。だからこそ地上組メンバーと密に”連絡を取り合っていた”。それが途絶えれば当然、地上組は何か起こったのかと慌てるだろう。

「お前達が遊び呆けている間、クラスメイト達はお前達の身を心配していたよ。学園長が安全を確認している、と言う言葉を聞いたあともな。宮崎なんかはお前達が無事だと聞いたとたん泣き崩れた程だ」

それを聞いてようやく全員が自分達がしたこと愚かさを自覚したようだ。

「すぐにここから出るぞ。言っておくが、お前達は新田先生に厳しく叱ってもらってから覚悟しておけ」

「げっ！」

「そんな〜！」

「じゃあない、かな」

「うう、そうですね」

「うう、説教は苦手アル」

「拙者もでござるな」

一応、皆を見つげる前に辺りを探索して出口は見つけてある。場所を教え、先行させた後で私は……

「腹いせだよ、これはな」

ここに来た時に感じた視線が今は無いのを確認して、生徒たちと共に落ちてきたであろう未起動のゴーレムへと矢を放ち、破壊した。

その16 (後書き)

次回で期末テスト編は終了予定なり。

その17 (前書き)

更新です。次回からは修行+日常をちよつと書いてみる予定です。

その17

『それでは、学年末テスト初日一科目目開始して下さい』

放送を合図に、生徒達は一斉に問題に取り掛かった。

「おめでとう、とても言おうか？」ネギ”先生”

「よしてくれ。それに、私になつたのではなく生徒達がしてくれたんだ」

円卓に向かい合わせに座り、茶々丸作の料理に舌鼓をうつ二人。無事に学年末テストを終えた二人はネギの正式な教師就任の祝いを行っているのだ。

「くくく、それにしてもまさか一位をとるとは思わなかったぞ？これでタカミチをいじる材料ができた」

「それに関しては新田先生の力だろうな」

ネギは数日前の事を思い浮かべた。

「お前達は一体自分達が何をしたのか分かっているのか！」

生徒指導室にて新田先生の怒声が響く。間違いなく周囲にも響き渡っているだろう怒声は、生徒たちを委縮させるのにはこの上なく有効であった。

「テストを間近に控えていると言うのにお前達は……佐々木！ 聞いているのか！」

「は、はいい！」

地下からの脱出ルートにあった長い長い螺旋階段。各所に張り巡らされていた問題付きの岩壁はネギが即答で答えていったものの、鍛えている上に気を使える長瀬と古、そして同じく無意識かつ少量とはいえ気を使っている神楽坂はともかく、それ以外の三人は疲れがたまっているようだ。

「司書が早急に安全を確保してくれたから良かったものの、これほどの問題を起こしたのだ。何のお咎めもなし、とはいかんぞ」

半分はお咎めの部分に反応しているがもう半分は司書の部分に反応している。それもそうだろう、長瀬に事の経緯を詳しく聞いてみたが、彼女達は司書になどあっていないのだから。

「新田先生、折角ですので彼女達には先生特製の補習を受けさせては？」

お咎めなしにはできないとはいったものの、罰を決めかねている新田先生に提案する。これは新田先生がかつてからバカレンジャー等

と呼ばれている成績不振者達の事を心配していると聞いたからだ。
……他の生徒たちの面倒を見なければいけないためそこまで手が回らない、と言う考えも多分にあったが。

「むう、しかし無理やり勉強させるといのは……あくまでも自分から学ぼうとするのが大切です」

「新田先生のおっしやられることも良く分かりますが、彼女達は”頭の良くなる魔法の本”なんてふざけたものを探しに行ったのです。このまま待っているだけで良い方向へと向かっていくとは思えません」

神楽坂他数名から恨みがましい視線を送られるが知ったことではない。全て事実だ。

「ネギ先生の言うことにも一理ありますな……分かりました。今回の騒動の罰を補習とし、私が監督を行います」

「お願いします。どうか”厳しく”やってやって下さい」

いやああああああ！ とどこからか聞こえた気がしたが、当然無視した。

結果、新田先生の補習により神楽坂達は平均を大きく上げ、また他のクラスメイト達の点数も全体的に右肩上がりとなり、僅差で平均点学年一位の称号を獲得したのだ。

「さすがは麻帆良の鬼、と言ったところか。奴は学園で敵に回したくない人物堂々の一位だからな」

麻帆良にて定期的に行われている無差別アンケートによって張り出される様々なランキング。その中の一つに新田先生は頂点として君臨しているらしい。エヴァ曰く初めて選ばれた時からその順位は不動のものであるらしい。色々とはっちゃけている麻帆良の人間達も、新田先生だけは敵に回したくないとのこと。本当に、凄い人だ。

「正直、あの人ほど生徒達のことを思っている人を私は他に知らないよ」

「ほう、貴様の記憶には一人教師の知り合いがいたはずだが？」

思い浮かべるのはブレてはつきりと定まらないとある人物の顔。覚えてるのは教師だったことと、とても自分と親しく恩人と言える存在だったことだけだ。自分が恩義を感じていたとはいえ、それだけで優れた人格者だったなどと断定することはできない。

「さあ、な」

その返答に何を思ったのか、エヴァはそれ以上何も言っただけでこなかつた。自分がとある目的を抱いてからは、あるのはただ憎悪のみだった。ただ恨み、目的の成就だけを願っていた。だと言うのに、憎悪に染まってから初めて、“エミヤ”は衛宮士郎だったころの事を思い出してみたいと、そう思った。かつての自分を見れば、己の憎悪は激しさを増すだろう。だが、何か救われるものもあるのかもしれない。それは人の一生分とはいえ、守護者の任から完全に解放されたからこそ、芽生えた思いだったのかもしれない。静かに、夜

は更けていく。

その17 (後書き)

何だか新田先生がGTNになってますね。まあ、別にかまわないでしょう。私は新田先生好きですし。

アーチャーは衛宮士郎の頃の記憶は殆ど摩耗しているって設定だったと思いますが、どの程度は覚えてるんでしょう？ 基本的に、はつきりと覚えているのはセイバーに関してといった感じでかいていくつもりです。誰かそこらへんの情報あったら教えて下さい。

その18 (前書き)

更新ですよ

その18

「これでどうだ？」

「イヤ、ココハモットコウ……」

「こっ、だな」

「オオ、イイ感じジャネエカ」

「お前達、一体何をしてるんだ」

大ぶりのナイフを手に楽しそうに雑談する一人と一体に、エヴァはそう言わずにはいられなかった。

「なるほど、チャチャゼロの武器か」

「ケケケ、コイツノ剣ハドレモ最高ダカラナ」

ネギはかつて会得した技術を失わぬために良く剣を振っている。チャチャゼロと手合わせをすることもある。その中でチャチャゼロはネギの剣、干将・莫耶に心を奪われたのだ。

一時はオレニモ寄コセとうるさかったものだ。何とか折れたら消滅するなどのリスクをもって説得したものの、何か代わりを用意しろと言われてしまったのである。

「ふむ、確かに中々見事だな」

エヴァには刀剣の類の知識はほとんどないが、長い戦いの経験がこ

の武器は良いものだと言っているのだ。

「そう言ってもらえるとありがたい。麻帆良に来てからは初めて鍛えたものだからな」

「お前が鍛えたのか!？」

そう、ネギが変わりを用意しろと言われて選んだのが自身で鍛つことだった。既製品を購入しようとするれば、いいものを見つけるのは相応の時間がかかるし、値段も張る。だが、自分で鍛つとなれば話は別だ。別荘の中には魔力のこもった鉱石等、材料にはもっていいものも多数見つかったため、利用したのだ。無断ではあるが、ネギはエヴァに別荘内のものをある程度自由に使用することを許可されているし、茶々丸に一応確認もしたから問題はない。

「今は魔術で微調整中だ」

これまでネギはオーダーメイドの作品を作ったことがない。故に、その本人に合わせる最終的な作業は変化の魔術を利用して後付けで行っているのだ。此方の方が手間がかからないし、久しく使わなかった変化の魔術の鍛錬にもなるため利益は大きい。

「何ともまあ、多芸なものだな」

「常人より出来ることが多い、と言つのは否定せんさ……っと、これはどうだ?」

「オツ! 完璧ダゼ」

ケケケと笑いながらナイフを振り回すチャチャゼロにネギは満足いった、という顔をする。その顔が、エヴァには職人の顔に見えたとか……

「あれ？ ネギ先生？」

「ん？ 大河内か」

人が行き交う街の中で、両者は偶然にも顔を合わせた。

「すまないな、付き合わせて……」

「いえ、今日は皆部活で暇でしたし」

大河内のいう皆、とは明石、和泉、佐々木の事だ。この四人はよく一緒に行動している。

ちなみに、プライベートでは先生と言う呼称をつけなくていい、とネギはいったが比較的どころか非常にまじめであるアキラは受け入れなかった。

「あ、これなんかどうですか？」

「置物か……相手は下宿している身だからな、あまり場所をとらないものの方がいいかもしれん」

「そうですか……そうになると、アクセサリーとかかな」

さて、このふたりが何をしているかと言うと絶賛、プレゼント選
中である。春休みに入った今、ネギが麻帆良にやってきて三ヶ月弱
程が経過した。丁度いい頃合いだと、幼馴染に手紙と、何か日本で
買ったものを送ろうと考えたのだ。そんなわけで、偶然街で出会っ
たアキラに助力を請うたのである。

「アクセサリーは、こっちみたいですね」

「何から何まですまないな」

ネギは別に女性への贈り物などに全く覚えがないわけではない。こ
の世界にネギとして生を受けてからも、親しいものの誕生日にはプ
レゼントを贈っている。だが、それは皆手作りのものだった。

無駄に器用な所為か、材料さえキッチンとあればそこの店で売って
いる者より良いものが出来あがることもある。

だが、今回はその考えを捨てた。幼馴染とは手紙を書く時は修行の
成果について書く約束していた。未だ魔法使いとしての修行が学
園から言い渡されない（図書館島の件は認めていない）今、ネギの
修行の成果とは教師としての労働に対する給料に他ならないからだ。

「腕輪にネックレス、指輪もあるけど……」

「ふむ、比較的邪魔にならないネックレスが打倒か」

アキラはネギから聞いた色でたとえるなら赤、といったヒントを頼
りに何かいいものがないかを探していく。そして、探し始めて五分
ほどすると、一つ目にとまったものがあった。

「先生、これなんかどうかな？」

「どれ」

自分の物色を中断し、アキラが手にとったものを受け取る。円の中に正三角形を二つ重ねた六芒星があり、三角形の重複部分である六角形部に紅い石がはめ込まれている。

「これは良さそうだ。礼を言おう」

「え、いえこれくらいなら別に」

自分が見つけたもので即決してしまったネギにアキラは少し戸惑うが、礼を受けとった。

「そうだ、今日の夜は何か予定はあるか」

「いえ、特には」

あえて言うならゆうなが今日は部活仲間と晩御飯を食べるとのこと
で自分が一人になってしまい、外食でもしようかと思っていたぐら
いだ。

「今日の礼に晩御飯をごちそうしようと思うんだが、構わないか？

丁度今日の晩御飯は私が担当だしな」

「いいんですか？」

ネギが料理をする、というのにも驚いたがこの質問は同室の者達に
許可をとらなくていいのか、というものだ。

「何、私を作るのだから、文句は言わせんよ」

「分かりました、ごちそうになります」

一瞬、断ろうかと思ったアキラだったが断るのも悪いし、普段あまり話さないクラスメイトと話すいい機会かもしれないと、ネギの申し出を了承した。

その日の晩御飯は人数が増えたことでおかずも一品増え、生徒三人は非常に満足したものだと言った。

その18 (後書き)

色でたとえるなら赤ってのは私のイメージですのであしからず。

その19 (前書き)

更新です

その19

「む？」

「え？」

新学期まで後数日。これから一年間世話になるだろう教室の掃除で
もしようかと学校に訪れてみると、席に座る一人の少女がいた。た
だし、その少女は……若干透けていた。

「と、言うわけなんです」

「なるほど、な」

話を聞くに、この少女は数十年前に何らかの理由で死を迎え、それ
から今まで幽霊として過ごしてきたらしい。それも運の悪いことに
……場合によっては良かったのかもしれないが……隠密性が高く、
誰にも気づいてもらえず寂しい思いをしていたと言っことだ。

「私に気付いてくれたのは、先生だけなんです！ 本当に寂しかった
んですよー！」

「気持ちは分からんでもないが泣くんじゃない。これからは話し相
手ぐらいにはなってやれるからな」

本当ですかー!? と今度はうれし涙を流す幽霊少女……相坂さよを適当にあしらいなから思考にふける。名前を聞いて思いだした事だが、彼女はれっきとした2 Aの生徒だ。学生名簿にもちゃんと載っている。これだけでもまあ問題なのだが、さらにそれに拍車をかけるのが名簿に書かれたタカミチからの言葉「席、動かさないこと」これだ。これのせいで、学園は相坂の存在を知らながら放置していたと言う証明になってしまう。

タカミチが彼女の存在を知っていて書いたのか、それとも学園長に指示されたことをそのまま伝えたのかは知らないが相坂を放置したということには変わらない。

「先生、私の話聞いてます?」

「ああ、聞いているよ」

少し怒ったような、それでいて不安そうな声をかけてくる相坂に、私は考えるのをやめた。とりあえずは、この少女の相手を務めるとしようか。

「すまないな、掃除を手伝ってもらって」

「いえ、元はと言えば私が話し続けてしまったからですし」

相坂の話がひと段落した所で、私は当初の目的である掃除を始めることにした。相坂は私も手伝います! と言ってくれたわけだが、幽霊に出来るのかという当然の疑問を問いかけてみたが、相坂は感

心するほどに洗練されたポルターガイストで窓拭きを担当してくれた。おかげで予定していたより（所要時間）速く終わった。

「それより、本当にいいんですか？」

「構わんさ、放っておくわけにもいかんしな」

現在は相坂を伴って寮へと帰宅中だ。相坂がこれまで寂しい思いをしていたのが学園のせいであるなら、それに対処するのも学園に所属する私の役目だろう。彼女は私の生徒でもあるからな。それに、刹那と真名ならば、ここに相坂が存在すると教えてやれば視認できるようになるだろう。二人とも友好的とは言い難い部類ではあるが、悪い子ではない。相坂と友人になってくれることを、ひそかに期待した。

「……………」

「……………」

「……………ネギ先生？」

一匹の猫と見つめあってからおおよそ10分。さすがに耐えきれなくなっただのか、茶々丸が声をかけてきた。

「猫に餌？」

「はい、よろしければ先生も一緒にいかがかと」

今日も今日とてエヴァとの修行をこなし、夕御飯の準備には速く、かといってこれから新たに何かをするには遅い……茶々丸が声をかけてきたのはそんな時間だった。内容としては散歩がてらに野良猫達に餌をやりにはいかないかと言うものだった。別段動物が好きと言うわけでもないが、普段あまり自己主張等しない茶々丸からの折角の誘い……断る理由は無い。

「ああ、行くでしょう」

「それでは早速」

こうして、猫の餌を手に茶々丸が何時も行くと言う広場に向かったわけだが……

「おかしいですね」

猫が一匹たりとも現れなかった。普段なら自然と姿を現すとのことだが、今日に限って、だ。私がいることに警戒したのではないか？ という意見は茶々丸に否定された。何度か子供たちを伴って餌をやったことがあるからそれはないのでは、とのことだ。

それからしばらく待って、現れたのが真白い一匹の猫だった。茶々丸曰く、ここらの猫のまとめ役のような存在らしい。その猫は私の前にくると、黙って見つめてきた。それに返して、私も猫を見つめ返した。

「らちがあかな」

「一体どうしたのでしょうか……」

白い猫は茶々丸がいくら声をかけてもピクリとも反応しない。ただ黙って私を見つめてくるだけだ。変化の無い状況にオロオロし始めた茶々丸を救うべく、私はゆっくりと猫に手を伸ばした。

「……!？」

野良にしても過敏すぎる反応で猫が後ろへ飛びずさる。尾と毛を逆立てて、警戒していることを全身で表現している。なるほど、やはり私が原因だったか。ますますオロオロし始める茶々丸をいさめ、一歩猫へと近づく。

「……!？」

猫は動かず、さらに毛を逆立て今度は鳴き声を上げて威嚇をしてくる。それを見て、私は常に行っている”周囲への警戒”を解いた。

「……?」

猫が呆気にとられたような顔をする。どうやら、予測通り私が常時行っている警戒が、猫達に恐怖心を抱かせていたようだ。もう一歩歩み寄り、猫に手を伸ばす。

「……!」

一瞬身を強張らせたものの、今度は飛びのいたりすることは無かつ

た。そのおかげで、私は猫の頭を撫でることができた。

「……………」

完全に警戒心を解いてくれたのか、私が撫でるのを気持ちよさそうに受け入れてくれている。やがて、猫は私の手から逃れると、茂みの中に入って行ってしまった。

「ネギ先生」

「大丈夫だ」

しばらく待つ。すると、先ほどの白猫が入って行った茂みから多くの猫が現れた。どうやら先ほどの猫は代表として私を伺いに来たようだ。

「みゃあ〜」

「君か」

足元に、白猫が来ていた。私の足に体を擦り付ける様になっている。さっきは悪かったとも言っているのかもしれない。

「ネギ先生、餌を」

「そういえば、そうだったな」

当初の目的を思い出し、茶々丸から餌を受け取り足元の白猫に与える。問題なく食べてくれている所を見るに、もう心配はないようだ。

この日から、ネギは茶々丸とよく猫の餌やりに行くようになった。

その19 (後書き)

さよってある意味おいしいポジションですよ。その境遇からか、ほとんどのSSで関わればオリ主達が好意的に接してくれます。

ヒロインにはなれないけど、決して悪く扱われない。そんなキャラ。

その20(前書き)

昨日は更新とかすっかり忘れてた。皆さんすいません。
今回は凄く短いです。

その20

新たな一年の始まり。ここ、麻帆良学園は新学期を迎えていた。

「3年！ A組！ ネギ先生ー！！」

教室に入ると同時に、そんな大声が辺りに響いた。教室を見渡すと春休みボケなど感じさせない元気一杯な生徒たちの顔が目映る。結構なことだ。だが……

「元気なのはいいことだが、余り五月蠅くしないように。新学期早々新田先生に怒られるのは嫌だろう？」

「い、と返事をしてくれたのはいいがその返事がまたでかい。これは言っても無駄か？」

「せんせーい！ 先生が正式な教員になったのはいいけど、やっぱり子供の先生なんておかしいと思うんです」

「……それで？」

「テスト1位記念パーティーが出来なかったからその代わりに進級パーティーしよう！」

「……さんせーい！！」

……話が全く繋がっていないが、追及されるのも面倒であるため何も言つまい。それはさておき、私の都合で先学期にテスト1位獲得記念のパーティーが出来なかったからか、クラス全員が非常に乗り気

だ。おそらく、もうおさめられまい。

「手早く連絡を済ますから残り時間で詳しい事を話し合え」

生徒達に丸投げだ。那波等の常識人がストップパーになってくれるはずだからそれほど無茶な企画は立てないだろう。そう信じたい。常識人の例に挙げた人物が意外と悪乗りすることを思い出して少し不安になった。

皆がパーティの企画で盛り上がる中、その輪に入っていない人物も何人かいる。幽霊である相坂は勿論、エヴァや茶々丸等を筆頭に魔法関係者。そしてもう一人……

「コイツら……」

頭を抱えて机に突っ伏している少女、長谷川千雨だ。彼女には麻帆良が酷く耐えがたいものであるようだ。その理由としては学園を覆うように展開されている認識阻害の魔法だ。これだけ大きな学園全体に作用する術式、何らかの不備がでるのは当然だろう。彼女自身の魔法に対する抵抗力が高いのか、あるいは魔法の不備なのか……そのどちらかは知れないが、彼女には辛いことだろう。

「別に無理して出る必要も無いし、今日ももう帰って構わんぞ。伝えるべき連絡は終えたしな」

最後に辛いだろうつからな、と声をかけると長谷川は此方に顔を向けて目を見開いた。

「ああ、辛いぜ本当に。何が辛いつてここで一番の異常であるアンタが一番まともなのが一番堪える」

「それはすまないな……」

「別にいいつて。どうしようもないんだろ？ それにアンタ個人は別に嫌いじゃないしな」

悩む生徒を救ってやれないことをふがいなく思うが、自身が嫌われていないと言うのは正直嬉しい所だ。

「今度差し入れでも持ってこよう」

「そいつは楽しみだ。アンタの料理は美味いらしいからな」

だから少しでも、気がまぎれるように力を尽くそう。

その20（後書き）

終わらせ方は考えてあるけどそこに持つてくまでの過程が……と言
う私の悪い癖が出てしまった。修学旅行編までどうつなごうか……

アーチャーで教師するのも凄く難しくなってきたしね……

未熟な自分に反省です。

明日から二泊三日でサークルの合宿です。どこかのキャンプ場に行
く予定のある方は遭遇するかもしれないね（笑）

その21(前書き)

今回はエヴァ視点です。

その21

「本当にこのままでもいいのだろうか……」

悩める乙女？ エヴァンジェリンは深いため息を一つつき、再び思考の海へと潜っていった。

自分はちゃんと師匠ができているのか？ そんな疑問が浮かんだのは偶然であった。何を馬鹿な、最初はそう思った。だが、今まで自分がエミヤにしてきたことは……

魔力の効率運用に対するアドバイス、模擬戦。

細かく言えばもつとあるが、大きく分けるならこの二つだ。正直、頭を抱えてしまった。魔力の効率運用はエミヤも以前から心がけていたことだし、所詮やっていれば辿り着くだろうことをちよつと近道させているだけにすぎない。

模擬戦に関しても”全力”で戦える、と言う点に関しては適任だろうが元々が膨大な戦闘経験を頼りに過酷な戦場を生き抜いてきた男だ。今更命がけの特訓なんてものはさして重要ではない。

エミヤは充分だと言うかもしれないが、納得できない。この闇の福音が弟子をとっておきながら教えているのがこの程度、というのはプライドが許さない。習得は速いが練度が中々上がらない、という奴の特性から新魔法を教えるのは控えてきたが、今、それを破る。よくよく思い返して見れば奴の魔術属性は剣だ。もしその属性が魔法にも影響を及ぼすのなら、ピツタシの魔法があるではないか。”剣”であり、闇の福音の弟子が振うに恥ずかしくない強力なのが。”

「茶々丸」

「なんでしょう?」

「エミヤはどこにいる?」

丁度紅茶を運んできた茶々丸からカップを受け取り目的の人物の所在を尋ねる。今日は猫に餌をやってから来ると言っていたためここに入ってくるのは一緒だったはず。ならば、奴の居場所を知っている可能性は高い。

「ネギ先生でしたらビーチの方に向かわれました。なんでも確かめておきたいことがあるとか……」

「確かめておきたいこと?」

少なくとも、自分はそれがなんであるか知らない。と、なると魔術関連のことだろうか? 魔術に関してはいかに私であるうと何もすることはできんからな……

「行ってみるか……」

「……………何だ、これは?」

目に映るのは白い砂浜……………に突き刺さる剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣

剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣
剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣
剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣
剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣
剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣
剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣
剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣
剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣

もう数えるのが馬鹿らしくなるほどの武具であった。その一本一本が凄まじい威圧感を放っており、普通からは大きく外れた逸品であることを如実に表している。こんなことができるのはただ一人。

「エミヤー！！ これは一体なんなんだああああ！！」

剣のせいで姿の見えないあの男だ。

「ようするに、だ。魂と肉体の齟齬は魔法だけじゃなく魔術にも影響していたと？」

「そうなる。これを見てくれ」

そういって、エミヤの両手に現れた陰陽の夫婦剣を受け取る。

(むう……相変わらず良い剣だな。チャチャゼロが固執していたのも分からんでもない)

あいつと違って刃物フェチなんてものでは無いはずなんだが、と思いつつも双剣についつい見入ってしまう。だが、そんな所に奴は爆弾を投下した。

「私が愛用した剣、干将・莫耶。私が最も投影しなれた剣だが、それでも、それは私がエミヤであったころの8〜9割程度の出来だ」

「な、に？」

コイツは今何と言った？ かつての8〜9割だと？ そんなはずがあるのか？ この剣の性能は知っている。何度か障壁ごと四肢を斬り飛ばされたことだってあるのだ。それで全開ではないなど、どうして信じられよう。

「元々無いはずの物が使えているんだ。ここまで影響が無いのが奇跡といったところか」

「そう、だな」

魔術は魔法なんかよりも制御が難しい。暴走も魔法と魔術では危険度が全く違う。だというのにその程度で済んだとなれば、なるほど、奴の言うとおり奇跡と言えるかもしれない。

「それで、影響はどれほどだ？」

「刀剣は8割、それ以外の武具が7割。盾は下手すれば6割を切るやもしれん」

話だけ聞くと深刻そうに見えるが、本人はさしたる問題ではないと言った感じで飄々としている。事実、本人は魔術を戦闘で使用するつもりは無いと言っていたし、それが良いということも分かっている。だが、魔術が強力であることには変わらない。

「固有結界はどうなんだ？」

「……展開はできるだろう。だが、どれほど負荷がかかるかは分からない」

投影が使えることから使用できるだろうことは想像に難くない。問題は世界からの修正力だ。魔術とは成り立ちが違うこの世界を塗り替えたその時、何が起こるかは全く予想がつかない。

「まあ、使つつもりはないさ」

そのためにこうして君の元で修行している、そうしめくくるエミヤに私はひそかに決心する。この男を魔術が必要無い程に鍛え上げて見せる、と。

「よし、エミヤ早速始めるぞ！」

「どうした？ 今日は何時に無くやる気だな」

「うるさい！ 今日新しい魔法を教える。よく聞いてろ、この魔法は……」

この男にいなくなって欲しく無い。かつて、ある男に抱いたものと同じものを今再び感じている。それが、あの男の時と同じなのはまだ分からないが、どうでもいいことだ。コイツがいる。今はそれが重要なことから。

その21(後書き)

エヴァの師匠としての苦悩かと思いきやネギの現状説明になってい
たでござる。……なして？

その22（前書き）

リアルの事情で更新が遅れました。

今回から修学旅行編始動。しかし今回は導入部？ なので短いです。

次回からは本格的に始まるのでお待ち下さい。

その22

「もう一度言ってくれるか？」

「ですから、修学旅行で先生はどのような対応をするのか、と」

そういえば、もうすぐのはずだが自分はまだ行き先を知らない。自分で調べなかったのは不味かったと思うが、ここまで耳に入らないものか？ そう思ったが、今は刹那の真意を問うのが先だ。嫌な予感しかしないが。

「すまんが、私は修学旅行で何処に行くのか把握していない。その様子だと何かあるようだ……」

「え……あの、本当に何処へ行くか知らないんですか？」

返事を返してやると刹那は呆気にとられた、と言わんばかりに口をポカンと開けて固まってしまった。普段しっかりしている刹那にしては珍しい顔で見えていて面白いが、これで何か面倒があると分かっ
てしまった。

「真名、修学旅行先は何処だ？」

「本当に知らなかったのかい？ ……京都だよ」

「……本気か？」

「さてね、私には学園長の真意は測りかねるよ」

恐らく、あの奇怪な形をした頭の中など誰も分からないだろうと…
…私はそんなアホな事を考えてしまう程に、呆れてしまった。

翌日、私はHRが始まる前に学園長に呼び出された。何の用かと思えば案の定、修学旅行についてだった。だが、幸運なことなのだが、ことに行き先である京都の組織、関西呪術協会が難色を示しているとのことだ。大体、魔法関係者のいない普通のクラスはともかくウチのクラスが行けるわけがないのだ。

「しかし、行き先を変えようにも裏の事情を知らぬ一般の先生が既に宿や新幹線の手配も済ませてしまつてな。今更変えるわけにもいかなのじゃよ」

「生徒の安全を考えるなら無理にでも変えるべきでは？」

「そつなんじゃが……一般の先生方を納得させる理由がお」

ようやく分かった。コイツは何が何でも京都へ行かせるつもりだ。方法などいくらでもある、最悪暗示をかければ済む話だ。学園全体に認識阻害を張り巡らせていくせにその程度に気付かないはずがない。一体何を企んでいるのやら……

「それでなんじゃが、ネギ君。君に一つ任務を頼みたい。重要な仕事じゃ」

「内容を聞きましょう」

親書、か。話を聞き終えたが、どうにも言葉の通り受け取れない。何か別の者が隠れている気がしてならない。だが、断った所で京都に行かなければならないことには変わらない。

「分かりました。関西呪術協会長への親書の受け渡し、引き受けます」

とりあえず、刹那……それに真名を必要経費として雇って対策をねるとしよう。だが、これだけは分かっている。最も優先すべきは親書ではなく……極東最大の魔力の持ち主、近衛木乃香だ。

その22 (後書き)

ちよつと補足。

- ・ せつたんが護衛してるのは知ってるぜ！
- ・ 旅行先に京都が上がった時点で却下してない 行かせる気満々。となってます。

旅行編は意外と構成が面倒臭い仕様になるのでちよつと大変でございます。

その23 (前書き)

今回はとある重要キャラが登場！

すっかり忘れてた！ と言う人は素直に感想で手を上げよう）
・
・
（ノ！

その23

「うっう……」

「そろそろ泣きやんでくれ。こればかりはどうしようもない」

旅行用バッグに荷物を詰める私の周りを相坂が涙を流しながらくるくると回る。彼女だけが、修学旅行に参加することが出来ないのだ。エヴァも呪いが解けたことを学園に報告していないため正式には不参加だが、後から転移でくるつもりだと言っていた。

「みやげを買ってくる。だから今回は辛抱してくれ」

相坂と会ってからと言うもの、エヴァや刹那と相談しながら何とか相坂の行動範囲を広げようとした。何か媒介、もしくは人物にとりつかせるという案に落ち着いたのだがいかんせん、相坂は素人幽霊なのだ。ポルターガイストすら満足に制御できない彼女がとりつく対象を変えるなんてことが出来るわけがなかった。

こればかりは誰もアドバイスなどを行えず、相坂が頑張るしかなかった。結果、短時間なら対象の変化に成功した。だが、修学旅行の間となると不可能と言わざるを得ない。

「まっていますからねえ」

「ああ、分かっているぞ」

修学旅行当日まであと三日。短い時間だが、できるだけ相手をしてやるつもりながら準備を再開した。

「ご機嫌だな」

「当然だ！」

今日も今日とてエヴァ宅にて修行を行おうとしていたのだが……エヴァが終始にやけており、はつきりいつて無意味なものとなっていた。そのため、早々に切り上げたわけだがエヴァの笑みはおさまる心配がない。

「マスターは呪いが解かれたその日からずっと楽しみにしていましたから」

「ええい！ そんなことは言わんでいい！」

声は怒っているが顔は笑ったままだ。よほど楽しみなのだろう。いまいち、自分にはよく分からないが……

「何だその顔は」

「何、純粹に楽しもうとしている君が羨ましかっただけだ」

ただでさえ修学旅行中の教師は生徒が問題を起こさないか気を張らなければいけないのだ。生徒と違い、楽しむと言った要素は限りなく薄い。それに、学園長が寄こした問題ごともある。とてもではないが、楽しめるとは思えない。

「ふん。爺の頼みごと等放っておけばいいものを」

「そもいかさ」

「貴様はもつと適当に生きるべき……ん？」

「どうした？」

「侵入者……いや、サイズ敵には式か使い魔だな」

どうやら、学園に張られている侵入者探知の結界が反応したようだ。ちなみにこの結界、登校地獄を解除した際にエヴァとの繋がりが断たれ、後から急ぎ繋ぎなおしたという経緯があるが、それはまた別の話だ。

「私が行こうか？」

「……そうだな、お前に任せる」

既に用もないし、特にこの後用事があるわけでもない。それに人が侵入したならともかく今回は使い魔の類だ。エヴァ曰く、使い魔なら無理に発見する必要は無い……と言うより発見できないなら、散歩がてら引必ずしも発見しなければいけないわけではないなら、散歩がてら引き受けるのもいいだろう。

「ではな」

「ああ、どうせ見つからんだろうが連絡は寄こせよ」

ああ、と返して茶々丸と世間話をしていた相坂を伴いエヴァ宅を後

にした。

「さて、エヴァの言によればこの辺りのはずだが」

「何もいませんね」

エヴァに聞いた結界に反応があった辺りに来てみたが、辺りには何もいない。まあ、侵入した場所に能々と居座るわけもないので当然なのだが。

「さて、どうしたものかな」

周囲に人がいないのは分かっているが、無闇に魔法も使うわけにもいかない。エヴァの言った通り、使い魔程度の侵入を見つけるのは非常に困難なようだ。

「あら？ ネギ先生、あそこを見て下さい！」

「どうした、何かいたか？」

相坂が目の前に躍り出て手をワタワタと動かしながらとある方向を指さしている。落ち着け、と言いたかったが聞き入れられそうもなく、言われるままにそちらを見やる。

いたのは、尻尾の先端部のみが黒く他は真白い毛で覆われた……

「ネギの兄貴！ お久しぶりっす！ アルベール・カモミール、遅

ればせながらはせ参じたぜ！」

ウェールズの地で友となった、オコジヨ妖精だった。

これにてピースは揃い、物語は麻帆良より西の地。 ” 京都 ” へと移り変わる。

その23 (後書き)

重要キャラとはカモ君の事でした。それにしても彼を忘れてしまうとは……不覚！

そんなわけで、何人の方が忘れていたか楽しみです。

誰もいなかったら私は一体何なんだ……って感じになります。

その24 (前書き)

書けば書くほどアチャの口調に違和感が……何とかせねばな。

劇場版のFateは勿論買いました。ブルーレイの初回限定版です。

その24

「俺っちとしたことが……ぬかつたぜ」

自身の右後ろ脚を強く挟み込むトラバサミを恨めしげに睨みつけながらぼやく。まさかこんな原始的な罠に高度な認識障害をかけているなど誰が思おう。違和感を感じた時には既に遅し。逃げる猶予も与えられずに足に鋭い痛みが走った、というわけだ。

「くそっ！ こんな所で捕まっつてたまるか！」

自分はこんな場所で捕まるわけにはいかない。そう叱咤して思い切り罠から抜け出そうと体をよじる。体を動かすたびに抜ける所かますます強く食い込んでくるのには心が折れそうになったが、それでも懸命に体をよじる。

「ちぎ、しよっ……」

だが、心が折れずとも体が折れた。徐々に力が抜けていき、ついには力なく倒れ伏す。罠に捕えられてから実に二時間。ここでアルベル・カモミールの抵抗は終わりを迎えた。最も、このまま力尽きたわけではなく……

「大丈夫か？」

後の最高の友にして恩人、ネギ・スプリングフィールドにその命を”妹”共々救われるのだ。

「どうかしたのか？」

「いえ、兄貴に初めて会った時のことを思い出しやして。あの時妹と俺っちのために尽力してくれた兄貴には感謝してやす」

兄貴は自分を罫から解放してくれたあと、事情を聴き体の弱かった妹、そして自分を使い魔として雇ってくれたのだ。おまけに俺っちの下着泥坊のについても被害者の方々に弁解して回ってくれた。あの時、既に俺っちの人生は決まったと言っていたいい。この人の役に立つ。妹の心配をする必要がなくなった今、それだけが俺っちの生きる意味だ！

「その礼は既に受け取ったし、こうして俺のために働いてもらってるんだ。お相子だ。そうそう、不肖の兄の心配をした妹から手紙が来てるぞ。読んで返事を送ってやれ」

「本当っすか！？」

差し出された手紙を受け取り早速読み始める。妹とこんなことが出来る様になったのもやはり兄貴のおかげ……まずは修学旅行とやらで、きつちりサポートしてみせるぜ！

修学旅行当日の早朝、私は学園長室を訪れていた。昨日の内に来てほしいと連絡があったのだ。

「ネギ君、これが親書じゃ。よろしく頼むぞ」

「分かりました」

こんな問題のタネ、正直受け取りたくないが……そうもいかないのが悲しい所だ。スーツの内ポケットにしまいながら心底そう思った。

「気をつけてな」

ふおふおふお、と笑いながら送りだしてくる学園長に軽い殺意を覚えるが、黙ってその場を後にする。これから数時間後には、ほぼ確実に何かしらが起こるであろう地で行動せねばならないと思うと、自然と大きなため息が出た。

集合場所である駅に辿り着くと、学年主任の新田先生以下二人の先生と、十人程の生徒が既に到着していた。

「おはようございます、ネギ先生」

「おはようございます。先生方はともかく、皆速いな」

「待ちきれなくて始発で来たよ！」

そんなに速くくるとは、よほど楽しみだったに違いない。だが、そんなに張り切って最後まで持つのだろうか？ 持つんだろうな……このクラスなら。違和感なくそう思ってしまった自分が、少し悲しくなった。

「ネギ先生、初めての大きな行事で緊張するかもしれませんが私たちも出来るだけサポートしますので、頑張ってください」

「ありがとうございます、新田先生。3 - Aを上手く引率できるかは正直不安な所ですが、力は尽くします」

生徒たちから一端離れて一息ついていた私の元へ新田先生が声をかけてくれる。この人のこんな所が卒業後も……いや、卒業してからより好かれる様になる理由だろう。年度初めは就職、進学後に相談に来る生徒も多いみたいだしな。

時間も経ち、ついには新幹線に乗り込む時間となった。エヴァ、茶々丸、相坂が欠席したことで残された六班の二人をそれぞれ刹那は護衛対象の近衛がいる五班に。レイニーデイは雪広の三班に混ぜさせてもらった。近衛に積極的に話しかけられている刹那は戸惑いながらも此方を恨めしげに見てきたが、修学旅行には自由行動なんてものもあるのだ。一緒の班にしなければ護衛など不可能、と言うことで無視した。

さて、楽しめる可能性が限りなくゼロと言う最悪の修学旅行へ、出発だ。

その24 (後書き)

カモって自分のこと俺っちでいいんだっけ？　なんか自然と書いてたけど……違ってたら私的下さい。修正します。

カモの話が本当だっていいじゃない。

その25 (前書き)

二カ月ぶりにこっちを更新!

これからは前の様に一週間ごとでチートの方とかわるがわる更新していく予定です。

その25

新幹線。小さな男の子なら一度は憧れを抱く乗り物。麻帆良学園の修学旅行、京都への足として使われたそのある車両は、現在混沌の空間と化していた。

お喋り、飲食、カードゲーム……各々独自の方法で道中を楽しんでいたはずなのだが、私がトイレから帰ってくるとどうだろう。車両は大量のカエルで溢れかえっていた。

「龍宮」

「ああ、これは式だね」

軽く威圧しても全く動じぬカエル達に召喚されたものではなく気で具現化しただけの式だと分かった。念のため魔眼を持つ真名に確認したのだから間違いない。

「桜咲は？」

「カエルが他の車両に行かない様に結界を張りにいったよ」

それはありがたい。こんな嫌がらせで他の乗客に迷惑がかかるなど勘弁してほしい。

「回収するぞ」

「あまり触りたくないんだけどね」

古菲を中心とした逞しいメンバーに協力してもらい、カエルを袋に

回収する。この程度の式なら殴れば消滅するのだが、それが出来ないのが辛い所だ。やはり、一般人の生徒がいると対処が酷く難しい。

「先生」

「桜咲か。ご苦労だったな」

「いえ、それが私の仕事ですから。それと、術者を探しましたが発見はできませんでした」

「そう、か」

こんな事をしかけてきた相手だが、早々見つかる様なへまはしないようだ。まだどの程度の相手なのかは知れないが、これからも一般人を巻き込む様な行動を起こすのなら厄介だ。

「せっかくの修学旅行だが、警戒は密に頼む」

「分かりました」

しかし、結局のところ此方は後手に回るしかないのだ。齒がゆい気持を抑えながら、私はカエルを処分するためにひとまず車両を後にした。

京都に到着後、私達は最初の目的地である清水寺へと向かった。念のためバスでの移動中も警戒を怠らなかつたのだが、特に何事とも

なく到着した。だが、安心して良い訳が無い。新幹線で仕掛けてきたからには此方の予定を既に把握していると見ていいだろう。道中仕掛けてこなかったのは先回りして罠を、と考えることもできるからだ。

「やれやれ、気が重いな」

「気持ちは分かるけどね、隣でそう重いため息はついてほしく無いな」

現在は全体行動中であり多少は融通が利くこともあって私は真名と少し先行して進んでいる。また何かしかけているとも分かんしな

「先生、早速だ」

そう言って真名が指さしたのは恋占いの石と呼ばれる二つの石の丁度中間地点だ。注意深く観察すると、なるほど。

「落とし穴か」

「しかも意外と深いみたいだ。それに、新幹線の時の式もいるね」

正直、敵が何を考えているのかが分からなさ過ぎて頭が痛くなった。こんな場所に仕掛けたら、麻帆良の生徒でもすらない一般人がかかる可能性もあるだろうに……

「とりあえず、処理するか」

魔法を使って処理をするのも面倒なので、落とし穴の縁に立って右足を前方へと勢い良く踏み下ろす。するとズボツという音とともに

落とし穴がその姿を現した。周囲の観光客が眼を見開いて此方を見ている。まあ、当然か。

「すみません、どうやら誰かが悪質な悪戯をしたようです。連絡をしてほしいのですが……」

「あ、ああ。すぐ呼んでくるから待っていてくれ！」

近くにいた方にお問い合わせすると、すぐに人を呼びに行ってくれた。そう言えば、こういった場所で働いている人たちは公務員とかなのか、それともちゃんとした職として存在しているのか……そんなどうでもいいことを考えながら、誰かが近寄らない様にその場に立ち続けた。

「ういー」

「けぶっ」

「もっと、ういっく……のませろー」

落とし穴の件は警察を呼ぶにまでなったらしく、そこそこ待たされた後簡単な聴取を受けた。そのため生徒たちの引率は新田先生に任せした。だが、追いついて見ればどうだ……3 - Aの生徒達が十人ほど酔いつぶれているではないか。

「ネギ先生！」

「新田先生、これは一体……」

何やら物々しい様子で見知らぬ人と話していた新田先生に声をかけられた。話の内容は十中八九、この惨状についてだろう。

「どうやら、悪戯は落とし穴だけではなかったようです」

「と、いいいますと?」

「これです」

新田先生が指示したのは酒樽だった。先ほどから感じていた臭い……すぐ傍にある露店の甘酒だと思っていたが、どうやらそうではなかったようだ。恐らく、これを音羽の滝に混ぜたか。

「此方にも警察を呼んでいます。私は事情を説明しますので、ネギ先生は生徒たちを旅館に運んでください」

「分かりました。無事だった者は倒れているものを運んでくれ!」

(カモ、どう見る?)

(大方こっちの出方を探ろうとしてるんでしょうが、あまりにもお粗末っすね)

生徒を運びながら肩に乗るカモとこの悪戯について話すが、どうやらカモも同意見の様だ。大体、こんなにも人が多い中で魔法使いとしての対応がそう簡単に出来ると思っているのだろうか? 認識阻害の魔法等は確かにあるが、あれは勘のいいものには勘づかれやすいと言う致命的な欠陥がある。緊急で無い限り、あまり使いたくはないものだ。

（ただのアホなのか、それとも何か考えてのものなのか……）

（オレっちは前者だともいやすけどねえ）

全員をバスに収容し、旅館へと出発する。今日はもう何も無ければいいんだが……

修学旅行初日の夜。幸運が絶望的に低いネギの願いは叶うはずもなく……敵は更なる行動を開始する。

その25（後書き）

気付いたんですが、チートの方が投稿から一年が経過してました。

此方も後二十日程で投稿から一年になります。

一年で修学旅行……全然進んでないな。しかも最近はg d g d 気味。

一応折角の一年なんで何かやってみようかな？

何か希望があれば感想に書いて見て下さい。もしかしたら採用されるかもしれません。

その26 (前書き)

すいません、今週は異様に忙しく中々書く時間がとれず凄く短いです。

今週木曜からは一応休みに入るのでそこで挽回したいと思います。

その26

「さて、今からは旅館内での護衛になるわけだが……何が一番不味いか、分かっているな？」

「敵が既に潜伏している……だろう？」

「その通りだ」

察しが良くて助かる。さすがはプロの傭兵と言ったところだろう。そして、相手も一応はプロであるはずなのだ。もし、潜伏しているのだとしたらそうやすやすと尻尾をつかませないだろう。

「やはり、完全態勢で当たるのが妥当でしょうか」

「あまり気は進まんが、そうするよりないだろう。ただ、今日はまだ初日だ。二人は交代して休みを取りながら事に当たってくれ」

しっかりと頷いた二人に満足すると、しずな先生から風呂を早めに済ませる様に連絡があった。入らないわけにもいかなかったため、私は風呂へ。刹那と真名は護衛へとそれぞれ分かれた。

「やれやれ」

余り長く浸かっていられないため、短い時間で思う存分堪能する。麻帆良をたつてからと言うもの気苦労が絶えなかったが、ようやく一息付けた。

「十歳だと言うのに爺臭いため息をつくな。おっと、精神の方は十歳では無かったな」

「エヴァ、来たのか」

知った気配だったのであえて無視していたのだが、音も無く露天風呂へと足を踏み入れてきたのはやはりエヴァだった。どうやら、宿は同じ場所をとつたらしい。

「聞いたぞ、幼稚な悪戯に引つかき回されているらしいじゃないか」

「あそこまで行くと、逆に手を打ちずらいと言うのは否定せんよ」

程度が低すぎる故に相手にしづらいのだ。まさかあんな妨害方法をとるとは、学園長も正直予想していなかっただろう。

「まあそれはさておき、だ。このような美人と風呂を共にしておいて、何かもう少し反応は無いのか？」

「何を今更。それとも何か？ 私に顔を赤らめろとでもいうのか？」

「せんでいい。言っというてなんだが、お前にそんな姿は似合わん。これっぽっちも」

酷い言われようだ。自分でもありえんとは思うが。大体、エヴァの裸を見た所で別段動揺したりなどしない。模擬戦をしていると服だけが吹っ飛んで互いに裸身で殴り合いを続けるなど日常茶飯事だからな。それは普段の姿でも、今の様に幻術で大人の姿をとろうと変わらない。

「私はあがるぞ。まあ、よっぽどのことが無い限り君の手を煩わせることはない。精々楽しむといいさ」

「そうさせてもらつよ。あの二人も中々優秀なようだしな」

やはり、エヴァも気づいていたか。真名と刹那によって小さな気が瞬時に幾つも消されているのを。悪戯時よりかは強い気配を放つそれ。少しずつ、相手も本気になったか。とりあえずは、速くここを出て二人と合流するとしよう。

「猿の式か」

「ああ。神楽坂と近衛が更衣室に入ると同時に発生した。それを更衣室に侵入する前に私と刹那が殲滅したというわけだ。狙いは間違いないく近衛だろう」

「一応式神返しの結果をはりましたが、はたして役立つかどうか……」

旅館の玄関各所に札を張りに行っていた刹那が戻った。先のことでも潜伏している可能性が大幅に上がったため張る意味がるのか些か疑問だが、念のためと言う奴だ。

「それでだが、今夜にもう一度仕掛けてくる可能性は高い。とにかく、後手に回るしかない現状私達にできるのは警戒を怠らない様にするこつぐらいだ」

「分かりました」

「報酬分は働かないとね」

「では、近衛を頼む」

そう告げて自身は屋上へ上る。潜伏している可能性が高いとはいえ外に仲間がいないとは限らないのだ。魔眼を持つ真名にこの役目を任せてもよかつたが、単純に見張るだけなら私の千里眼も劣らない。何も見逃すまいと眼を見張らせていると、旅館の窓から勢いよく飛び出す巨大な猿が眼に入った。その腕に抱えているのは黒髪の少女、近衛木乃香だ！

「先生、お嬢様が！」

携帯へ刹那から連絡が入る。糞！ 先のこと起きてから時間にして僅か三十分。速すぎる行動に意表を突かれた！ 自分に憤るのは後だ。覚えたての影を利用した物質転移にて父の杖を取り出し、猿の後を追った。

その26 (後書き)

アーチャーも長らく緊迫した状況と言っのから離れてましたので、
若干日和ってます。

今回は一応戦闘なので挽回してくれることに期待です。

その27 (前書き)

あけましておめでとございませう！
今年も未熟ながら頑張って執筆していきますので、よろしくお願
いします。

その27

ホテルを飛び出した後、すぐに真名と刹那に合流した。そして、術者が目指す先が駅であることをこの目はしっかりと捕えていた。

「くっ！ 私がいながらお嬢様を！」

「いや、これは私の責任だ。まさか、次策をあれほど早く実行するとは」

「裏を読んだのか、はたまた何も考えていなかったのか……今までこのことを考える判断に迷うね」

そうではない、そうではないんだ。敵が潜伏している可能性を自ら示唆しておくながら一時でも近衛の護衛を零にしまった私の甘さが招いた。時間にして約十年、策謀やらそういったものとは無縁であったのがここに来て影響を及ぼした。

「敵は駅に向かっている。急ぐぞ」

身体強化の魔力を高め、速度を上げる。もう、こんな無様な真似はしない。全力で、近衛を取り戻す！

「人払いの呪符！？」

「まずい！ 電車が出るぞ！」

電車を追うことは出来るだろう。だが、体力の消耗を考えると、それは避けたい。滑り込む様にして電車に乗り込む。そして、敵は……

「邪魔な奴等やなあ……お札さんお札さん、ウチを」

「させると思つか？」

魔法の射手、光の1矢！

無詠唱魔法。私がイギリスで重点的に鍛えた技能だ。魔法の射手一本程度なら、ほぼノータイムで放てる。そして、私が宙に浮かぶ札如きを外すわけがない。

「な！？」

「寝ろ！」

札は不発。驚愕からくる隙を、私は見逃さない！拳をみぞおちに一闪。確実に意識を断つために背後へと回り首筋へ手刀の追い討ちを叩きこむ。だが、この手応えは！

「先生！それは式だ！」

やはり、術者と近衛に似せた精巧な擬人符。真名の魔眼で確認する間もなかったため、してやられた。だが、私はホテルから出た術者から眼を決して離さなかった。さすがに電車に入った時は遮蔽物で視界から外れたが……少なくとも電車から出た人影はなかった。ならば、まだ術者は電車の中にいるはずだ。

「……ださん」

「！」

「ウチを逃がして」

「気をつける！」

「おくれやす」

前方の車両から流れ込む大量の水、水、水。どうやら、前の車両にある札から大量の水が流れ出しているようだ。そして、そのもう一つ先の車両に、ほくそ笑む術者の姿。

（舐められている、な）

守るべき対象を奪われ、敵に侮られる。こんな事は、何時いらいだ？ 少なくとも、私が衛宮士郎として死んだ時……あの頃は既にこんなことはなかったはずだ。ならば、今は？ 今は、あの頃と同じだと言うのか？ 叶うはずの無い理想、偽物の理想を掲げていたあの頃と……

（ふざけるな！）

正義の味方などと言うふざけたものを再び目指すつもりなどない。だが、あの頃の衛宮士郎と同じだと言うのが、許せない。

（お、おおおおおおお！）

血が滲む程に拳を握りしめ、力任せに窓を殴りつける。水の抵抗によって遅くなる筈の拳を、過剰なまでに魔力の密度を高めた身体強

化で無視する。体が込められた魔力の多さに悲鳴を上げるがそれも無視。もとより、それで折れるほど軟弱な精神では無い！

「げほっげほっ」

「助かったよ、先生。だが、先ほどの魔力行使は暴走に近い。今後は止めた方がいい」

「大丈夫だ。それより、どうやら目的地に到着のようだぞ」

深夜といえども静まり過ぎている駅。先ほどの駅と同じく人払いの呪符が張ってあるのだろう。敵を眼で追いながら、我等も後を追う。そして、駅から出てすぐの長い階段の中腹で術者が待ち受けていた。

「まさか二枚目のお札を突破してくるとわ。そやけど、それもここまでですえ」

指にはさまれているのは呪符。このタイミングで切ってくるということは、敵の持ち札の中でもそれなりの位置にあるものだろう。私は二人に一瞬目配せすると、杖に跨り上空へと飛翔する。

三枚符術、京都大文字焼き！

「くっ！」

「これは、中々だな」

上空にも届くほどの熱量を持つ巨大な火の字の炎が階段に顕現する。だが、それが上手く隠れ蓑になったのか、私が術を逃れたことにはまだ気付かれていないようだ。

「ん？ 何や一人足りへんような……」

仕掛けるなら、今！ 杖から飛び降り虚空瞬動を使って超高速で落下していく。敵はまだ、気付いていない。これなら！

「なんや音が……これは、上!？」

子供とは言え人落下しているのだ。発生する音は大きい。だが、もう遅い。とはいえ、最優先なのは近衛を無傷で助けることだ。攻撃を加えることも考えたが、欲張らずに近衛を奪い取ってその場を離れる。そして、落下してきた杖をつかみ……

風花風塵乱舞！

二酸化炭素の風を発生させ未だ猛威を振っていた炎を吹き飛ばす。

「お嬢様！」

「先生、上手くやったようだね」

「ああ。だが、もう一仕事残っている」

やってきた真名に近衛を預け、此方を睨みつける術者を見据える。逃しては、また行動を起こされる。ここで、奴を捕まえる。伏兵を考慮し、真名を近衛の護衛に徹底させ刹那を遊撃の位置に置く。そして私は術者へと一直線に駆ける。

「ここは通しませんえ」

頭上から襲いかかる少女。その手には小太刀程のサイズの刀と更に短いサイズの小刀が握られている。だが、この少女に構うことは無い。なぜなら……

「させるか！」

優秀な仲間が居るからな。

「くっ！ 猿鬼、熊鬼！」

「この程度で！」

私を止められると思うな！ デフォルメされた猿と熊の見た目をした式を一撃で消滅させる。奴の表情から察するに、最早手札は無い。そう確信の元に、踏み込もうとした。だが、急に感じた寒気に全力でその場から飛びのいた。

障壁突破、石の槍

術者の目前、先ほど私が踏み込もうとしていた位置に石の槍が放たれた。もし、あのまま踏み込んでいたら串刺しにされていただろう。

「かわされたか」

術者の横に何時の間にか存在していた水たまり、そこから人が姿を現す。無表情な顔、私とはまた違った白い髪。どこか機械的な雰囲気纏う少年が、そこにいた。

「ここは引こう。どうにも旗色が悪いようだ」

「し、新入り!? 何でここにおるんや! それに、引くやて!？」

「あれを」

スウッと上げられて指先が指し示すのは刹那と敵の仲間と思われる少女。

「はあ!」

「あゝれゝ」

目の前の敵から注意を反らさない様に眼を向けると、刹那が少女を弾き飛ばしていた。ダメージは無いようだが、実力は今の所ほぼ互角だろう。

「千草さんも善鬼と護鬼を失っているし、此方が不利だ」

「そう、やな。引くんや!」

できれば、ここで捕えておきたい。だが、目の前にいる少年がそれをさせてくれなかった。無機質な感があるためエヴァには及ばないが、間違いなく一級品の威圧感。おそらく、やり合つとなれば他の事に気を回す暇などないだろう。

私達は、敵を見送ることしかできなかった。

その27 (後書き)

一人称モドキで書いている今作ですが、非常に書きにくい状況になってます。

もしかしたら三人称へ変えるかもしれません。

その28 (前書き)

正直、ここまで筆が進まないのも珍しい。
かつての無計画さがここに来て襲いかかってきます。

その28

修学旅行二日目

二日目は奈良で班別行動が予定されている。敵の本拠地である京都からは離れるため、今日は比較的安全だと言う結論で昨夜は落ち着いたが、相手は電車でも仕掛けてくるような手合いである。とてもではないが、ネギは安心することはできなかった。

（昨夜はしてやられたからな。私だけでも、警戒は緩めないようにしよう）

真名はそもそも別の班であるため護衛がし難く、刹那も昨日のことから気を引き締めようとはしているものの、先ほどから近衛に必用に迫られ膳を持って辺りを駆け回る始末だ。とりあえず、埃がたつからと刹那と近衛を強引に座らせ、ネギは止まぬ喧騒の中静かに朝食を堪能した。

「それではネギ先生、よろしくお願いします」

「分かりました」

学園長が手を回していたらしく、ネギはこの修学旅行中旅館で待機という役割は受けていない。今日も事前に提出されていた生徒たちの目的地を問題を起こしたりしない様に身回るだけだ。それも、バラバラに散る生徒全てを見ることなど不可能なため身回りと言う名の観光なのだ。

「それでは、行って来ます」

「気をつけて」

生徒たちからの誘いは事前に断つてあるためゆっくりと出ることができる。最も、刹那を通して情報を得、五班の動向に合しての出発だが。

「しばらく頼むぞ」

「はい、分かりました！」

デフォルメされた二等身の刹那が胸ポケットからひよっこり顔を出す。一応、この式を通じて刹那とリアルタイムで情報を交換できるようにしている。一足飛びで駆けつけられる距離で控えるつもりとはいえ、生徒の誘いを断った手前堂々と五班の傍にすることができないが故の措置だ。

(それにしても……)

遠目に見えるのは宮崎、綾瀬、早乙女の三にだ。だが、折角奈良公園にいらつうの鹿と戯れることもなくギヤーギヤーと騒いでいる。問題になるほど騒いでいるわけでもないから放っているが、一体何をしているというのか。

(よく、分からんな)

守護者として永遠とも刹那ともいえる時間を過ごしたネギにとって、中学生の頃の思い出などと言つのは遙か彼方のものであり、その辺

りのことはほぼ全く記憶に残っていないと言っている。つまり、
る、今のネギにとって中学生と言った微妙なお年頃の彼女達のこと、
一番理解が追いつかない存在なのだ。

「先生、東大寺に行くみたいですよ」

「ああ、分かった」

東大寺、ネギは身回りを装い五班に合流した。幸いんことに、観光
の定番ともいえるここに行く予定だったのは五班だけであり特に問
題も起きることはなかった……のだが。

（一体なんだと言っただ）

先ほどからネギが感じる視線。敵意とかそういったものは一切含ま
れていない。下手人も割れている。綾瀬と早乙女だ。宮崎も一緒に
いるようだが、涙目になりながらアワアワしているため、二人に振
りまわされているのだと判断した。

「うっうっ……やっぱり無理だよ」

「そんなこと言ってたら誰かにとられちゃうよ!」

「やっぱり無理でしたか。でも、ハルナの言うことにも一理あるで
す」

先を歩くネギを遠目に見つめながら、三人は作戦会議……の様なもの
を行っていた。議題は簡単。宮崎のどこかにいかにしてネギに告白

させるかだ。告白するに際し、この修学旅行というのは絶好の機会でもある。だが、教員として働くネギに二人きりで接触する機会は殆どなく、たまたま遭遇できた今回も突然の事で宮崎には心の準備が全くてきていない。元より人みしりの気がある宮崎には、ハードルが高すぎるのだ。

「これはどうにかしないとね……」

「何かいい案があるですか？」

「ふふふ、奴さえ取り込めばチャンスを作ることなど容易良い事よ」

「あつじ……」

まるでGの触角の様に盛んに動く早乙女の髪。怪しい笑みを浮かべながら携帯を取り出すさまは、宮崎を不安にさせるには充分だった。後に宮崎は語る。あの時のハルナには、何かがとりついていた。絶対に、と。

「ん？へー、面白そうじゃない。そういつことなら私に任せなさいって！」

「どうしたんですの？」

「ちよーつとね。ねえいいンちよ、速く旅館に行こ！私ちよつと歩き疲れちゃったよ」

「怪しいですわね……」

「ハハハ、なーに言ってんのさ！」

「まあ、予定は消化してますしいいでしょう」

（くーくっく。さーて、旅館に行ったら早速仕込みを始めないとね）

その28 (後書き)

正直、こちらへんはかいてて苦痛しか感じない。

必要無いイベントではあるんですが、なくすと余りにも味気ない感じになってしまつのでやむを得ず……ですね。ああ、チート書いて終わらせたい。

その29 (前書き)

眼鏡を変えにいったら度を一つ落としますねと言われた。
まあ、結局悪い事には変わりないんだけども。

その29

「……すみません」

「いいえ、ネギ先生はよくやっていますよ」

ホテルのロビー、そこではネギが新田先生に頭を下げる姿があった。だが、本当に申し訳なさそうに頭を下げるネギとは違い新田先生はそこまで怒っている様子ではなかった。それは、ネギが謝る理由がネギ自身のものではないためだ。その理由を防ぐのがどんなに難しいものなのか、新田先生はよく知っている。

「それでは、行きましょう」

「はい」

頭を上げ、付いてくる様に促す新田先生にネギは付き従う。これより、ネギが謝っていた理由……3-Aの生徒達の馬鹿騒ぎを諫めに行くのだ。

「いーかげんにせんかあ!!」

数分後、麻帆良の生徒の天敵。鬼の新田の咆哮がホテル中に響き渡った。その咆哮は、このホテルが貸し切りであったことが本当に幸いだと思えるほどに凄まじいものであった。

「いいか！ 就寝時間を過ぎてから部屋から出ていた者はロビーで正座だ！」

「「「ええー!?」」」

「そういうことだ。皆大人しくしているんだぞ」

修学旅行とは生徒達にとって一大イベントだ騒ぎたくなるのも無理は無い。それは教師陣、勿論新田先生も理解している。少しくらいは眼を瞑る、と言うのが教師達の暗黙の了解だ。

だが、麻帆良……ひいては3 - Aの元気が裏目に出た。いくら眼を瞑るとはいつても少し、だ。度を過ぎれば注意しなければならぬいし、ああも分かりやすく納得いかないと顔に出されては釘を刺しておくしかない。結局のところ、彼女達は自ら自分達の首を絞めてしまったのだ。

「やれやれ、全く3 - Aの生徒達は……」

「ありがとうございます。私ではどうにも力が足りず」

「いえ、あの子達を御せる者などそういませんよ。ましてや、まだ若いネギ先生には荷が重いでしょ」

自販機で買ったお茶を口にしながら雑談に興じる。近衛の護衛は同じ部屋の刹那が担当するほかないため、彼女に一応は任せている。

「それでは、私は念のためもう一度生徒たちの部屋を周りに行きます」

「そうですね」

失礼、と軽く礼をして立ち去るネギを新田先生は静かに見送った。

（今はまだ若い、将来が楽しみだ）

その小さな背中に、彼が大きな期待をよせていることはまだ誰も知らない。

「それで……朝倉がいないと」

「は、はい」

ネギが部屋を見回り初めて三つめ、第三班の班長である雪広はネギの前で縮こまっていた。その原因は、朝倉和美。第三班のメンバーである彼女が、部屋にいないというのだ。

「新田先生に怒られたばかりだと言つのに、困ったものだ」

「すみません。班長の私がしっかりしていれば……」

別に、ネギは雪広にそこまで起こっているわけではない。だが、ますます縮こまってしまった彼女にどうしたものかと考えてしまう。女性の扱いに慣れていない、というわけではないが今のネギは教師で相手は生徒だ。さすがにこのシチュエーションはネギには経験がない。

「そういえば、新田先生が怒られた時にはもう姿が見えなかったわね。そうよね、夏美ちゃん」

「え？　そ、そういえばホテルに戻ってきてから全然見てないかも」

さすがに夕食の時はいたけど、と付け足されたその言葉にネギは大きくため息をついた。

(嫌な予感しかしないな……)

自分の幸運値が低い事を自覚しているネギはこの先起こるだろう何かの事を考えると、段々と気分が沈んでいった。

「とりあえず、朝倉が戻ってきたら捕まえておくように」

それだけ言い残して、ネギは次の班の部屋へと向かった。

「ネギ先生、何だか顔色がすぐれないようでしたが大丈夫でしょうか」

(そりゃこんなクラスの相手してりゃ胃の一つでも痛くなるだろうよ)

そう思いながらも長谷川は決して口にしない。だが、自分ももしかしたらああなってしまうのだろうか、と一人身を振寄せたが。

「いやー、行ったみたいだね。もう少しでブッキングするところだったよ。危ない危ない」

「あ、朝倉さん一体今まで何処に！」

ネギに怒られたと思っっている雪広はひょっこり現れた朝倉に詰め寄る。だが、それをヒラリとかわした朝倉はこんな事を言い出した。

「さーて、仕込みは終わったから。本日最後にして最大のイベントの始まりだよ」

(ご愁傷さまだな、先生)

今度胃薬でも差し入れてやるか、と長谷川は一人小さな先生の身を安じていた。最も、面倒なため騒ぎを起こそうとする者達を止めようとはしなかったが。

その29（後書き）

短いつす。ええ、本当に。

新田先生に対してネギは敬語なわけだけでも、アーチャーが敬語を使っているのかと思うと違和感しかない。アーチャーに敬語って合いませんよね。

その30(前書き)

また週末更新できなかった……最近やけに週末誘われるんだが、何でだ？

その30

「兄貴、終わりやしたぜ」

「ご苦労だったなカモ」

頼んでいた仕事を終えて戻ってきたカモにネギはねぎらいの言葉と共にクツキーを与える。

「広いんで時間がかかったけど、これで完璧だぜ！」

「ああ、感謝している」

ネギがカモに頼んでいたのはオコジヨ妖精が使うとあるオコジヨ魔法を旅館全体に張り巡らせることだ。その魔法とは念話探知。念話妨害と同じ系統のオコジヨ魔法であり、こちらは念話の発信・受信元を探るものだ。さすがに携帯などの電子機器には対応できないが、非常に役立つ魔法である。

「それじゃあ、俺たちは部屋に戻らせてもらっぜ」

「ああ、ゆっくり体を休ませてくれ」

旅館一体をカバー出来る程に効果範囲を広げようとするならば、それなりの手間と労力を消費する。それが妖精とはいえオコジヨならなおさらだ。最近、カモが役に立っていないと悔しがっていたツカモの飲み仲間であるチャチャゼロから聞いていたがそんなことはない、お前は役に立っているのだと、ネギは走り去るカモの後ろ姿に呟いた。

「だーかーら！ ネギ先生とちゅうだつてば！ いいんちよはしたくないの？」

「それは勿論したいに決まって……し、しかしそんなこと出来るはずが」

ネギは10歳とは思えない雰囲気や言動から子供でありながら生徒達からはちゃんと教師として見られている面が強い。だが、時折見せる年相応な笑顔に普段とのギャップを感じ、それが良い！ という者達も存在するのは確かである。

「考えてみなよいいんちよ。ネギ先生と二人きり、徐々に近づいていく二人の距離。普段とは打って変わって弱腰になるネギ先生をいいんちよが優しく……」

「弱腰になるネギ先生を、私が優しく……」

「ネギ先生……」

「ゆき、ひろ……駄目だ、私達は」

壁を背にするネギ。雪広はネギの顔の両脇に手を置き、逃げられない様にする。

「ふふふ、そんなこといって全然抵抗なさらないじゃないですか」

「くうっ……」

ペロリ、と雪広はネギの頬を伝う一筋の汗を舌で救いとった。その時ネギは普段からは考えられないようなよわよわしい声をもらしながらピクンと体を震わす。

「大丈夫です。私が優しく、導いてさしあげます」

「ゆき、ひろ……私、はんっ」

ネギの言葉が途中で途切れる。雪広がネギの唇を自らのもので塞いだのだ。二人の唾液の絡まる音が、誰もいない空間に響く。

「ネギ、しえんしええ」

「ゆきひろお」

初めての接吻は、両者に呂律が回らなくなるほど刺激的なものであった。そして、雪広はもう止まらない。

「せんしえ、この先まで……」

「……はい」

そして二人はめでたくむすば……

「さいつじつですわー!」

「いいんちよ！ 鼻血！ 鼻血出てるって！」

頬を真っ赤に染めながら鼻血をダバツダバに垂れ流す雪広に村上夏美が慌ててティッシュを渡す。何というか、美人が鼻血を流している構図には思うところがあるようだ。未だ興奮の収まらぬ雪広を強引に座らせ鼻血の処理を始めた。

「それで朝倉さん！ 詳細はどうなってますの！」

「ちゃんとして決めてあるから。今から他の班にも告知してくるから」

雪広が堕ちた瞬間に、ネギが苦勞することは決定した。だが、彼女達は気付いているだろうか？ 彼女達が今夜は無事眠ることが出来なくなったことも、この瞬間にきまっていた事に……

「さーて、それじゃあラブラブキッズ大作戦！ 開始！」

各部屋に設置されたモニターを通して朝倉が開会宣言を行う。各班から選出されたメンバーは以下の通りだ。

一班：雪広あやか、村上夏美

「ネギ先生の唇は私が！」

「何で参加させられてるのぉー！」

二班：古菲、長瀬楓

「ネギ坊主を見つけたら勝負するアル」

「うーむ、拙者も興味があるのでござるな」

三班：佐々木まき絵、大河内アキラ

「アキラが参加するなんて思わなかったよ」

「楽しそうだから」

四班：鳴滝風香、鳴滝史伽

「へっへ〜ん！ 僕達にかかれば楽勝楽勝」

「お姉ちゃん、相手にはかえで姉がいるんですよー」

五班：綾瀬夕映、宮崎のどか

「ゆ、ゆえ〜。どうしてこんなことになってるの〜」

「ハルナが何か企んでいるかと思えば……こんなアホなことを」

「さーて、今夜最後にして最大のイベント！ トトカルチヨはまだ受け付けてるよ！ 選手の皆は頑張ってるね！」

長い長い夜が始まる。

その30(後書き)

はい、話が進まず申し訳ありません。
次回はラブラブキッス大作戦(笑)です。

その31(前書き)

一日遅れてしまいました。 すいません。 まさか19:30に寝ることにになるとは……

絶対昨今の小学生より早いよねこれ。 起きたのは7:30頃。
久々にたっぷり12時間寝させてもらいました。

その31

「やれやれ、一体何を始めたんだ」

生徒たちの部屋を一通り周った後、ネギはとりあえず部屋で一休みしようとして廊下を歩いていった。だが、それも束の間。旅館を動き回る複数の存在を感じ取ってしまった。何処か覚えのある気配のそれは、間違いなく生徒のものだろう。大きなため息を一つ吐いたネギは、他の教員に迷惑をかける前に鎮圧しようとして元来た道を引き返した。

「うーむ、いないでござるなあ」

「気配のけの字もないアル」

自分達の担任であるネギ・スプリングフィールドは彼女達が只者ではないと赴任当初から目を置いていた存在だ。只者ではないが故にその気配は常人とはどこかしら違うものがあり、すぐに見つかる二人は思っていた。だが、蓋を開けてみれば15分ほど歩きまわってみたものの影すら踏むことができないでいた。

「それにしても、勝ったらそうするアル？ 本当にキスするアルか？」

「ん〜？ そういえば、これはそういうイベントでござったな」

「私キスなんて初めてアルよ〜」

「拙者もしたことはないでござるなあ」

武道派の二人と言えどもやはり年頃の女の子であるのか、今はネギとのキスで頭がいっぱいのようだ。そのせいで、普段なら起こさない様なミスを起こした。

「ほう。何をどうしたらキスが出来るんだ？」

「先生の目を掻い潜りネギ先生を見つけたらキス出来るアル」

「く、古！」

楓は比較的思考が浅かったのか、古菲へ問いかけた声の主が誰なのか早々に気付いたようだ。だが、問題のその人物から浴びせられる押し潰されそうな威圧感のせいで動く事が出来ない。

「ちなみに……誰と？」

「ネギ先生アル！」

楓はやってしまったと頭に手をやっているが最早無意味。古菲から聞きたい情報を得たネギは古菲の首筋に手刀をいれて早々に気絶させ、楓へと預ける。

「首謀者の情報を言いたまえ。そして、その後はロビーに言って正座だ」

勿論古菲もだ。と付け加えたネギに楓は正直に朝倉が首謀者だと告げる。居場所は分かるかとも聞かれたが、さすがにそれは知らなかったためそれも正直に答えた。

「分かった。それでは行くといい」

「先生、学園に帰ったら手合わせをお願いしても良いでしょうか？」

このタイミングで言っているものかと楓は思ったが、このイベントに参加した目的はネギの実力を知りたかったからなのだ。ここを逃せば次言いだせるタイミングが何時になるか分からなくなるため拒否されるのを覚悟で聞いたのだ。

「……これ以上騒動を起こさなければ前向きに考えよう」

そう言つて、ネギは次なる獲物あさくらを探して去って行った。楓は予想以上に良い返事が返ってきたことに気分が良くなり、この後どれだけ続くか分からない正座が待っていると言つのに笑顔でロビーへ向かつて行った。

「あっ！ 見つけた！」

しばらくネギは朝倉を探して旅館内を歩き回っていた。集中すれば旅館内にいる人々の大体の位置は割り出せるがいかにせん朝倉は一般人なのだ。常人とは違った気配を持っていた先の二人とはわけが違う。一応、気配の集まりが少ない場所を中心に周ってはいるものの未だ当たりは来ない。

そんなわけで先ずは動き回っている者達から捕えることにしたのだが、丁度此方に向かってきている気配があったので待っていたのだ。

「佐々木に……大河内？」

「アキラやったよ！ 私達の優勝だ！」

「そうみたいだね」

正直、ネギにとって大河内アキラがこのイベントに参加しているのは予想外だった。自分が彼女のことを把握できていなかったのか、それとも修学旅行でテンションが上がっていたのか……。どっちにしろ、アキラが参加していることにネギは多少ショックを受けた。

「それじゃ、ネギ「佐々木」「ふえ？」

「佐々木」

「ど、どうしたの……かな？ あ、あはは」

自分の名前を呼ぶネギに何か不穏なものを感じたのか、まき絵は自分も知らないうちに腰が引けじわじわと後ずさっている。隣にいるアキラも同様だ。

「二人とも、ロビーに行つて正座。今すぐだ」

「え、ええー。折角勝つたのに」

「大河内、連れて行け」

「わ、分かった」

一応の反論をしたまき絵とは違い、アキラはネギに逆らうつもりは無い様だ。素早くまき絵の体を確保し、軽々と持ち上げてロビーへ

と運び始める。離してーと言いながら運ばれていくまき絵に、ネギは一つ声をかけることにした。

「佐々木。私が生徒とキスをするわけがないだろう」

「そ、そんな」

ネギの言葉にがつくりと頂垂れたまき絵は、抵抗することなく静かにアキラに運ばれていった。

「さて、とりあえずは参加者を把握した方が無難だな」

楓や古菲、今回はアキラやまき絵に誰が参加しているのかをネギは聞き忘れていた。とりあえず、こんなイベントを止めなかった者達を叱ることを視野にいれつつ、ネギは再度生徒達の部屋へと向かうのだった。

「お前達はそこまで私の胃に穴を開けたいのか？」

現在、ロビーでは3・Aの大半の生徒が正座をして縮こまっていた。勿論、真名や刹那もだ。生徒の部屋へ向かった当初、ネギは参加してない生徒達へは軽く叱る程度ですまそうと思っていた。だが、どこからか持ちこんだモニタを通してイベントを観覧し、かけまですているのを見てさすがのネギも真剣に怒った。その結果がこれである。先ほどからしずな先生が生徒達を気の毒そうに見ているがネギはやめるつもりはなかった。

「今から残りの生徒を捕まえてくる。ただし、私が見ていないから

と行ってその場から一歩でも動いてみる。その場合は夜通し正座だ。他の先生方が止めようと決して止めんからな」

実際にそんなことをすれば翌日に寝不足が原因で交通事故などを起こす危険があるためしないのだが、生徒達はネギの目からこれは本気だと感じ取り黙って首を縦に振った。

「さて、行くか」

「うわー、これはヤバイよ」

旅館のとある女子トイレでイベントの実況をしていた朝倉は非常に焦っていた。確かに、ラブラブキッスなんて無いようにしたのは失敗だったかもしれないが、まさかネギがここまで怒るとは思わなかったのだ。

「どうしよう。早く逃げないと……」

早く撤収せねばと思う朝倉だったがここは女子トイレ。男であるネギではとても入ってこれない場所だ。要するに、ここにこのままいた方が安全？ と思っただけだ。隠れていれば隠れている程ネギの怒りのゲージが上がっていくためその考え自体が間違いなのだが。

「そうときまればしばらくここに……ん？」

何か小動物の鳴き声の様な者が聞こえて視線を下にやると一匹の白いオコシヨがいた。いくらか前にネギが飼い始めたペットだったはずだ。修学旅行に連れて来たのかと驚きながらも朝倉はそーっとオ

コジヨへと手を伸ばす。

「おいでおいでー。っと、いっちゃったか」

ゆっくり近づきながら手でこまねいてみるがオコジヨはササーっと駆けて行ってしまった。ほとぼりが冷めるまでのいい暇潰しが出来たと思っていた朝倉は小さく肩を落とした。

「朝倉」

「うひゃいっ！」

突如ドア越しに掛けられた声。それは、朝倉が今一番聞きたくない人物の者だった。

「出てこい。直ぐに出てこればまだ罰を軽くしてやるかもしれんぞ？」

（不味い不味い不味いよ!? こ、こうなったら別人のふりをするしか……）

「言っておくが、別人のふりをして無駄だ。ここにいることは分かっている」

（先生ってエスパーかなにか!?)

「これが最後だ。出てこい」

「はい……」

こうして、3・Aの生徒は全員ロビーで二時間（首謀者の朝倉は三時間）正座することになる。他の教員達は少しでも短くしてあげようとネギを説得したがネギは頑として折れる事は無かった。それどころか正座を追えて帰っていく生徒達に明日寝坊したらまた正座だと追い討ちをかけるほどである。それを聞いた生徒達は早々に布団に入り、ネギは怒らせない様にしようと心にしまふのだった。

正座終了後。とある班の部屋

「ハルナのばかばかばかー！」

「ちよ、痛いつてばのどか」

「甘んじて受けるといいです」

既に皆が寝静まった中布団の中で話をしているのはのどか、はるな、夕映の三人だ。ハルナが策謀した結果、こんな結末を迎えたのだからのどかが怒るのも無理は無い。

「もう、ハルナなんか知らない！」

そののどかは自分の想いを伝えることに消極的だったのだ。生徒と先生の関係である今、想いが叶う確立低い事など自明の理なのだから。しかも正座中に生徒とキスをするはずがないだろうとネギが延々と説教をしていたのだ。最低でも卒業をしなければ相手として成立しないと言われ続けたに等しいのどかの怒りはそうとうなものだ。

「夕映」

「今回ばかりはハルナが悪いです」

夕映もハルナ同様のどこかに告白させようという気が多少はあったが、まさかこんなことをしでかすとは思わなかったのだ。しばらくのどかに恋愛関係の話はタブーだと心に留めながら夕映はハルナを無視して眠りについた。

「良かれとおもってやったことなのにい」

良かれと思えば何をしてもいいわけではない。つまりはそういってとなのである。

その31（後書き）

最初はのどかに告白させようかと思ってたはずなのにこんなになつてたのでござぬ。

しかも今後告白なんかねーよフラグまで。

一体どうしてこうなった……

その32(前書き)

先週は申し訳ありませんでした。体調崩し+大学開始で忙しく投稿
できませんでした。

その32

「ここ、か」

目の前には無数の鳥居が鎮座し、山の上へと続いている。一見、高名な神社か何かの入り口に見えなくもないここだが、その実態は日本を二分する魔法組織の片割れ。関西呪術協会総本山への入り口なのだ。

木乃香を狙いとした襲撃があつたと学園長に報告した所、早々に親書を届け関西側にも対処、協力を要請せよとの指示を受けたため朝からネギはここを訪れたのだ。

「さて、何も無ければいいが」

相手とて関西呪術協会まで出張ってきてはさすがに手が出せなくなるだろうし、ここから総本山までの僅かな道中に仕掛けてくる可能性は十分にありうる。総本山の目の前で事を起こすのは不味い様に見えるかもしれないが、任務達成の直前はどうしても気が緩んでしまふ。その事を考えれば、多少のリスクを背負ってでも、と考えてもおかしくは無い。

「どうぞこちらへ」

「はい」

結果から言えば、妨害はなかった。ネギは広い一室に案内され関西の長を待っている。

「お待たせしました。私が関西呪術協会の長、近衛詠春と申します」

「関東魔法協会のネギ・スプリングフィールドです。この度は関東のために時間を割いて頂き、ありがとうございます」

「いえ、此方とて両者の関係改善は望むところですので。それにしても、良く似ている」

懐かしむ様な笑顔を見せる詠春。彼は行方知れずになって久しいナギ・スプリングフィールドの仲間なのだ。故郷の者達に瓜二つと評されたネギに、友の姿を見るのも無理はあるまい。

「此方が、学園長より託された親書になります」

「確かに、受け取りました」

少しの時間を置いて、ネギは懐から取り出した親書を手渡した。一応外面は正式な文書である親書を目の前で読んだりはしないのか、詠春はそれを懐へとしまう。

「それで、御息女を狙った襲撃者に関してなのですが……」

「ええ、聞いています」

先に学園の方に連絡を受けていたのか、詠春の顔に驚愕の色は無い。あるのは愛しい娘が裏の世界に巻き込まれようとしていることに対しての苦渋のみだ。

「しかし、本当なのですか？ エヴァンジェリнкаクラスの強者が居

ると言うのは「

「間違いなく」

そして、この一点が問題だった。エヴァンジェリオンクラスの強者。即ち世界最強レベルの者ということだ。詠春はネギがエヴァンジェリンに師事を仰いでいると言うことにも驚いたが、それほどの実力者が日本に居るといふ事態に更に驚いていた。

「不味いですね……現在、此方の実力者は各地に出回っていますし、そのレベルの相手に対することが出来るのは現状は私一人です。それに、その私も現役を退いて長い。戦ったとしても、勝率は低いでしょう」

「……分かりました。白髪の少年については此方で何とかします。いざとなれば、何とか出来るあてもありますので」

何とかすると言った当たりで詠春は驚愕したが、ネギの言うあてとやらが嘘ではないと察したのだらう。特に反対する事は無かった。

「それですが、此方の総本山を近衛木乃香防衛の拠点として使わせていただきたい」

「その申し出を受けましょう」

さすが、というべきかこの総本山に張り巡らされている結界はかなり強固なものだ。度々言っているが、相手には最強クラスの者がいるため安全、というわけではないが一般人が多くおり派手に動けない旅館などよりはよっぽどましだらう。

「では、学園長に頼んで近衛を此方に滞在させれ理由づけを……」
携帯を取り出そうとポケットに手を伸ばした所で先に携帯が振動した。ネギは詠春とアイコンタクトをして携帯に出る許可を得ると携帯を開いて画面を見た。

「刹那からです。何かあったのかもかもしれません」

画面に表示されたのは桜咲刹那の文字。もしや何かがあったのかとネギは急いで電話ボタンを押し、次いで詠春にも聞こえる様にスピーカーボタンを押した。

『ネギ先生！』

「刹那、落ち着いて状況を説明しろ」

携帯を通して聞こえてくる声にはあまり余裕がない。ネギは落ち着くように一声かけて、状況を説明するように促す。

「襲撃です。方法は投擲による攻撃！ 投擲物は棒手裏剣！」

「厄介ですね」

そう、詠春の言うとおり厄介だ。刹那たちは班で行動していたはずなので少なくとも襲撃開始時は周囲に人がいたはずだ。そして、周りに人がいる故に刹那は投擲物の回避を封じられている。

「人気のない場所には、いけんだらうな」

選択は二つ。人気のない場所に移動して相手を誘うか、逆に今以上

に人が密集する場所に移動し、相手の攻撃を封じつつ身を隠すかだ。前者は修学旅行で観光をしていたらから早々人気のない場所になど行けるわけがないだろう。後者はさすがに一般時に被害を与えないことはないだろうという希望的観測が入るが有効ではあるだろう。

『ひとまずシネマ村に向かおうと思います』

刹那もネギと同じ考えに至ったのだろう。案の是非を問ってくる。ネギはそれにすぐに返事することなく、詠春を見やった。この案はある意味一般人を盾にするということだ。そんな案を、この地をこれまで守ってきた組織に許可を得ずに行うのは不味いだろう。

「ひとまず、その案でいきましょう。刹那君、このかをお願いします」

『この声は長！ おられたのですか！？』

「刹那、私も至急シネマ村へ向かう。それまで、頼んだぞ」

『はい！』

刹那の強い返事を最後に、電話は切られた。

「それでは、私は現場へ向かいます。近衛を保護したのち、此方へ戻ります」

「分かりました。娘を、お願いします」

「分かっています。私は教師ですから、生徒は守ります。全力で」

頭を下げる詠春を背に、ネギはシネマ村へと向かう。

その32 (後書き)

ネギ関西呪術協会へ。刹那、襲撃に会う。でした。ストーリー全然進んでないねっていうのは秘密です。

次回はちょっとバトル入ります。でも、多分10行くらいで終わるんじゃないかな。(え?)

その33 (前書き)

進展があ……ない!

その33

「まっとなたでえ！ 勝負や！」

「……………」

本山を出てすぐ。行きにも通った鳥居が数多整列する通路で、ネギは敵の罠に落ちた。エミヤであった頃の世界の異常に対する敏感さは此方の世界の結界等にも有効だったらしく早々に気付いたのはよかったが、この結界は性質が悪かった。

無限ループ。一言で表すならこれだ。前に行っても後ろに行っても横に行っても同じ場所に戻ってきてしまう。これほどの結界ならば起点が存在するだろうと探しに行こうとした刹那、現れたのがこの少年だ。

黒い髪に学ランを着たネギと同世代の少年。しかし、顔の横には存在するはずの耳が無く。代わりに頭に犬のような獣耳が鎮座している。

「ハーフ、だな。一体、何の用だ？」

「勝負やゆつたやる！」

「断る。理由が無い」

この少年が件の一味であろうことは容易く想像できた。あえて会話をしているのは少しでも情報を集めようとしているからだ。だが……

「お前にはなくても、俺にはあるんや！」

「無防備に突っ込むか。愚かだな」

「うっ……！？」

ネギとて急いでいる。情報が聞き出せないのならば、早々に気絶させるだけだ。フェイントも何もいれずに正面から瞬動で突っ込んで来た少年の腹部にカウンターで拳を叩きこみ、意識を奪う。

「気絶したな。獣化をされては面倒だからな」

あいにくと裏の者を縛っておけるような物を持っていないため、仕方なくネギは少年を道端に転ばせておく。そして、結界の起点を探し、早々にその場を去った。

「くっ！」

飛来する三つの影。刹那はその軌道を正確に見極めつかみ取る。つかみ取ったのは鋭く研がれた棒手裏剣。気や魔力で強化せずとも人体に容易く突き刺さるだろう業物だ。

「せ、せっちゃん。どうしたん？」

「い、いえ。とにかく、付いてきて下さい！」

突然腕を掴み走り出した幼馴染に木乃香は必死に付き従っていた。図書館探検部として基礎体力はそれなりにあるものの、剣道部どこ

るか裏の世界でも現役まつただ中の刹那の走りに付いて行くのは辛い。ただ、辛いにも関わらずその顔に笑みが浮かんでいるのは麻帆良に来てからというものの素気なかった刹那が昔の様に手を繋いでくれていると言う現状が、どうしようもなく嬉しいからだろう。

「ちょ、ちよつと……。どこいくのよ!」

「と、突然マラソンだなんて……」

後ろの方で必死に追いつがる班員が何かを言っているが今の刹那にそこまで気を割く余裕はなかった。今も、木乃香向けて放たれた棒手裏剣をキャッチしている。

「見えた!」

一時身を隠すために向かっていた目的地、シネマ村の外壁が見えてきた。刹那はもう待てないとばかりに木乃香を抱き上げ……飛んだ。

「は?」

「え?」

「嘘?」

目の前で起こったことに、3-Aの皆は思わず足を止めた。なんせ、クラスメイトが一人抱えて宙を舞ったのだ。その本人は武道四天王と言われる面子の一人とはいえ、さすがに驚いていた。

「てゆうか、金払えです」

ただ一人、クラスメイトに突っ込みを入れる者もいたが。

「さて、刹那たちはどこだ？」

シネマ村の一角にある大きな城。その屋根の上で、ネギは周囲を見渡ししていた。最大速度で飛んできたものの、本山で連絡を受けてからそれなりの時間が経ってしまっている。早く見つけなければ。そう思った所で、大きな人混みが目に付いた。場所が場所だけに撮影でもしているのかとネギは興味なさげに軽く視線をやったのだが、その中心にいる者たちを確認し、目を見開いた。

「やってくれる！」

人混みの中心にいたのは刹那と木乃香。そして、敵だった。想像するに、一般客に撮影と想わせることで逃げ道をふさいだのだろう。中々に、頭が回る。だが、放っておくと言う選択肢は無い。

「さて、い「かせないよ」

屋上より身を投げ出そうとした瞬間、突如ネギの後ろで発生した魔力。そして現れる気配。ネギは屋上から飛ぶ事を中断し、顔めがけて放たれた鋭い蹴りを身を低くすることでかわした。数本の髪がはらはらと枚落ちることから、今の蹴りの鋭さがうかがえる。

「またお前か」

すぐさま飛びのき、蹴りを放った相手と顔を突き合わせてみれば修学旅行最初の夜に対峙した”最強クラス”の少年が、そこにいた。

「邪魔はさせないよ」

「……………」

肩越しにチラリと眼下を見てみれば、刹那が戦いを始めていた。一般人には被害は出ていない……と思ったが、何故か3-Aの生徒が何人か式紙に押さえつけられていた。とりあえず、実害はなさそうだったためネギは見なかったことにした。

「安心していい。一般人に傷は付けない」

「そうか。出来ればその親切心を私にも働かせて欲しいものだ」

「裏の者は話が別さ」

両者の体を魔力が包む。発言した魔力の量は同等。発揮される能力が等しいなら、後は技量と心が勝負を決める。

「じゃあ、行くよ」

ゆらり、と動きだした相手に合わせる様にネギは構えをとり、放たれた拳を迎え撃った。

その33 (後書き)

土曜の夜からずっと(睡眠とかはとったよ?)エウシュリーの新作をやってみました。

とりあえず三章まで進んで一端休止。死神討伐ね……ミスったんだ。セーブもしてなかった。全回復とかされちゃうと、さすがにちょっとやる気が……

本当ならレポートやる予定だったのに、面白すぎたせいで結局やってないよ。明日頑張らないと。

その34 (前書き)

決戦前。次回からは修学旅行最後の夜が幕を開けます。

その34

「これから、どう動くので？」

「本山に向かう。既に西の長の了承は得ているからな」

「二人とも、何の話してるん？」

刹那、ネギ、共に敵に阻まれていた時はもしや伏兵がいるのではないかと戦々恐々としていたが、結果はこの通り無事だった。意外にも、彼らの窮地を救ったのは一般人……シネマ村の運営をしているスタッフの方々だった。彼等は自分たちの関与していない騒ぎに最初は目を瞑っていたものの、施設……小川に掛けられた橋が崩壊したとあつては黙っているわけにはいかなかった。

騒ぎの鎮圧に動き出したスタッフを見た月詠は不本意そうに、ほんつとくに不本意そうにその場を離脱。刹那も捕まるわけにはいかぬと木乃香と共に離脱し、衣装を着替えてネギと合流したのだ。ちなみに、フェイトと名乗った少年も、月詠の撤退と同時にひいていった。

「近衛、今から君の実家に行くぞ」

「うちの家？」

修学旅行中に何故？ と可愛らしく首をかしげる木乃香に刹那が僅かに頬を染めた気がしたがネギはそれを無視し話を続ける。

「三者面談のようなものだ。こんな機会はめったにないからな」

「そういつことやったんか」

この時ばかりは麻帆良に暮らす彼女のおおらかさというか何というか、彼女の性格にネギは感謝した。

「それでは、行くでしょう。先方には連絡がいつているはずだから、きつと待っておられるだろう」

「そつやな。いこ！ せつちゃん」

「は、はい」

三人は本山へと向かう。刹那の鞆に、とんでもない厄介のタネが潜まされていることに気付かず。

「……勘弁してくれ」

「どーしたん？」

「ネギ先生？」

目的地である本山へと続く鳥居道。突如足を止め頭に手を当てたネギに二人は眉をしかめ、心配する。だが、ネギはそれどころではなかった。

（何故、辿りつけた？ 尾行の気配はなかったはずだ。これではま

るで、最初から此方の目的地が分かっていたかのような……待て。まさか、さすがにそんな)

「先生、どうしたんですか？」

いくら呼びかけても反応しないネギにさすがに不安になってきたのか、刹那がその肩を掴んで強めにゆする。それでようやく、ネギは思考の海より浮かび上がる。

「刹那、覚悟しておけ」

「覚悟？」

「今日の夜は、長くなるぞ」

ネギの目は、遠くより此方に向かってくる数人の生徒の姿をしつかりと捕えていた。

「申し訳ありません。まさか、荷物にGPS携帯を仕込んで追ってくるとは……」

「いえ、たしかにこの状況では歓迎できませんが、仕方ないでしょう」

ネギは追ってきた生徒達がまさか発振機に類するものでも仕込んだのではないかと一瞬疑っていた。昨日、旅館であれだけ状況を整えて騒ぎを起こしたのだ。発信器の一つや二つ、持ちだしてきても不思議ではない。だが、さすがにそんな常識はずれなことはいないだ

ろうと、ネギは信じたかった。が、朝倉は刹那の鞆にGPS携帯を
放りこんでいた。発信器より聞こえがいいが、位置を特定できる事
には変わらない。

「夜になったら、彼女達には眠っててもらいましょう」

「ええ、そうですね」

そんな裏の事情を知る筈もない生徒達、とりわけネギ等三人を追っ
てきたメンバーである明日菜、朝倉、ハルナ、のどか、夕映の五人
は巫女さん達に早い夕食をふるまわれていた。まだ、時刻は五時を
回った所。空腹感が出るのもう少し後なのだがふるまわれる料理
はどれも一流。彼女達の箸は止まることなく動いている。

「いやー、先生に怒られた時はどうなることかと思っただけ。そん
なものはふつとぶね！」

「確かに、どれも素晴らしい味です」

「アンタ等はいいわよね……」

ネギ達に追いついた後、GPS携帯のネタばらしをした所で彼女達
はネギに盛大に怒られた。全員が頭頂部に容赦なく拳骨を貰い、当
時は全員頭を抱えて屈みこんだものだ。その中でも主犯である朝倉
に放たれた拳骨は強力で、その後が瘤となって残され、今も朝倉は
巫女さんに用意してもらったビニール袋に入った氷水をタオル越し
に頭にあてて冷やしている。

「お父様と先生、どこいったんやる？」

「あ、これ美味しい」

そんな中、木乃香だけ箸が進んでいなかった。確か、ここに来たのは三者面談のためではなかったのだろうか？　だと言うのに教師と父親は早々に二人だけで奥へと消えていき、気がつけば幼馴染の姿もない。そのことが、木乃香は何故か妙に気になっていた。

「ああ、頼む」

クラスメイトが起こす喧騒の中から抜け出した刹那はとある人物に連絡を取っていた。現時点における戦力の増加。それを済ましておく必要があったのだ。白状してしまえば、後二人ほど戦力として見込める人物がいる。だが、その二人は一応一般人として扱われている以上安易に頼る事はできない。

「長、先生」

電話を切った後も、しばらくその場で佇んでいると奥からネギと詠春が現れた。この後どう動くのか、大体の方針が定まったのだろう。

「刹那、真名との連絡はどうだ」

「終わっています。ただ、まだ明るく班員にも捕まっているため抜け出すのはしばらく先。とのことですよ。それで……」

「……このかに、全てを伝えることにしました」

「そう、ですか」

このまま無事に終わるとしても終わらないとしても、伝えておく必要がある。一度木乃香を目的とした襲撃が起きた以上、成功するかはともかく襲撃自体は可能だと考える勢力が出てくる可能性がある。もう、黙っておくわけにはいかないのだ。

「刹那君、君が悔やむ必要はありません。全ては私の中途半端が招いたことです。彼にも、怒られてしまいましたから」

「長……」

「これまで、君には苦勞をかけました。しかし、出来る事ならばこれからもこのかを守ってくれませんか？」

西の長という立場では無く、一人の父親として発せられた言葉を刹那が断ることができようか。嫌、そも最初から断る理由などないのだ。

「お嬢様……いえ、このちゃんは私がお守りします」

剣を胸に、刹那は改めてそう誓った。

その34（後書き）

ネギが叱ったのは「とおざけたいなら魔力を封印するなどの措置を何故しなかった」とかそんな感じ。絶対ではないですが、封印しておいた方がそのままよりよっぽどマシでしょう。

神採り一週目クリアしたぜ！ 現在二週目をセラウィルトで挑戦中。とりあえず、これを投稿したらプレイに戻るぞえ。

その35 (前書き)

神採り二週目、衣装強化ばかりしてたら金が足りなくなってきたよ。

誰かいい稼ぎ方をおしえr y

その35

「このか、後で奥の部屋に来なさい」

そうこのかが言われたのは、食事が終わりを迎えようとした頃だった。これまで見た事のない様な真剣な表情をした父親に、このかは何か重大なものがあると感じ取り静かに頷いた。

「もう少ししたらこのかがここに来ます」

現在、このかは友人たちと風呂に入っている。そこから上がればここにやって来るはずだ。それと同時に、クラスメイトの面々に明日の朝までゆっくりと眠っていてもらう予定である。

「やはり、襲撃はあるのでしょうか……」

三人の中でも刹那は一際強く不安を感じている。純粹に経験が足りないと言うのもあるが、何より自分ではこのかを守れないのではないかと不安なのだ。相手には若かりし頃の詠春、俗に言う最強の領域立つ者がいるとなればなおさらだろう。

「確率が高いだろうな」

大丈夫だなどと言う気休めは言わない。下手に安心させて隙を招くよりは不安と緊張を与えておいた方がいい。そこで、ネギは詠春の顔が先ほどより沈んでいることに気がついた。

「どうかしたのか？」

「……実は、もう一つ不安要素が」

「話してくれ」

この段階に来てようやく口にしたと言う事はその不安要素とやらは本来隠されているべきものなのだろう。だが、黙っていて何かあつては遅い。

「実は、このかのクラスメイトの……」

「きゃあああああ！！」

「「「！？」」」

詠春の言葉を遮るようにして響き渡った悲鳴。この声の主を、ネギはすぐに察することが出来た。

「神楽坂か！」

障子を蹴り破り戦いの歌を使って駆けだす。一步遅れて詠春と刹那も部屋を飛び出してきた。

「刹那と長は近衛を！」

二人は無言で頷きネギと分かれる。一人明日菜を探すネギは先の悲鳴を頼りに屋敷を駆けける。

そして、見つけた。廊下に倒れ、身を微かに震わせる明日菜の姿を。

「神楽坂、無事か！」

すぐさま駆けより抱き起こす。簡単に体を精査するが目立った外傷はない。辺りを見渡してみると、すぐ傍の部屋、障子が開け放たれたその場所に……

「……………こうしておけば邪魔は入らない。そういうことか」

恐らく魔法によって石にされたと思われる生徒たちの姿があった。

「まで、一人足りない…………？」

よく見てみれば、本山についてきた生徒たちの数より石像の数が少ない。

「宮崎、か！」

「剎那君！」

「はい！」

ネギと離れた二人は早々に二つの人の気配を察知していた。感じられる気配には敵意や殺気と言ったものは全く見られず、一般人……ひいてはこのかである可能性が高かった。それを理解している二人は更に足を速めて気配の者へと向かう。

「ほら、ここやえ」

「あ、ありがとうございます」

「ええよ、広いから分かりにくいもんなあ」

このかはお手洗いに行きたいと言ったのどかをトイレまで案内していた。この広い屋敷では、口で説明するより直接案内したほうが早いのだ。

「それじゃあ、うちは行くけど……」

「大丈夫です。道は覚えましたから」

こう言ったのが明日菜であれば本当に覚えられたのかと疑うこのかだがのどかが相手ならば問題なく信じられた。何せ、のどかは学年でもトップクラスの頭脳を持っているのだ。こういったことに関しての信用度は明日菜の比ではない。

「それじゃあ……のどか！」

「ふえ？」

のどかの背後、何も無かった筈の底にスウーッと現れた一つの影。余りに異質な現象に、このかと思わず声を張り上げていた。対してそんな事が自分の背後で怒っていることなど全く知らないのどかはいきなり大きな声を出した友人に顔をしかめるだけだ。

「……………」

のどかの背後に現れた少年が手をかざす。すると、その手に灰色の光が集まり始めた。その光にどうしようもない悪寒を覚えたこのかのはどかを引き寄せようと手を伸ばす。しかし、時既に遅し。このかの手がのどかを引き寄せる前に、灰色の光が解き放たれる……はずだった。

「女性には優しくなさいと教わりませんでしたか？」

「あいにくと、そんなことを教えてくれる人はいなかったね」

少年……フェイトの手首を、タッチの差で現場に会った詠春が掴み取っていた。

「そうですね。ですが、だからといって許しはしません、よ！」

開いた右手に持つ抜き身の刀を手加減なしにフェイトの腹部へと叩きこむ。だが、例え魔力で強化していようと也容易く人を両断出来ていたはずの一刀は、障壁によって完全に防がれていた。

「紅き翼の青山詠春、か。いや、今は近衛だったね」

「そういうお前は……まさか!？」

詠春の思った以上に事態は切迫していたようだ。目の前の少年に、詠春は見覚えがあった。詠春の記憶にあるより幾分幼い容姿をしているが、間違いない。

「やれやれ、貴方に姿を見せたのは失敗だったかな」

その言葉は、詠春の推測を確実にするものだった。

「刹那君、このかと、ご友人を連れて逃げなさい。出来れば、ネギ君と合流して」

「……長？」

「恐らく、今の私ではあの少年の足止めで精一杯でしょう。そして、長くは持ちません」

詠春の発言に、刹那は目を見開いた。紅き翼の詠春、サムライ・マスターと呼び親しまれた英雄の一角。一戦を退いて長くとも、その実力は極めて高く。彼を相手にして確実に勝てると言えるのは本家のあの姉妹ぐらいだと言うのは有名な話だ。そんな詠春が足止め、それも長くは持たないと自分で言ったのだ。改めて刹那は、己が敵対する者の強大さを知り身を振わせた。

「ねえ、これどうなつとるん？」

「あ、あわわ」

このかとのどか、そのどちらもが今の状況を理解できていなかった。だが、だからこそ少しでも知ろうとこのかかが一歩踏み出す。しかし、それに答えていられるほど、今は余裕がなかった。

「このか、刹那君とご友人と共にネギ君所へ行きなさい」

「……ネギ、先生？」

「刹那君」

「……はい」

刹那が静かに動き、このかとのどかを抱きよせる。

「行きなさい！」

詠春の声と同時に、刹那はこのかとのどかを抱きかかえて走り出した。

その35(後書き)

ここまで進行の遅い作品はそうないんじゃないかと思う今日この頃。
最近は何もやらなんやらが忙しくて中々時間が取れません。

ああ、時間が欲しい。

その36 (前書き)

更新の事すっかり忘れてた。そのせいでいつもよりさらに短いです

O r z

その36

「ネギ先生！」

「刹那！ 長はどうした!？」

「敵の足止めに……それと、長くはもたないと」

「やはり来たのはアイツか！」

あの夜対峙した最強クラスの少年。本山の結界を突破してきたのは、やはり彼だった。

「他の生徒の皆さんは？」

「石にされている。本山の巫女たちも同様だ。恐らく、西洋魔法の……」

「石の息吹だ！」

ネギの言葉に続いたのは何処からともなく現れたカモだった。明日菜を確保してしばらくして合流した彼には生徒たちが石化した原因を探ってもらっていたのだ。

「やはりそうか……と、なると私には治せんな」

ルールブレイカ。この宝具をもってしてもこの石化は治せない。

此方の魔法にも通用する事は実証済みだが、全てを破壊できるわけではないのだ。

「ちょ、ちよつと！ いい加減何が起こってるのか説明してよ！」

「うちも、聞かせてほしい」

その言葉にどうしたものとネギは首を眉をしかめる。明日菜には先ほどからこのかの無事が確認できれば教えると言っていただけにごまかすこともできない。かと言って全部説明するには時間が足りない。

「簡単に言えば、だ」

ならば、単純明快に……

「近衛をさらおうとしている輩がいる、だ」

事実を伝えればいい。

説明を求めた当人達には全く理解できないそれを口にし終わったと同時にネギは戦いの歌を使い飛び出していた。このか達の背後に突如現れた水たまりと、その水たまりが放つ魔力を察知していたからだ。

そして、転移が完了し敵が姿を現すと同時にネギは硬く握り締めた拳を撃ち放った。

「いきなりだね」

だが、その拳は異常なほどの厚さを持つ障壁によって遮られた。

「な、なんなのよアイツ！」

「あ、あの人」

「あうっ」

フェイトの姿を見たか見ていないか。明日菜とこのか、のどか兩名の差は如実に表れた。人がいきなり姿を現すと言う不可思議な現象についていけないながらもしっかりとフェイトに敵意を向ける明日菜。それとは対極に後者二人は身を縮めて震えている。

「お前がここに来たということは……」

「近衛詠春は無力化させてもらったよ」

無力化の言葉からどうやら殺されてはいないであろうことは察せるが、状況が好転したわけではない。むしろ、今のネギと近い実力の詠春をこの短時間で撃破されたことを知り、心情的には悪い方へ傾いている。

「それより、いいのかな？ 僕ばかりに気を向けていて」

「！ 刹那！」

新たに出現した三つの魔力。これは先ほどのものと同じ、転移によるもの。

「あは、刹那センパイ」

「よくやったやないか新人」

「次は負けんでえ！」

敵の戦力が、今ここに集結した。ここにいるのがネギと刹那、そしてこのかだけならばまだ逃げの一手で何とかなかったかもしれない。だが、明日菜とのどかというお荷物が居る以上、それも不可能だ。

(くそ、どうする!?)

答えは既に出ている。以前までと一緒に。9を救うために1を切り捨てる。この状況で言うならば、9のためにこのかを救い、1という明日菜とのどかを見捨てる。これが最も、被害が少なくて済む方法のはずだ。だが、それは正義の味方と言う名のふざけた掃除屋である”エミヤ”としての答えだ。

過去を捨てるつもりは無い。だが、嫌悪する自分と同じにならないためには”ネギ”としての答えを出さなければならない。

(考えるまでもない、か。全く、愚かだな)

ネギ・スプリングフィールドは教師。結局のところ、それだけなのだ。教師は生徒を守る。たった、それだけ。

「さて、戦力の差は明らか。だが、五体満足で済むとは思わなよ」

辺りに充満するのは濃密な殺気。その余りの強さにまだ若く経験の浅い小太郎と術者であり後衛が主で直に殺気に触れる事の少なかつた千草は全身から一気に汗をふきだした。月詠はその殺気にまた新

たな快感を見出し、フェイトはネギの実力の片りんは見ていたもの。ここまでの殺気を出せるのかと驚いていた。

「お嬢様、お下がりにください」

刹那とて、最早勝ち目がないことぐらい理解している。それでも、最後までこのかを守らんと夕凧を抜き放ちネギの横に並び立つ。ネギの様な、とまではいけないが放たれる闘気には眼を見張るものがある。

戦場が静寂に包まれる。何かの合図さえあれば、戦いは始まるだろう。そして、何処からともなく舞い降りた木の葉が……地面に着地した。

その36 (後書き)

次話で決戦か！？　と思われる終わり方ですが多分まだです。はい。
若干ですがネギチャ　がネギへと変わりつつあるもよう。

オリジナル話を繰り上げて修学旅行後にしようかな？　と思っ様な話になってしまった。

その37

「クソッ！」

ネギが苛立ちから拳を横に振る。未だ戦いの歌が切れていないネギの拳は容易く廊下の一角を破壊した。

「お嬢、様」

彼等は無事だった。ただ一人として傷つくことなく立っていた。だが、この場にいる誰にも笑顔は無い。なぜなら……

「どつやら、おそかったようだね」

「真名……」

「とりあえず、経緯を説明してくれるかな？」

「待つてー!!」

地面に落ちた木の葉を合図に激闘が始まるうとした瞬間、戦場に一つの声が投げられた。この事件に渦中にいる、近衛木乃香の声だ。

「あんたらの目的はウチなんやろ？ ついてく……ついてくから！ 皆には何もせんぞ！」

「お嬢様！ 一体何を!?」

刹那の焦りも当然だろう。何せ、たったいま命に変えてでも守ると決意した相手が自ら敵に手に落ちると言うのだ。とてもではないが、冷静ではられない。

「せつちゃん。ウチは、ウチのために誰かに傷ついて欲しくないんや」

「この、ちゃん……」

眼から幾つもの涙をこぼすこのかに刹那は何も言えなくなってしまう。一体、どうすればいいのか。そんな想いだけが、刹那の中に渦巻いていた。

「ハハハハ！ これはええやないか。仲間のために自らを差し出す！ さすがお嬢様。何とも慈愛に満ちたお人や」

敵のリーダー、天ヶ崎千草の耳障りな声が辺りに響き渡る。明日菜や刹那はその声に対し怒りの表情をあらわにしているが、ネギはそれどころではなかった。早くこのかを説得せねばならない。何故か、そんな想いに突き動かされていた。

「近衛、君がその身を差し出した所で何も変わらない。いや、むしろ状況が悪くなる。だから、そんなことはやめたまえ」

「先生……明日菜とせつちゃん、それにのどか。皆を、よろしくお願ひします」

「!?!?」

その言葉を聞き、ネギは体を硬直させた。今のこのかの眼は、顔は、声は……ネギは幾度も体験したはずだ。嫌、ネギではなく、エミヤが……

辺りには最早死体しかない。いつもと同じように多数を救うために殺した少数だ。この頃のエミヤは既に達観していた。正義の味方として、多くを救うためには速やかに少数を切り捨てるしかないのだと。

うう……

一人死体の山の中茫然としてみると、小さなうめき声が聞こえた。まさか、生きている者がいたのかと周囲を見渡すと、すぐに見つかった。自分が切り捨てたものの一人、背中を切り捨てた筈の若い女だ。

誰、か……

今は息があるようだが、出血の様子から見てもう長くない事が分かる。やっておいた本人が何を、と思うかもしれないが、エミヤはその女の最後を看取るべく近づいた。

ああ、来てくれたのね。お願いが、あります

女は弱く声をもらし、何かを差し出してきた。

この子を、お願い。私はいいから、この子を

女が差し出したのは、まだ幼い赤子だった。まさか、隠していたのか？ とエミヤは戦慄した。エミヤはこの女を切った時を覚えている。その時、赤子がいることなど全く気付きはしなかった。この女は、己の命を賭してエミヤから赤子を隠し通し、守ったのだ。

お願い、します

ああ、任された

エミヤが赤子を受け取ると、女は静かに逝った。

これだけではない。幾度も、幾度も、幾度も幾度もエミヤはこれに遭遇した。自らを犠牲に

してでも子を守る親、弟を守る兄、恋人を守る男。戦闘力など欠片もないはずなのに、エミヤは彼らに圧倒された。エミヤとて、このような方法をとっているが自分の身を犠牲にしてまで他人を救ってきた。だが、彼らと自分には何か決定的に違っているとエミヤは感じていた。思えば、この頃から既に察していたのかもしれない。自分の人を救いたいという思いが、本物では無い事に。そして、エミヤはこのかを止められず。彼女は敵の手に渡った。

「なるほどね」

「私の落ち度だ」

「いえ、私も結局……このちゃんを止められませんでした」

「とにかく、今は反省会などを開いてる暇は無い。先生、これから

「どうするんだい？」

事態はまだ終わったわけではないのだ。どうするにしても、次の行動を起こすのは早い方がいい。その辺りは仕事人である真名はよく理解していた。

「無論、近衛を取り戻す」

「敵の居場所は？ それが分からなきゃ始まらないが……」

「それについては、心当たりが」

敵がこのかを連れて立ち去る直前、”これでスクナを……”とこぼしていったのをネギも刹那も耳にしていたのだ。スクナ。ここ京都でスクナと言えば、刹那に思いつくものは一つしかなかった。

「恐らく、昔長とその盟友である千の呪文の男が封印したというリョウメンスクナノカミ。奴等の狙いは、その復活だ」

「ようはソイツの封印場所に迎え場いいわけだ。それじゃあ、早く行動を開始するでしょう」

念のため各々装備を確認し、刹那先導の元スクナの封印場所へ向かおうとし……

「ちょっと待ちなさいよー！！」

「あの、えーっと。置いてかないで下さい」

すっかり忘れられていた一般ふたり人に引きとめられた。

その37（後書き）

どうもです。今回捏造エミヤの過去を少し出しました。今作品ではアーチャー（エミヤ） ネギチャー ネギと精神的变化もかけたらいいんじゃないかと最近思い始めたので意図的にネギチャー のメンタルを脆くしている部分があります。違和感を感じた方が居たら申し訳ありません。

前回、ネギ（教師）としてこのかを守る的な感じでしたが、エミヤという長すぎる人生には相手にもならなかった、といった感じですが、彼が本当にネギになれるのは、もう少し先になります。

それにしても、プロットとの誤差が発生し始めてますので現行とのすり合わせを行いつつ書いてるので本文はこれからもしばらくは短めになると思います。作者の力不足で申し訳ないです。

その38(前書き)

うーむ、進展ねえのう

その38

「来たみたいだよ」

このかを手に入れた千草一行は森の中のひらけた場所で立ち止まっていた。それも新人であるフェイトが追跡の気配を感じ取ったからだ。最初は千草も疑っていたものの、既に大分近くまで迫っているらしいその気配を感じては、黙るしかなかった。

「天ヶ崎千草！ お嬢様を返してもらおう！」

最初に刹那が。次いで真名、明日菜、のどかが姿を現す。そして、その中にネギが居ない事に真っ先に気付いたのはフェイトだった。そして、不意に感じる上空での強い魔力の発現。フェイトは千草達にそれを告げる間もなく上空へと飛びあがる。そして……

雷の暴風！

風と雷による一撃を、完璧に防ぎきって見せた。

「ちッ！」

それを放ったのは一人別行動をとっていたネギだ。しかし、全力に近い力で撃つたにも関わらず何の成果も得られなかったことに思わず舌打ちを零した。

「奇襲とは、やってくれるやないかあ！」

千草はネギの放った魔法に明らかかな恐怖を抱いていた。フェイトが

防がねば、やられていた、と。このかが手の内にあるため派手な攻撃はしてこないと油断していたこともあったが、万全の状態でも防げたか分からない。それほどの一撃だった。

「もう、容赦してやらんでえ！」

そう吐き捨てると、千草は呪を唱え始めた。しかし、その力の発露は千草では無い。千草の背後、大型の猿式神に抱かれたこのかだ。意識はないらしく、力を強引に使われることで僅かに声を漏らしている。

「お嬢様の力の一角、見るとええわ！」

そして、ネギ達の目の前に百を超える化生が姿を現した。

「神楽坂！ 宮崎！ 無事だろうな！」

「だ、大丈夫！」

「わ、わたしもですう！」

百を超える化生との混戦。戦闘等したことのない一般人二名を要するネギ達は圧倒的に不利だった。だが、それでも持ちこたえているのは嬉しい誤算があったからだろう。

「み、右からきます！」

「わ、分かった！」

明日菜とのかのアーティファクトが非常に強力なものだったのだ。詠春の言っていた懸念事項、明日菜のことだがネギは大体察していた。本人から聞くに明日菜は石化の魔法を受けたにも関わらず無力化したというのだ。マジック・キャンセル。その本来の意味こそ知らないが、裏のものにとつて天敵足り得るこの能力は、狙われるだけの価値があるのだとネギは判断した。

今こそ相手の最優先事項はこのかだが、リョウメンスクナノカミの復活に成功し、余裕が出来た後はどうなるか分からない。それ故にネギは明日菜を連れていくことにした。そうなれば最後の一人のどこかを置いていくわけにはいかなかった。眠らせておこうとも思っただが、何故かこのどか、魔力抵抗が一般人とは思えないほど高く、時間の浪費を惜しんで連れていくことにしたのだ。

そして、そうするための最低条件としてネギは二人と仮契約を行った。そうすればネギからの魔力供給が可能となり、それだけで安全性が一気に高まるからだ。そして、出てきたアーティファクトがハノツルギといどのえにつき。召喚された化生を一撃で還す破魔のハリセンと読心能力を持つ絵日記だった。

それらのおかげで二人はここまで特に怪我を負うことなく、明日菜に至つてはその運動神経を生かしてたまに撃退するほどの活躍をみせている。

「真名！」

「分かっているよ！」

その様子を見て手ごわいものを回さなければ一応は安心だと判断したネギは真名にフォローを頼み、自身は敵の撃破に専念したのだ。そのかいもあり、既に化生の数は半分近くまで減少している。だが、やっぱり一人。

「楽しいどすなあ！ センパイ！」

瞳を反転させて刹那へと襲いかかる月詠。彼女だけが厄介だった。今でこそ刹那と互角の戦いを繰り返しているがネギは彼女に今見せているもの以上の何かを感じていた。戦闘者としての特有の勘だ。ネギが刹那に代わり相手に出来れば良いのだが、あいにくと刹那ではこの数の敵をさばききれない。刹那にもそれが分かっているからこそ、月詠の相手に専念しているのだ。

「不味い、な」

時間かかり過ぎている。化生達はネギを倒せと命じられてはいるものの、本来の目的は時間稼ぎだ。直接そう命じられたわけではないが、何となくそれを悟っている兵達は後ろに引いてネギの動きを観察している。何とかして場を動かさねば、とネギが思考をそちらに割き始めたとほぼ同時に、戦場へと新たな影が舞いおりた。

「助っ人するでござるよ！」

「アイヤ、一杯いるアル！」

3 - Aの忍者娘こと長瀬楓と、カンフー娘こと古菲の参入であった。

その38(後書き)

次回から修学旅行編も佳境かな? といった具合ですね。

最近眠くてしょうがない。それもこれも危険物の対策講義があるからだ。

その39 (前書き)

短いつす。でも、連日テストの中で私が書けるのはこれが精一杯です。

あとがきを少々修正。

楓と古菲、二人の新たな戦力が加わったことで戦況は一気に変化した。まず、明日菜が殆ど闘わなくてよくなったのだ。いかにアーティファクトが強力と言えど素人を戦わせているのは不安だっただけにこれは非常にありがたいことだった。そして、もう一つは……

「では、ここは任せたぞ」

「あいあい」

ネギがフリーになれたことだ。それも楓の予想外の戦闘力のおかげだろう。まさか、これほどのレベルの分身を出せるとは思っていなかっただけに、嬉しい誤算であった。

そして、ネギは杖に跨り空へと登る。化生も最早十数匹しかおらず倒してから皆で行けば、と思うかもしれないが、この状況ではそれは余りよろしくない。敵は今この時も着々とスクナ復活の儀式を進めているのだから。勿論、先行する者にはそれ相応の危険が降りかかるがその辺りは皆、ネギの事を信用していた。短い時間の共闘は、ネギの実力を知らしめるには十分な時間だったのだ。

「さて、どうするかな」

ネギは刹那に聞いた祭壇へと向かいながら作戦を練っていた。最大の関門はフェイトと名乗る少年だ。あれは、まだ今のネギでは荷が重い相手だ。倒せる確率は限りなく0に近く、殺す気でもかかっても3割がいいところだろう。

「やはり、相手にしないのが一番か」

確かに、まともにもやり合えば勝てないかもしれないが出し抜くことは可能だ。ネギはフェイトを無視する方向で再び作戦を練り始めたが、不意に下方から何か接近しているのに気付く。意識を集中して探つて見ると、それが何者かが放った気であることをすぐさま悟った。

黒き狗を象った気は杖に跨るネギに牙を剥く。しかし、ネギにこんな単純な攻撃が通用するわけもなく。

風楯！

風属性の物理障壁の前に虚しく散った。だが、その狗の影に隠れる様にして接近していた者がいた。犬上小太郎。狗族の少年だ。

「待つてたでえ！！」

虚空瞬動。空中で瞬動を行う高等技法を用いて勢いよく接近してくる小太郎を、ネギは無言のまま置き去りにした。

「な！？ てめえ！」

しかし、高速移動法である瞬動はネギの杖の飛行速度より早く、すぐに追いつかれてしまった。ネギは心底面倒そうにため息をつく、小太郎へと視線をやった。

「それで、君は一体何の用だ？」

「この間のリベンジマッチや！」

その発言に、思わずネギは怒りを抱いた。時たまいるのだ。こういう奴が。そして、この手の人間はネギが酷く嫌っているタイプだ。

「一応聞いておくが、天ヶ崎を止めなければ被害は無視できない規模のものとなる。それでも、私の邪魔をするのか？」

「そんなこと言うても、逃がさへんで！」

此方の言葉を碌に聞かずに小太郎は襲いかかってくる。それを見て、ネギは小太郎に対する配慮の一切を止めた。ただ気絶させるだけでは済まさない。一瞬で戦いの歌を発動したネギは杖を蹴って小太郎と同じ宙へと躍り出る。顔に抑えきれないほどの闘争の笑みを浮かべた小太郎を冷たく睨みつける。

勝負は一瞬だった。繰り出される小太郎の渾身の右ストレート。だが、鷹の眼を持つネギの前では、それはテレフォンパンチになり下がる。攻撃の軌道を完全に見切り、それに合わせてカウンターを叩きこむ。水月にカウンターを喰らった小太郎は顔を苦痛に染め、そのダメージの大きさから狗族化を行おうとする。

だが、それは大きな隙となる。小太郎が狗族化を行おうとしている事を察するやいなや、ネギは防御を捨てて一気に攻勢に出る。まずは顎先に鞭のように鋭く拳を放つ。これにより小太郎は脳をゆすられ始まっていた狗族化が停止する。加えて碌に動けない小太郎の四肢を、ネギはへし折った。そして最後に小太郎の首を鷲掴み、地面へ向けて虚空瞬動。小太郎の顔面を勢いのままに叩きつけた。

「……………」

小太郎は身じろぎ一つしない。最低限、死なない様にはしたがそれでも重症は免れないだろう。襪襦雑巾のようになった小太郎に眼も

くねず、ネギは杖を呼び戻し再び空を駆けて行った。

その39（後書き）

ネギチャ が小太郎を嫌った理由ですが、彼が一般人への被害を一切気にせず戦うことに固執したからです。

命を救うために戦い続けたアーチャーにとって、周囲の被害を一切度外視してまで戦いたがるような類のバトルジャンキーは嫌悪の対象になるのではないかと思います。

その40(前書き)

夏休みに入って曜日感覚が狂い気味。親が木金休みなのも影響して
るな。

その40

スクナを封じている大岩。その前には、簡易の祭壇が設けられており、そこにはこのかが横たわっていた。祭壇の前では天ヶ崎千草が眼を閉じ呪を唱えており、スクナ復活は最早秒読みと言ってもいい段階だった。

「来た」

儀式に集中していなければいけない千草の代わりに周囲の警戒を行っていたのはフェイトだ。そして、並の者では到底敵わない様な索敵範囲をもって敵の接近をいち早く感じ取った。

「行って、ルビカンテ」

まずは様子見と、フェイトは一体の式神を差し向ける。式神とはいえ中々強力な一体で、相手の出方を見るだけなら十分な代物だと判断していた。だが……

雷の暴風！

突如このレベルの魔法を打ち込んでくるとは、フェイトも予想外であった。だが、考えてみればネギは先の会合でも雷の暴風を放ってきたのだ。今回については、それを忘れていたフェイトの落ち度だろう。

放たれた雷の暴風はルビカンテを貫き、湖に着弾。視界を覆い尽くす様な水しぶきを上げた。

「視界をふさいだか……」

確かに、人間が得る情報の中で眼から得る情報の割合は大きい。だが、この程度で相手を見失うほど、フェイトと手甘くは無い。僅かに聞こえる飛行音。そして、感じる魔力。それらから今まさに自分の横を通り抜けようとしているだろうネギに対して、フェイトは手加減無しの障壁突破・石の槍を放った。

「……………」

そして、石の槍はネギに直撃した。呆気なさすぎるほど簡単に、だ。瞬間、ポフンと間の抜けた音をネギの姿が消えた。そして地面へと舞い落ちる人型の紙。

「これは！」

術師が身代わりや罠に使うものだ。ネギから感じる魔力は確かに低かった。だが、それは自分の居場所を隠すために意識的に抑えているのだとフェイトは思っていた。つまり、フェイトはネギにまんまと騙されたのである。

「本物は……………」

「な、何やお前！」

ネギの目的は最初からこのかの奪還だ。邪魔な護衛をやり過ごせたのならやることは一つ。フェイトの眼に映ったのは祭壇のこのかを抱き寄せ、すぐさま離脱を試みようとするネギだった。

(よし！)

フェイトが策にはまった時、ネギは心の中でガッツポーズをした。フェイトさえ避けることができたなら干草等物の数ではない。水しぶきに意識を取られている間に長距離瞬動で一気に祭壇へと接近。そこで干草に気付かれるもののもう遅い。すぐさまこのかを抱きかえ、瞬動でその場を離脱した。

「これ、は」

ネギは眼を見開いてゆっくりと視線を”このかの姿をしたもの”へと向ける。直に触れたからネギは理解できた。これはこのかではない。これは……

「そうだよ。それはただの式だ。君が使ったものと同じ、ね」

「しまっ」

いつのまにか隣に現れていたフェイトの蹴りがネギに直撃する。一度入ってしまうと方向転換などが出来ない瞬動中であつたが故に、ネギは精々障壁を強化する程度の対応しかとることが出来なかつた。

「っぐ、近衛は、どこだ」

「それは……」

フェイトが律義のもネギの問いに答えようとした時、天へと光が伸びた。その光の発信源は、先ほどこのかの姿をした式が乗せられて

いた祭壇、その下だ。

「やった！ ついにやった！ スクナの復活や！」

天へと昇る光の中に、巨大な鬼の姿が現れる。ここに、リョウメンスクナノカミが復活をはたした。

「あれは！」

その光は後残り数体の化生を滅しようとしていた刹那たちにも見えていた。間に合わなかった、という絶望が刹那たちの身を支配する。

「センパイ、そんなよそ見をひとつてええんですか！」

「つくう！？」

スクナが復活した所で眼中にない月詠先ほどまでと変わらぬ苛烈さで刹那を攻め立てる。刹那も咄嗟に応戦するが、やはり集中力を欠いているのは隠しようがなかった。

「刹那！ 出し惜しみしてる暇はないぞ！」

今この場にいる中で最も経験豊富な真名は状況のまずさを誰よりも理解していた。スクナが復活した今、このかを安易に取り返すことはできなくなったのだ。敵がスクナを僕にしようと画策しているのなら、そのコントロールを得るためにこのかを使うだろう。その

ため、下手にこkのかを取り返すということはスクナを本能のままに暴れさせることになる。皮肉なことだが、現在においてはこのか敵に捕まっていることで被害が抑えられる形になっている。このかを取り戻すのなら、スクナを一時的にでも封印、または滅すことが必要なのだ。

「分かっている！ 月詠、悪いがお前の相手をしている暇はなくなつた！」

「そういつわけだ。悪いが、早々に終わらせてもらおう」

アデアット！

刹那と真名、二人の手に仮契約の証が顕現した。

その40 (後書き)

真名がそう簡単に仮契約するのだろうか、とも思ったのですが、最強クラス(フェイト)が敵陣にいる、ということならば一応説得力もあるのではないかと。

魔眼解放時は不明ですが、普段の状態は楓と同クラスかやや上くらいだと思われますしね。

その41(前書き)

そろそろリアルがドタバタしそう。
もしかしたらこれ以降の更新に影響がでるかもしれません。

その41

スクナの復活。それは、ネギ達にとって敗北に等しい出来事だ。まだはつきりとせぬ発光体であるとはいえ、その力は想像を絶するものがある。

これは自分だけでは対処できぬと早々に判断したネギは、まず己の従者を召喚した。

「無事か？」

「あ、あれ？」

「急に景色が……」

魔法を今日初めて知った二人は突然の召喚にキョトンとしているが今はそれを相手にしている暇はなかった。従者の召喚が完了したのを確認するとネギは次いで懐から携帯を取り出した。電話帳から選ぶのはこの場を逆転できる唯一の一手。

「緊急事態だ。すぐに来てくれ」

『そこまで急をようするのですか？』

「ああ。力を見られたくない奴がいる」

『分かりました。すぐに向かいます』

「援軍、ですか？」

「ああ。現状打てる最高にして最強の手段だ。私達は、彼女が来るまでに近衛を取り返す」

簡単には言うが、実際はかなり困難な内容だ。最強クラスのフェイトは勿論、天ヶ崎も今でこのかを伴いスクナの肩の上だ。このかを取り戻すにはフェイトとスクナ、この二つの規格外を突破しなければならぬ。

「あの男の相手は私がする。真名はアーティファクトを使ってスクナの牽制を。宮崎は天ヶ崎の思考を読んでスクナをどう操るか真名に伝えてくれ。神楽坂は宮崎の護衛だ」

「了解。神楽坂、宮崎、少し移動するよ」

この役割が最適であると判断したのか、真名は返事一つ残して少しでもいいポジションへと移動を開始する。そして、その場にはネギと刹那だけが残された。

「せ、先生……私は……」

「言わなくても分かるだろう。君が近衛を救え」

「し、しかし！ ネギ先生がいかれたほうが確実に！」

「それは駄目だ。あの男の相手は君では出来ない」

それは事実だった。刹那も年の割には高い実力を有しているがフェイトのそれと比べれば足元にも及ばない。それは真名も同じでフェイトの相手は消去法でネギしかないのだ。

「それに、だ。近衛は、君の助けを待っているだろう。助けを待っている姫を、救ってやらないでどうする」

「このちゃん、が……」

「迷っている暇はない。行け、刹那」

「……はい！」

刹那は眼前で腕を交差させ一息つくと、それを勢いよく広げた。そして現れたのは純白の翼。刹那がこのかに関わることを避けていた原因の一つだった。だが、今の刹那の眼には迷いが無い。恨んですらいた力をも使い、このかを救うと決心したのだ。

「先に行く。ついてこれるか？」

「先生の方こそ、ついてきてください！」

刹那とネギ、二人がその場から飛び出した。

「行かせないよ」

脇目もくれずこのかを目指す刹那へとフェイトの魔の手が迫る。その右手には暗い光が宿っており解放たれるその瞬間を今か今かと待っていた。だが、彼の相手は刹那では無い。彼のダンスパートナーは……

「させんよ」

「っ！ ネギ・スプリングフィールド」

横合いから放たれた蹴りをフェイトは腕で受け止める。しかし、咄嗟だったこともあり数メートルほど後方へと弾き飛ばされる。すぐさま体勢を立て直す、その時は既にネギが目前まで迫ってきていた。

「君が僕に勝てるか？」

「勝てないとしても？」

交わした言葉はそれだけだった。両者共に拳を強く握り締め、眼前の敵へと撃ち放った。

「ちょ、何か刹那さん羽生えてる！？」

「で、でも綺麗です」

「ふふ、後で本人に行つてやるといい。それはさておき、宮崎は自分の仕事を頼む」

真名が手に持つのはスナイパーライフルだ。これは彼女が元々持っていた物ではなく、ネギとの仮契約で現れたアーティファクトだ。時間が無かったため名称はまだ不明だが、効果は既に分かっている。あらゆる銃へと形を変えることができ、魔力や気を弾丸にするこ

とができる。魔力マカジンのストックが三つほどついていたりもしたが、読心や破魔に比べると些かシンプルかつ味気ない能力だ。

だが、このアーティファクトにはもう一つ利点があった。それは

……

「右手の上腕、払い落しです！」

「了解だ」

豪！ と大きな音を立てて放たれた巨大な弾丸。とてもライフルから放たれたとは思えぬ弾丸は刹那めがけて放たれたスクナの腕へと直撃。腕の軌道を僅かに反らせ、刹那の回避が最小限で済むようにした。

これが、利点。込められる魔力に上限が無い、だ。それで利点？と思うなかれ。彼女のマスターはネギ・スプリングフィールドだ。極東一であるこのかには及ばないものの、その魔力量は膨大。しかも魔法では無く純粋に魔力を弾丸としているためロスも少ない。

「次は右下腕と左上腕で挟み込むように！」

「了解」

今度は最速で二つの弾丸を放つ。大威力の弾丸を放った後でもインターバルが殆どないことも、利点と言えば利点だろう。この武器をもって、彼女は姫を救わんとする剣士をサポートする。

刹那は白き翼をはためかせ夜空を駆けていた。目指すは囚われし姫、このか。フェイトはネギが上手く引き離し、スクナの攻撃は真

名の狙撃のおかげで起動がされる。それるといっても十全ではないが、それでも今の刹那には充分だった。そして、ついに彼女はスクナの腕を潜りぬけ、敵と対峙する。

「さあ、このちゃんを返してもらおうぞ！」

「まさか烏族とのハーフやったとわ……ええい！ 猿鬼！ 熊鬼！」

天ヶ崎の前鬼と後鬼である猿と熊の式が刹那へと襲いかかる。だが、今の刹那には役不足だった。神鳴流の技を使うことなく交差するその一瞬で二体を切り伏せる。

「な！ そんな馬鹿な！」

「覚悟！」

愛刀、夕凧を振りかぶり一閃。術者である天ヶ崎は一切反応できず、その意識を断たれた。

「ん……せつ、ちゃん？」

「このちゃん……」

「背中……キレーなはね。なんや天使みたいやなー」

姫の救出は完了した。これで、気遣うものは何もない。それはつまり……

よじちく、私の出番か

最強の登場を意味する。

その41（後書き）

迷走中。主にネギチャーの口調で。原作台詞無理やり入れてみたりしてみた。

二次創作書く上でキャラの口調って難問の一つだと思う。

楓と古菲は置き去り。きつと月詠さんのお相手をしている事でしょう。

その42(前書き)

やはりリアルでのドタバタ発生。更新が遅れて申し訳ない。

その42

「ぶっ！」

「はあっ！」

ネギとフェイト、二人の拳がぶつかり合う。ガギイ！ というともではないが拳が出しているとは思えない音と、周りに衝撃波をまきちらしながらだ。戦況は互角。ネギは己の戦闘技術を駆使し、何とかフェイトと渡り合っていた。

（基本は中国拳法。。これといった技は出していないが、間違いないな）

戦いの歌を使用しているとはいえまともを受ければ骨が砕かれる様な拳をさばきながら、ネギは冷静にフェイトの動きを観察する。攻撃を繰り返す時の僅かな癖や、技後硬直の瞬間を見極めようとしているのだ。それも全ては勝利を掴み取るため。

”心眼”。歴史に名を残す英雄の様な才を持たぬ彼が得た力。修練・経験の積み重ねによって得られる物。得られた情報と戦闘経験に基づく冷静な状況判断によって活路を見出すスキルだ。このスキルは彼の戦いの中核を担っているといつていい。今も過去の膨大な戦闘経験からフェイトの攻撃をしのご術を導き出し、そして戦いながら相手の情報を収集することで勝利への活路を見出そうとしているのだ。

「驚いたな」

「何がかね？」

しかし相手も並の実力では無い。自分より劣っているはずのネギがここまで自分と戦える絡繰を察していた。

「君は戦いの最中に成長……いや、敵である僕に対して最適な戦いを身につけている、かな」

「……………お褒めにあずかり光栄だな」

口ではそういうものの、ネギの顔には当然笑みは無い。当然だ、これほどの実力者ならば気付いているはずだ。ネギは戦えば戦うほど、手ごわくなっていくということに。そしてもう一つ、彼ならば……ネギに対してどう戦えばいいかも検討がついていることだろう。

「そうだね。まずは……………」

フェイトの魔力が高まっていく。何らかの魔法を行使しようとしているのだ。だが、ネギはそれを阻止することは出来ない。うかつに入り込めば不味い。そのことをこれまでの戦いで理解しているからだ。故にネギは、フェイトの魔法を黙って見ているしかない。

「戦い方を変えようか」

高まっていた魔力が霧散し、フェイトの魔法が成ったのだと分かる。そしてフェイトの右手には、ネギの中にある大英雄の斧剣を彷彿とさせる、岩をくりぬいて作った様な巨大な剣が握られていた。

「いくよ」

「つくー！」

虚空瞬動で接近したフェイトは巨大な岩剣を容赦なくネギへと振り下ろした。今自分が張っている障壁程度なら紙の様に切り裂くだろう斬撃を、ネギは思わず……

「へえ、どこから出したんだい？ それ」

「企業秘密だ」

投影した西洋剣で防いでいた。決して見せまいと思っていた魔術、それを使わざるをえなかった事に苦虫をかみつぶしたかのような顔をするネギ。だが、仕方がないといえば仕方がないだろう。ある程度把握し始めていたとはいえフェイトのスペックはネギの上に行く。更にはフェイトの剣術スキルは全くの不明だったのだ。もしこの戦いを第三者見ていたら、きっとネギにこういっただろう。今の攻撃をよく防いだな、と。

「まあいいや。おしゃべりはここまでにしよう。そろそろ、千草さんも不味いだろうしね」

「そうだな。終わらせよう。勿論、私の勝利で」

二人が同時に剣を構え、身に纏う魔力を高めていく。ここからは決着が着くまでノンストップ。手加減無のフルスロットルで駆け抜ける。

二人は同時にその場を駆けだし、全く同じ動作で剣を振り下ろす。そして、岩剣と西洋剣が、二人の間でぶつかり合った。

「アレは……なるほど、確かに最強の一手だ」

「どうしたんですか？」

刹那がこのかを奪還するとほぼ同時にこの場に現れた巨大な魔力。その魔力の持ち主を、スナイパーライフルのスコープを覗いていた真名はしっかり捕えていたのだ。

「なに、近衛は無事刹那が取り返した。そして、スクナもじき倒されるだろう」

「このかは助かったの！？ よ、よかったあ。……って、あの鬼が倒されるって、一体どうやってよ」

「あそこだ。考え得る限り、最高の助っ人が来てくれている」

真名が指さす先を明日菜とのどかは眼を凝らして見る。指の先には何らかの光源があり、見やすくなっていることと、ネギからの身体強化のおかげで視力が向上していることもあり、二人は何とか二つの影の姿を捕えることが出来た。二人が捕えた影、その正体は……

「あ、あれって……」

「私達のクラスの……」

「茶々丸さん!？」

「エヴァンジェリンさん!？」

二人にとっては普通のクラスメイトであつたはずの二人だつた。

その42(後書き)

さーて、次話のネギチャ は。

エヴァたん大暴れ！

つかぬ決着！

の二本です。

とまあおふざけはここまでにしておいて、長かった修学旅行もようやく終わりが近づいてきました。修学旅行後はオリジナルストーリー1を挟み学園祭。そしてオリジナルストーリー2・3を経て完結予定。

完結まであとどれくらいかかるんだろうか……

その43 (前書き)

もう日曜の夜か……土曜に大学あるせいで、唯一の休みである日曜
が疲れをとることしかできない……

その43

振り下ろし、薙ぎ払い、切り上げ。二人の間を目まぐるしい速度でぶつかり合う岩剣と西洋剣。互いに一步も引かず、ただ相手を切り裂かんと一心不乱に剣を振る。

「この魔力は……」

戦場へと現れた巨大な魔力。それを察知したフェイトが間合いを開けることで打ち合いは終わりを見せる。だが、そんなことは構うものかと言わんばかりにネギはフェイトへと追いつがる。

上段から振り下ろされる西洋剣。だが、その剣撃は岩剣によって難なく防がれていた。

「君の余裕はアレか。闇の福音……頼みの綱が女性とは、情けなくないとは思わないの？」

「そのようなプライドは邪魔なだけだ。使える者は使う。それだけだ」

目前では互いの剣が相手の剣を押し切らんとギチギチと音を立てているというのに平然と口を交わす二人。そうは見えているが、両者には一切の油断はない。隙あらば相手を切り裂かんとしているのは想像に難くないだろう。

「何にせよ、私はスクナが倒されるまで耐えればいい。今の私では君に勝つことは難しいが、それぐらいならば可能だ」

「……………」

フェイトは答えない。ネギの言っている事は事実。確かに、今のネギではフェイトを倒し事はかなり難しいと言っていていいだろう。だが、時間稼ぎなら充分。それだけの實力なら、ネギは持ち合わせている。

最早勝敗は決している。ならば速やかにこの場から去るだけだと頭の中で逃亡のプランを立て始めるフェイト。だが、ふと目の前にいるネギの顔が目に入った。その顔は、間違いなく……

「逃げる算段を立てるのは構わんが……そうやすやすと出来ると思っなよ」

笑っていた。

「ククク……」

エヴァンジェリンは高揚していた。久しぶりに全力で力を振うことのできる戦闘にだ。ここ十数年、魔力を封じられた彼女はストレスが溜まりにたまっていた。ネギが来てからは魔法球で模擬戦を行うことである程度発散していたが、模擬は模擬であるし、別荘内部の被害を考えれば規模を抑えたものにせざるを得ないのだ。純魔法使いタイプ。いわゆる大火力の固定砲大である彼女には、些かそれが不満だったのだ。

だが、今はどうだ。目の前には巨大にして強大な敵。そして、エヴァンジェリンにとってはどうでもいい被害を気にしなくて済む土地。憂さ晴らしにドデカい魔法をぶっ放すにはもってこいのシチュ

エーションだ。

「茶々丸、結界弾を」

「Yes、マスター」

憂さ晴らしに邪魔が入っては意味がない。結界弾如きでスクナを抑えられはしないが、それでも十数秒、エヴァンジェリンが詠唱するには十分な時間は得られるはずだ。

「リク・ラク ラ・ラック ライラック！」

久しく感じることのなかった膨大な量の魔力が一度に体から失われていく感覚。本来なら虚脱感を覚える筈のそれすら、今の彼女には快感だ。

「契約に従い我に従え氷の女王！」

スクナを中心に冷気が発生し始める。この魔法こそ、氷系最大の広範囲殲滅呪文。

「来れ！ とこしえのやみ！ えいえんのひょうが！」

例えスクナであろうと防げないほぼ絶対零度の魔法の冷気。それはスクナの巨体を瞬く間に氷漬けにしていく。

かのリョウメンスクナノカミを凍結。普通ならこれで充分満足しているだろう。だが、この魔法の操り手は最強無敵の悪の魔法使い、エヴァンジェリンだ。これで終わる筈がない。そもそも、この魔法はまだ未完成だ。

「全ての命ある者に等しき死を！ 其は安らぎ也！」

ついに完成する大呪文。彼女が座する、最強と呼ばれる者達が振うにふさわしき力。

「おわるせかい」

エヴァンジェリンが指を鳴らすとそれに連動するようにして、リョウメンスクナノカミはその身体を粉々に砕かれた。正に圧倒的勝利であった。

「ふう、満足満足。さて、あっちも助けてやるとするか」

エヴァンジェリンは地上に降り立つと影に沈み、弟子の救援へと向かった。

「どうした、動きが単調だぞ」

ネギとフェイトの戦いは一転してネギが優勢で事を運んでいた。その理由は焦り。フェイトは自らの内に抱く焦りによって動きの精彩さを僅かだが欠いているのだ。

余り感情などを抱かないはずの彼だが、この状況ではさすがに思うところがあるようだ。何せ、彼は滅ぼされるわけにはいかない。己の存在意義を満たすため、それはあつてはならないのだ。

だが、このままではそれが起こりうる。一刻も早くこの場を離れなければならない。だが、それは目の前の相手が許してくれない。

「これで……！」

このまま剣を交わし続けても戦況は変わらないと踏んだフェイトは岩剣を捨て、無詠唱の魔法を放つ。選択したのは自分を中心に数多の岩の棘が周囲に生える対集団用の魔法だ。無詠唱では範囲が狭まるとはいえ、ネギにある程度の距離を開けさせることはできる。そして……

「また、君とは会うことになる気がするよ。ネギ・スプリングフィールド」

その隙さえあれば、フェイトは充分転移を発動させることが出来る。足元に魔法陣が現れ、転移が発動しようとした正にその時。

「どこへ行くこうというんだ？ なあ」

フェイトの腕が、彼の影から現れた別の腕に掴まれていた。

「飛べ！」

蚊を払うかのように無造作に振られたもう片方の腕。しかし、その腕に込められた魔力は膨大。ちよつとやそつとでは碎けないはずのフェイトの障壁は、まるでガラスか何かの様に碎け散った。

だが、これは都合が良かった。何せ、向こうから遠くへ吹き飛ばしてくれたのだ。しかも、追撃の気配が無い。

「ネギ・スプリングフィールド」

先ほどまで対峙していた相手の名をもう一度呟き、今度こそ転移

を発動させ、フェイトはこの場から完全に消え去った。

「エヴァ」

「何だ？」

「君のせいで奴にまんまと逃げられたではないか」

「わ、私のせいか！？」

フェイトを倒すためのジョーカーが、どういうわけか此方に牙をむいた。その結果にネギは怒る気にもなれずただただ呆れていた。とりあえず、目的であったこのかの奪還は成功したのだからと自分を納得させ、只今絶賛エヴァンジェリンをいじくり中である。

「今回の礼に君の好物をごちそうしようかと思っていたのだが、やめにするか」

「なにい！ ちょっとまで！ 私はスクナを倒しただろう！」

「さて、近衛達は……」

「無視するなあ！」

フェイトと言う未知の脅威こそ取り逃したものの、長かった修学旅行の夜もようやく終わりを迎えたのだった。

その43 (後書き)

次回で修学旅行編は終了です。やったね！

それにしても、何かすんげえ長かったような……

ま、それはさておき私も大学が始まりましたが更新ペースは変わりませんので。

これからもよろしくお願いします。

その44(前書き)

一日遅れました

その44

「……………」

昨夜、天ヶ崎率いる一味の企みを見事阻止したネギ。最強の一角、エヴァンジェリンの助力があつたとはいえ、これは大きな戦果だ。そんな功績をあげたネギだが、彼は現在ホテルのロビーに置かれたソファの中で静かな寝息をたてていた。

何せ昨日は激闘に次ぐ激闘。それに加え今朝は烏族の掟だのと言つて去ろうとした刹那を拳を少々含めた話し合いで留まらせたりと休み暇がなかつた。今日は今日でエヴァンジェリンの観光に付き合わされた後詠春と会う約束もある。

精神は大人だが体は子供。少しは休まねばもたないとの判断だ。

「うわぁ、かわいい」

「ネギ先生つてこんな顔もするんだ」

そんなネギを取り囲むのは彼の受け持つ3-Aの面々。ネギは普段子供とは思えない雰囲気や仕種、仕事っぷりから特に生徒たちと親しいわけではない。だが、今のネギは体を休めるために寝ている。それはつまり、無防備な年相応の姿が拝めるということだ。

「写真とつても大丈夫かな？」

「あ、私も取りたいかも」

誰が言い出したのか、その人声をきつかけに生徒達は次々にポケットから携帯を取り出し始める。許可を取らずにいいものか、と思

うものもいるにはいたようだが本人は寝ていて許可などとれるはずもなく、また、後で叱られようと写す価値があると全員が判断した。

「止めておいた方がいい」

だが、今まさにシャッターを切ろうとした面々を止める声があった。その声の主は真名だ。

「先生はとにかく勘が鋭い。静かに眺めているだけならともかく、それ以上のことをしようとするれば絶対に目を覚ますぞ」

これは事実だ。ネギは異変があった際すぐに起きられるように基本的に眠りは浅い。今は生徒達が見ているだけなので起きないようだが、それ以外の事をしようとするればすぐさま覚醒する事だろう。

「そ、そうなの？」

「ああ」

真名の即答に彼女の言ったことが嘘ではないと悟った生徒達はネギの寝顔を記録に残せない事を悔やみながら、せめて自分の記憶にはと前以上にネギの顔を凝視するのだった。

「待ち合わせはこの辺りの筈だが……」

睡眠から起きたネギは早速、エヴァンジェリンにそこかしこに連

れ回されることになった。短時間の睡眠でも疲れをとることが出来るネギはともかく、一般人の明日菜やのどか。一緒に付いてきた元気なはずの班員ですら、エヴァンジェリンのペースに合わせるのは辛そうだった。

「あ、お父様や」

その場で皆が周囲を見渡し詠春を探す。そして、一番最初に詠春を発見したのはこのかだった。さすがは娘、人混みの中でも真っ先に父親を捜しあてることが出来たようだ。

「どうも皆さん、休めましたか？」

「え、ええ」

「あ、あはは」

班のメンバーが苦笑いを浮かべながらエヴァンジェリンを見るが、色々見学し、満足げなエヴァンジェリンにはどこ吹く風であった。

「それでは、そろそろ行きましようか」

「お願いします」

一行が目指すのは木々の生い茂る中に佇む小さな建物。ネギの父親、ナギが京都で使っていた所詮別荘と言う奴である。正直、ナギの行方に興味がないネギだが、別荘にはナギが収集した数多くの書籍があるという。千の呪文の男と呼ばれた魔法使いが集めたというそれに興味があったネギは訪問を決意した。尤も、西の長である詠春の誘いを断れないという対外的な理由も含んでいたが。

「……………」

数多くある書籍からめぼしいものをいくつか抜き取ってパラパラと大雑把に読んでいく。魔道書の類もそれなりにあるようだ。大半は一般に売られている書籍が占めているようだ。

「天文……その中でも火星関係が多いな」

「私の父親には宇宙に興味でもあったのか？」

私は知らん、と隣で同じく書籍をパラパラとめくっていたエヴァンジェリンが返す。

「どうですか？」

ある程度時間が経ち、書籍あさりもひと段落した頃に詠春が声をかけてきた。どうやら、ネギ達に気を使っていたようだ。

「いくつか気になるものもありました。ゆっくりできないのが残念です」

「それなら、鍵をお渡ししましょう。好きな時に来て構いませんよ」

それはありがたい言葉だった。エヴァンジェリンから聞いてはいたが、ナギもネギと同じく得意属性は風、光、雷だ。そのせいか、置いてある魔道書はそれらの属性に関するものが多かったのだ。

「おい、これを見る」

ネギが詠春から鍵を受け取っていると、エヴァンジェリンが一枚の写真を持ってきた。ネギにそっくりな少年を中心に、一人の少年、四人の男が写ったものだ。

その容姿から、中心に立つ少年がナギであることは容易に想像がついた。だが、それよりも目を引いたのはナギの隣に立つもう一人の少年。その少年は、髪型が違うせいか雰囲気こそ異なるものの、昨夜の敵、フェイトにそっくりの容姿をしていた。

「これは……」

「彼はナギの師匠で、名をゼクトと言います」

ネギの視線を受けて詠春が自ら口を開く。彼が何ものなのか、そして、既に亡くなっている事を語った。

「容姿にそぐわない知識や言動から只人ではないかと思つていましたが、話してくれない以上聞くべきではないと思つていたのですが……」

「ふむ。昨夜の奴は何処か機会染みた動きだった。もしかしたら、奴とコイツは同じ技術で”造られた”ものなのかもしれんな」

エヴァンジェリンが自分の推測を口にするが、その答えを知る者はこの場にはいない。

楽しいはずの修学旅行は波乱と幾つかの懸念事項を残し、終わりを迎えた。

その44（後書き）

火星の書籍がどうだとか、ゼクトとフェイトが似てるとか書いてますが、本編にこれといった影響はありません。

原作で出てきたりした事を折角なので書いて見たただけだったり。

とにかく、これで長かった修学旅行編は終了。次回からはオリジナルストーリーにその1に突入してくと思われ。

その45(前書き)

ヘルマンの事すっかり忘れてた！ とこの間気付いたわけだけど、
ヘルマン編は丸々カットすることになってーい。
ごめんねヘルマン君。

その45

波乱の修学旅行を終えたネギ達3-A。彼女達は旅行での興奮を僅かに残しながらも、いつも通りの生活を送っていた。そして、それはネギも例外ではない。

「そうらっ！」

「そんな攻撃ではやらねんよ！」

学園へと戻ってきたネギは通常通り、エヴァンジェリンへと指導を仰いでいる。今日も今日とて修行の締め、割と全力の模擬戦を行っている所だ。だが、そんな中にも例外が一つ。

「あ、改めて見るとんでもないわね……」

「先生にエヴァちゃんすごいな！」

「あわわ、全然目で追えないです」

「まさかネギ先生がここまでの実力とは……」

明日菜、このか、のどか、刹那の修学旅行で裏の世界へと関わらざるを得なくなった者達が二人の模擬戦を遠目に眺めていた。

今日、彼女達がこの場に招かれたのは今後どうするのか……その方針を決めるためだ。

「隙ありだ！」

「ッ！」

エヴァンジェリンのパワーに押され生まれた一瞬の間。そこに的確に放たれた彼女の蹴りは、ネギの体を数百メートルに吹っ飛ばした。まだやれるからと続けては泥沼にはまりかねない以上、これにて模擬戦は終了。クリーンヒットを先にあてたエヴァンジェリンの勝利だ。

「さて、どうだった小娘共。これが、お前たちの関わった魔法だ」

数百年の時を生きる吸血鬼は、威厳のある声をもって、少女たちへと語りかけた。

「さて、早速だが本題に入る」

世間ではゴスロリと呼ばれる衣装に身を包んだエヴァンジェリンは茶々丸の入れた紅茶で喉を潤すと、前置きもなく本題へと入った。事前に話しの内容を聞かされていた三人は、い住まいを正し目の前の少女を中止する。

「私とコイツで話し合った所、お前たちはこのまま魔法関係者になってもらうのが最適だという結論が出た」

「詳しく聞いてもええ？」

関西の長の娘にして関東の長の孫。修学旅行で自分が狙われたこ

とからこのかは自分が無関係ではいられないのだと理解している。だが、隣に居る友人二人はどうなのか。このかはそれが知りたかった。

「近衛に関してはいわずもがな。関西、関東両組織の長の血縁であり、また本人も類まれな魔力を有していることから関わらずにいる事はできないだろう」

それは分かっている、といわんばかりに深く頷くこのか。それを刹那は苦虫を噛み潰したかのような表情で見ていたが、例えこのかに関わろうと関わらないでいようと自分は守るだけだと、表情を改めた。

「そして、次は神楽坂明日菜。お前だ」

明日菜がピクリ、と僅かに身をよじらせる。無理もない。普段は3-Aのバカレッドとしてクラスの元気筆頭の彼女だが、今回の件は間違いなく人生を左右する大きな事態だ。さすがの彼女も、全くの普段通りにはできないだろう。

「貴様の持つ能力、魔法無効化能力は正に魔法使いたちの天敵だ。はっきり言って、近衛このかの魔力等より、よっぽど価値がある」

「それに、だ。いくつか気になることもある」

「そ、っか」

明日菜も、どこか予感していた。自分は魔法から逃げられないそんな漠然とした気持ちを今この場で言われる前から感じていたのだ。

正直な所、明日菜は魔法に恐怖を感じていた。修学旅行中こそこ

のかを取り戻そうと必死で、そんなこと微塵も気にしていなかったが、ネギとエヴァンジェリンの模擬戦を見て死の可能性を垣間見ってしまったのだ。

だが、明日菜はそんな運命に抗おうとは思わなかった。自分と同じく、今から歩み始める友が居る。そしてなにより、今も此方を心配そうな顔でうかがっている子供先生。コイツなら、きっと自分たちを守ってくれる。そんな確信が、明日菜の中には既にあつた。

「まあ、そうなっちゃったのは仕方がないし。これからよろしくね」

だからこそ彼女は、これから世話になる人物たちへ最大の笑みを持って、頭を下げた。

「さて、最後だが……」

エヴァンジェリンにジロリ、と睨まれて（本人にその気なし）のどかは目に見えて慌てた。元々人見知りの気がある彼女が、威圧を伴って睨まれればそうだったのは当然と言えよう。

「宮崎のどか。貴様が魔法に関わっていかなければならない理由は、そっちの二人よりは軽い。だが、馬鹿に出来ないのも事実だ」

のどかの理由。それは彼女の元に出現したアーティファクトだ。絵日記、というコミカルな形態をとっているとはいえ、読心という力がどれほど強力なものなのか想像するのは容易い事だろう。

アーティファクトは従者と主の相性によっても多少は左右されるが、やはり一番は扱う者の資質だ。例えネギが彼女と契約を解除しても、他の魔法使いと再び契約した際、またいどのえにつきが出てくる可能性は非常に高い。

「アーティファクトの収集家とは多くいる。中には他者から奪つてでも、という輩もな。お前がそれを手に入れてからまだ数日しか経っていないし、使ったのは修学旅行での一件とこの別荘の中のみ。だが、情報とはどこから漏れるか分からんからな」

のどかとして、既に魔法に対する幻想など捨て去った。それだけのインパクトがネギとエヴァンジェリンの模擬戦にはあったのだ。

怖い。魔法が。魔法と関わっていくことが。だが、それ以上に身に降りかかる危険を理解していないことが怖い。だから、彼女は勇気を振り絞る。前を向き、立ち向かうのだと己を振り立たせる。

そして何より……目の前にいる少年と同じ場所に立ちたかった。恋する乙女は、時に想像を絶する力を発揮するのだ。

この日、三人の少女が新たに魔法の世界へと足を踏み入れることを決意した。

麻帆良内にある教会。そこで、一人の男が祈りを捧げていた。年は恐らく三十後半。煤けた茶色の髪に濁った灰色の瞳を持つ男だ。

「相変わらず熱心ですね」

その男に背後から声をかける人物がいた。褐色の肌をシスター服で覆った女性。麻帆良に所属する魔法先生の一人、シスター・シャークティだ。

「いえ、私などまだまだです」

「ご謙遜を。貴方がここで一番の徒であると皆が知っていますよ」

私の弟子も見習ってくれば、とシャークティが続けて漏らす。男も悪戯ばかりしている少女を知っているために、若干の憐みの込められた視線でシャークティを見やる。

「それにしても、今日は何だか嬉しそうですね。何かいいことも？」

「ええ。ようやくですが、私の望みが叶いそうなのですよ」

普段無表情で過ごすこの男が僅かに醸し出す喜の気配を感じ取ったシャークティ。それを問われた男は今度こそ完全な笑みを浮かべてそう答えた。

「そうなのですか。貴方の望み……確か、誰かの願いを叶える手

助けがしたい、でしたね」

「ええ。今まではどうすればいいのかわかりませんでした。先日ようやく思いつきました」

「それはよかった。貴方の願いは素晴らしいものです。どうか頑張ってくださいね」

言峰神父。

その45(後書き)

今回は幕間みたいな感じですが。最後はオリジナルストーリーへの布石になってます。

全く隠そうとかしてませんが。

その46 (前書き)

本文が相変わらず文字数減傾向に。ああ、もっと時間が欲しい

その46

夜も深く辺りが静寂に包まれる中、ここ、麻帆良郊外の森では人知れず激しい戦いが繰り広げられていた。人数は五。一人の小柄な影に、残りの四人が襲いかかる構図だ。

この戦い、普通ならば数が多い方が有利と見るだろう。数とは、単純にして絶対的な力だからだ。だが、その絶対を覆す例外が居ることまた事実。そして、この小柄な影の正体も、この場においてはその一人だった。

「ぐっ！」

振り下ろされた剣が男の体を吹き飛ばす。既に、共に戦っていた他の三人は意識を失っている。男も今は何とか持ちこたえているものの、敗れるのは時間の問題だろう。

だが、男は諦めるわけにはいかなかった。ここ、麻帆良学園を守る魔法使いとして、得体のしれない侵入者を放っておくわけにはいかないのだ。

「行く、ぞお！」

全身に魔力を滾らせ、声を出すことで自分を叱咤する。これが、最後の一撃。男の全身全霊を持って放たれた最後の一発。だが……

「見事な攻撃でした」

その攻撃は侵入者が装備していた顔を覆うヘルムを破壊するにとどまる。ああ、駄目だったか、と男が己の無力を嘆き気を失っている中、最後に残ったものは、申し訳なさそうに男を見つめる翡翠の

瞳と、すみません、と言う謝罪の声だった。

「さて、皆集まったの」

麻帆良学園学園長室。今ここに、主要な魔法先生が全て集められていた。その中にはネギの姿もある。綺麗に整列する魔法先生は皆一様に何事かと眉をひそめている。最も、何人かは既に事情を知っているのか表情を動かさないが。

「ここ最近、とある侵入者が学園の魔法使いを次々と襲っており。どうやら敵は相当の腕前の様で、既に魔法生徒が三人。魔法先生が四人やられておる」

学園長の言葉で魔法先生達の間でざわつきが起こる。だが、そのざわつきも学園長のわざとらしい咳払いでピタリと止む。

「幸い、やられた者は命に別状は無い。それに、今のところ一般人に被害が出ておることもない様じゃ。そして、犯人についてじゃが、黒い鎧に同色のヘルム。輝く金砂の髪に翡翠の瞳を持つ年の頃十代半ばと思われる少女だそうじゃ」

金砂の髪に翡翠の瞳。そう学園長が行った時、ネギの表情が僅かに変わったのを気付いた者は果たしていただろうか？ いや、いないだろう。それは本人すら自覚していないほどのものだったし、周りは学園長の話を聞くのに夢中だ。

ネギはその後の学園長の話をそこそこに聞き流し、頭に浮かんだ

かつてのパートナーを想うのだった。

「んー、筋肉痛がとれへん」

「私も……」

「私、もです」

所変わって麻帆良にある商店街ではこのか、明日菜、のどかが仲良く足を揃えて歩いてきた。ここ最近はネギ、エヴァンジェリンによるダブルタッグでの裏の知識に関するの授業。そして生き残るための土台として体力造りや筋力トレーニングをちよつとシャレにならないレベルでこなしているのだ。運動が得意な明日菜でも酷い筋肉痛に見舞われていることが、その苛酷さを物語っている。

話変わって何故彼女達がここにいるかと言うと、答えは簡単。服を買いに来たのだ。服とは言っても外行き用の可愛いものなどではなく、修行中に着るトレーニングウェアの類だ。すぐに、ではないがこれから厳しくなっていくだろう修行を想像し、彼女達は専用に服を用意することを決めたのだ。

「っと、確かスポーツ用品店はこっちだっけ？」

「確かそうやったはずや」

「私は余り行かないので……」

余り利用したことの無いスポーツ用品店へと向かう一行は、不確かな記憶を頼りに何とか目的地を目指して歩く。だが、そんな三人に聞きなれない一つの声がかげられた。

「あの、すみません」

落ち着いた雰囲気の女性の声だ。だが、やはり三人には聞き覚えが無い。だが、無視するわけにもいかない。三人は同時に振りかえる。そして、三人は思わず声の主である少女に見惚れてしまった。いいんちよとはまた違った金色の髪に翡翠の瞳凛々しく整った顔立ち。立ちまると人形の様だと三人は思った。

「道を聞きたいのですが、構いませんか」

「あ、はい！ いいですよ」

少女に見惚れてしまっていたため反応が遅れたことに僅かに顔を赤らめながら明日菜は応答する。

そんな様子をこれまた少女は見惚れてしまう様な笑みを浮かべた。そして……

「感謝します。私の名前はアルトリアといいます」

彼女は静かに己の名を明かした。

その46(後書き)

オリストその2。でもそんなには長くならない予定です。

その47 (前書き)

先週は忙しかったのもあるんだけど更新をすっかり忘れてました。
本当に申し訳ない。

もし時間があれば、明日ナルトの方も更新するかも。

その47

「なるほど、運動用の服をですか」

「そーなのよ。今はまだ筋トレ程度だからいいんだけどこれからはもっと色々なことをやるだろうしね」

麻帆良内にあるスポーツ用品店。明日菜達三人は先ほど知り合ったアルトリアを伴いここを訪れていた。当初はアルトリアを先に道案内する予定だったのだが、彼女が急いでいるわけではないこととこれも何かの縁だということで同伴を望んだのことだった。

「しかし、やけに沢山買うんですね」

「確かにそうなんやけど、やっぱり数が必要になりそうだな」

「場合によっては一日に数着使うこともありそうですよ」

「なるほど。しかし、一体何の運動を？」

アルトリアは彼女達の目的を運動用の服を買うためとしか聞いていない。これほどの量を買う必要がある運動とは一体どんなものなのか気になったようだ。

「んー、なんて言うのかな？」

「説明しづらいですね」

「ええ例えがつかばへん」

齒切れの悪い返答にアルトリアは首を傾げるものの、彼女はそれ以上追及することはなかった。

「今日はありがとうございました」

明日菜達の買い物が進んだ後、一行はアルトリアの目的地へと赴き、そこでも時間を共にした。アルトリアの目的は明日菜達の買い物とは違い、特定の場所の把握と探索といったものであったため明日菜達は散歩気分を楽しむことが出来た。

「こつちも楽しかったわ。もしよかったら、また会いましょう」

「これ、ウチらの連絡先や。時間がある時に連絡してや」

「次の機会を、楽しみにしてますね」

それぞれのアドレスと番号がかかれた紙を受け取り、アルトリアはそれを大事そうに懐にしまう。そして、別れの言葉をかけて立ち去ろうとしたその時、思いだしたかのようにして別の言葉を口にした。

「最後に一つ尋ねたいのですが、ネギ・スプリングフィールドという人物を知っていますか？」

一体何故その名がアルトリアの口から出てくるのか。三人は不思議そうに顔を見合せながらも首を縦に振った。

「金色の髪に翡翠の瞳を持つ少女の侵入者ねえ」

ネギから侵入者の話を聞いたエヴァだが、さして驚いた様子は見せなかった。彼女はこの学園に張られている侵入者探知の結界とパスが繋がっている。とつくにその情報は得ていたのだろう。それにしてもこの幼女すごくいい笑みを浮かべている。

「なあエミヤ。何か思うところがあるんじゃないか？」

「……………」

ネギは一切の反応を見せず、静かに茶々丸が入れた紅茶を口に運ぶ。反応を見せればエヴァンジェリンが楽しむだけだと分かっているからだ。最も、この沈黙すらも相手は面白がっているとネギは自覚していたが。

「ククク、侵入者が見つかった時が楽しみだ」

自分からしたことであったが、やはり過去を知られているというのは厄介なものだとネギは内心ため息をつく。だが、エヴァンジェリンの言うことも事実。一度思い浮かべてしまった以上やはり意識してしまう。確かに、彼女自身に会う可能性は0と聞いていい。だが、別の可能性があるにはあるのだ。彼女ではないが、彼女である。そんな可能性が。

「……………」

果たして、侵入者がそうであった時自分はそうするのだろうか。何も感じないのか、自分ですら思い浮かばない様な行動に出るのか。それは分からない。だが、やはり会って見たいとネギは想うのだった。

暗闇の中、銀閃が縦横無尽に閃く。二つの銀閃はキンキンと乾いた音を立てながらせめぎ合う。片や空気をもちり裂く鋭い技をもつて。片や空気をひねりつぶす様な合理気をもつて。互いを喰らわんとする。その実力は正に互角。両者は一切引くことなく互いの刃を振り続ける。

神鳴流、斬岩剣！

一転して技の銀閃を繰り広げていた側が剣の質を相手方と同じものに切り替える。それを望むところだと言わんばかりに今まで以上の力を持って迎え撃つ。二人の中心で刃がぶつかり合い、周囲に初撃波をまきちらす。

「その年でこの実力。見事です」

眼鏡をかけたスーツ姿の女性。手に野太刀持ちて技の剣を振っていた葛葉刀子は対峙する少女に惜しみない賞賛を送る。それほどま

で少女の剣腕は素晴らしかった。刀子はこの少女と同じくらいの年頃の子を指導している。そちらの子も才能に溢れ、年にしてはかなりの実力を有しているが、この少女はそれを凌駕している。

「そちらこそ、見事な腕だ。神鳴流、といったか。その剣技、思わず見惚れる所であつた」

「光荣ですね。一剣士として、貴方と長く戦つてみたい所ですが、そうもいきません」

何せ貴方は多くの同僚を倒した侵入者ですから、と刀子は続ける。そして、全身に気を漲らせ大技を放つ体勢に移行する。それを見て、少女も剣を構え直す。

「いきます」

刀子は一度目を閉じ、それを見開くと同時に技を放つ。

神鳴流、極大雷鳴剣！

雷へとその姿を変えた気が斬撃に乗せて放たれる。殲滅攻撃としても用いられるこの技は、とてもではないが先ほどの少女の立ち位置でかわしきれものではない。仕留めた。そう刀子は確信した。だが……

「な、んですって！」

雷の斬撃、その真つ只中を突つ切つて来る少女を目にし彼女は茫然としてしまった。そして、斬撃を抜けた少女の剣の柄による一撃をみぞおちに無防備に受けてしまう。

「な、ぜ……」

意識が段々と薄れていく中、刀子は問いかけた。先の一撃、まともを受ければあのタカミチでさえも無傷ではいられない威力だったはずだ。だが、少女は服が所々焦げてボロボロになっているもの無傷だ。

「私は生来より、魔力や気に対する抵抗力が高い。それも人並み外れて」

少女の返答を聞き届けると同時に、刀子は気を完全に失った。

「ネギ・スプリングフィールド……」

少女は呟く。己が目的の人物。彼と対峙するのは何時になるのか。思いをはせながら。

その47 (後書き)

さて、バイトの面接が決まりました。私は大学生なんですがバイトは全くの未経験なもので、ビビりまくってます。バイトの面接って、一体何を聞かれるんでしょうか？

「そう、か。私を探していたか」

「そうだけど……やっぱりイギリスの知り合いか何かだったの？
だったら連れてきてあげればよかったかな」

「うちの連絡先は教えただけど向こうのは知らんしなあ」

「聞いておけばよかったですね」

今日も今日とて三人にトレーニングをつけるネギだったが、休憩
時間中に思いがけないことを聞かれることとなった。曰く、金髪碧
眼のアルトリアという少女を知っているか、と。

それを聞いたネギは思わず身を固めてしまった。金髪碧眼の少
女。それは最近麻帆帆良に侵入し、次々と魔法使いたちを打倒してい
る者の特徴そのものだ。それに加え、アルトリアという名前。

決して内にある動揺を表に出さず、ネギは問うた。何故そんなこ
とを聞くのかと。そして、返ってきたのはこれまた想像の斜め上。
彼女達はその侵入者と思わしき者と今日一日を過ごし、友達になっ
たのだという。そして、件の人物が別れ際に口にしたのがネギ・ス
プリングフィールドを知っているかとの問いだったのだ。

そして話は冒頭に繋がるのである。

「それで、他には何か言っていたか？」

「うちの担任の先生やー、言ったんやけど特に何も言ってなか
ったえ？」

「そうか……分かった。ありがとう。君達はこのまま休んでいてくれ」

踵を返してその場を離れていくネギに、どうにも三人は違和感を感じていた。彼女、アルトリアの話をしてからというもの、どこかおかしい。だが、そのどこか、というのが何なのかを明確に示せるものは三人の中にはいなかった。

もし、それを指し示すことが出来るとしたら、それはただ一人。

「ククク、奴のことが気になるみたいじゃないか」

この世界で誰よりも、彼のことを知るこの少女以外にはありえない。

「さて、聞きたいことがあれば教えてやろう。勿論、ただではないがな」

闇の福音は、人を惑わす魅了の笑みを浮かべた。

「何故、付いてきている」

「えーっと、それは……」

「あははは」

「あーっ〜」

「私はお嬢様の護衛ですから」

夜も深まった頃、ネギは寮の部屋を抜け散策にかりだした。目的は勿論侵入者、アルトリアとの接触である。出来る限り多くの場所を回りたいという考えから杖に跨り空を駆けようとしたその時、近くの影から何ものかの気配、それも複数が存在することに気がついた。一体誰なのかと確認してみたところ、彼女達が正体だったというわけだ。

「ふう……こんな時間に出歩くのを、教師としては許可できないのだが？」

「で、でも！ アルトリアに会いに行くんでしょ！？」

その反応でネギは大体を悟った。彼女達は、アルトリアが侵入者であると知ったのだ。侵入者である彼女が、今まで何をしてきたのかも。だからこそ、友として何故こんなことをしているのか問いただしたいのだろう。

「全く、余計なことをしてくれたな」

未だ姿を見せない”もう一人”に悪態をつく。一体、何を考えているというのか。いや、特に何も考えていないのだろう。彼女は絶対的強者故に、自分の楽しめる方向へと事態を運ぼうとするきらいがある。今回もその一環と言ったところだろう。

「まあいいじゃないか。そっちの小娘共の面倒は全面的に私が引き受けてやるんだからな」

「手出しは無用だぞ」

「分かっているさ」

当初の予定通り、とはいかないもののネギは夜の麻帆良へと繰り出した。

その後、一行は明日菜達が昼間アルトリアを案内したという場所を優先して散策を行った。既に二つの場所を散策し終え、今は三つ目に向かっていている所だ。

「ねえ、アルトリアに会ったらどうするつもりなの？」

「……………」

それにネギは答えなかった。答える必要はない、ということではなく答えが自分でも分からなかったからだ。既に、ネギの中では確信に近いものが存在している。根拠などない。ただ、漠然とした予感だ。

「そう心配するな。悪い様にはしないはずだ」

質問をした相手であるネギではなくエヴァンジェリンが答えたことに明日菜は若干訝しがるが大人しく引き下がった。自分達はエヴァンジェリンが帯回しているからこそ同行が許されているのであって、彼女の機嫌一つで即刻寮へ戻されかねないことを理解しているからだ。

しかし、不満であることには変わりないらしく、ムスっとした表

情を浮かべている。

「この辺りでいいか」

そんなことをしている間に、ネギが突如立ち止まる。何をするわけでもなく、その場にとどまる。明日菜達はネギが何をしているかを察することは出来なかったが、裏に身をおく刹那はその意図を把握……いや、その存在を勘づいたが故に理解した。

「お嬢様、明日菜さん、宮崎さん。気をつけてください」

「せつちゃん、急にどーしたん？」

「何者かが、近くにいます」

何者か、などと表現する必要は無い。誰かなどは分かり切っている。だからこそ、ネギはその名を口にする。

「私が、ネギ・スプリングフィールドだ。一体、私に何の用かな？」

ネギの目の前に、一つの影が降り立つ。簡素な鎧を身に纏い、目を隠すヘルムを身に付けた金砂の髪を持つ少女。無論、ネギはヘルムの下に隠された瞳が翡翠の色を持っていると知っている。

「アルトリア平行世界の彼女」

こうして、彼は彼女では無い彼女と会合する。

その48(後書き)

今週金曜から一応冬休み突入。
どうもバイトは落ちたっぽいです。

その49(前書き)

新年一発目の更新です！
皆さん今年も一年よろしくお願ひします！

その49

「貴方が、ネギ・スプリングフィールドですか」

「……………」

既に名乗りはあげている。そのためネギは返事をすることなく、ただアルトリアが発した声に聞き入った。おぼろげだった記憶が、鮮明に蘇るようだった。やはり、姿だけではない。

「故あって、立ち会ってもらいます」

腰に刺した西洋剣を抜き放ち、正眼に構える。真つすぐに此方を見据える彼女から漂う気配は、その小柄な体躯とは裏腹に苛烈。それだけで、彼女がかなりの實力を持っていることが伺える。

「分かった」

己の影に手を突っ込み、父から託された杖を取り出す。そして同時に戦いの歌を発動。杖は背に吸着させ、構えをとる。これで準備は整った。後は戦うのみ。

「光栄に思え。私が開始の合図を出してやろう」

二人の丁度中間に躍り出たエヴァンジェリンは高々と腕を上げる。そして、一拍置いたのち……

「始め！」

掛け声とともに勢い良く振り下ろした。

先手を打ったのはアルトリアだ。彼女は身に纏う魔力をジェット噴射の様にして加速し、ネギを一足飛びで間合いに捕える。瞬動とは違った高速移動にネギは一瞬瞠目するが、すぐさま気を取り戻し手に魔力を集中させ迎撃態勢に入る。

斬り下ろし、斬り上げ、薙ぎ払い。次々と繰り出される剣撃を、ネギは余裕を持ってさばき続ける。だが、余裕があるにも関わらずネギは一行に攻勢に出ようとはしなかった。

(懐かしい、か)

それもそのはず。ネギはアルトリアの剣技に見入っていたのだ。摩耗した記憶の中でも一際輝く彼女の姿。その中には当然、彼女の戦う姿も残っている。アルトリアの剣は、その記憶と寸分たがわぬものだった。

かつて憧れた彼女の剣。それが今、目の前にある。歓喜せずにいられようか。懐かしみずにいられようか。いつそのまま、体力尽き果てるまでぶつかりあっていれば……そんな欲求がネギの中にもわいてくる。

(……ん?)

清廉だった技に、僅かな歪みが混じり始めたことにネギは気付く。アルトリアの顔を見れば、そこに焦燥が感じられる。ようは、焦っているのだ。己が技が一切通用していないことに。

「……やってみるか」

今の自分は教師。その事を思い出したネギは一つ思い浮かんだことがあった。それを実行するために、ネギはアルトリアの一撃を強く弾き飛ばし、一端間を開けた。そして……

投影、開始！

窮地に陥らぬ限りは使わぬと決めていた魔法をあえて行使する。作り出した武器は、アルトリアが持つ西洋剣と寸分たがわぬ模造品。

「……同じ土俵に立つということですか」

アルトリアの口調には若干の苛立ちが籠もっている。それもそうだろう。自分の得意とする土俵に、敵が自ら上がってきたのだ。侮られたと感ずるのも無理は無い。

「何、そう怒るな。そもそも私は拳より剣の方が得意だ。それより、だ。アルトリア。今から、お前の目指すべき頂きの片鱗を見せてやる」

「なに？」

ネギは構える。アルトリアと全く同じ構えを。記憶にある彼女の太刀筋を、もう一度思い浮かべる。出来る。運のいいことにこの体は才能に満ちている。そう長くない時間なら何とかボ口を出さずに演じきれるだろう。

「さあ、行くぞ！」

ネギは自信の持つ魔力量にものを言わせて強引に魔力放出を疑似再現する。アルトリアのものとは比べるべくもないほどに乱雑で、運用効率の面から見れば落第を貰うだろう。だが、それでも速さや力強さはアルトリアのそれと同等以上。ネギは手に持つ西洋剣を振り下ろす。

「つく！」

力任せの魔力放出に面を喰らったものの、アルトリアはすぐさま剣を迎撃に向かわせる。

「おも、い！？」

剣から伝わる衝撃は、アルトリアが今まで感じたことが無いほどに重かった。それでも負けじと魔力を放出し、ネギをはじき返す。そして、今度は自分からも仕掛けていく。

その光景を目にした傍観者達は開いた口が塞がらなかった。同じ。そう、全く同じなのだ。二人の動きが。まるで合わせ鏡のように同じ動きで同じ剣撃を繰り返している。

だが、その光景もそう長くは続かなかった。アルトリアが、徐々に押され始めたのだ。それは技術の差。僅かに荒のあるアルトリアと、それがないネギの差。

「そら、その程度か！」

「まだ、まだあ！」

既にアルトリアの中には当初の目的など頭になかった。自分と同じ……いや、根幹は同じだが自分の更に一つ上をいくネギの剣技に

アルトリアも魅了されたのだ。そして、戦い続ければ続けるほど、自分の腕が上がっているとも感じていた。そして、自分の腕の上昇に合わせて、相手もまた段階を上げている。このまま戦い続ければ、どれほどの高みまで登っていけるのだろうか。

アルトリアは先の見えぬ高まりに、ただただ心を躍らせていた。

その49 (後書き)

オリジナルは次回で終了予定。
その後は学際へ向けてGOかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1136j/>

アーチャー”が”憑依

2012年1月3日02時48分発行